
西村京太郎
長編 新トラベルミステリー
南紀殺人ルート
くろしお
KODANSHA NOVELS
講談社ノベルス

著者のことば

この作品は、講談社で出す殺人ルートシリーズの二作目である。二作目に、南紀を選んだのは、南紀という言葉や、地方に、強く惹かれるものがあるからである。

海岸線は、変化に富み、陽光が輝やき、観光客があふれている。ここには、さまざまなものがある。海があり、山があり、温泉があり、そして、殺人も。



神紀殺人ルート

西村京太郎

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

ブックデザイン＝市川英夫
カバーイラストレーション＝辰巳四郎
本文イラストレーション＝山野辺進

目次

第一章　和歌山——7
第二章　南紀・串本——29
第三章　伊勢線・河芸駅——61
第四章　合同捜査会議——87
第五章　殺しへのバイパス——111
第六章　第二の壁へ——138
第七章　夢の島——164
第八章　最後の旅——187

第一章　和歌山

1

南紀への入口、和歌山市には、二つの駅がある。

国鉄のターミナルである和歌山駅と、南海電車のターミナルである和歌山市駅である。

昔、といっても、十数年前だが、その頃は、和歌山、東和歌山、和歌山市と、似たような駅名が三つあって、旅行者は、戸惑ったものだった。

それが、東和歌山駅が、和歌山駅になり、和歌山駅は、紀和と、変った。

和歌山駅は、紀勢本線だけでなく、阪和線、和歌山線も入ってくる大ターミナルになっている。

その和歌山駅のすぐ前にあるホテル「南紀」で、七月三日の午後、事件が、起きた。

午後三時少し過ぎだった。

泊り客の一人が、一階のロビーにある男子用トイレに入ったところ、洋式トイレの隙き間から、赤いものが、流れ出ているのを見つけた。

糸のように細いものだったが、血ではないかと思い、すぐ、フロントに知らせた。

フロント係が、ボーイと一緒に、その洋式トイレのドアを開けたが、そこに、胸を刺されて、うずくまっている中年の男を発見したのである。

すぐ、救急車が呼ばれ、男は、近くの救急病院に運ばれたが、手術する前に、死亡が確認された。

和歌山東警察署から、パトカーも、駈けつけた。

明らかに、殺人事件だった。

和歌山県警の春木警部が、この事件を、担当することになった。

被害者は、ホテル「南紀」の泊り客で、宿泊カー

ドによれば、大阪市内に住む、安藤英夫、四十六歳と、なっていた。
昨夜、七時頃に、チェック・インしている。
「三時十二分頃に、安藤様に、お電話がありました」
と、フロント係がいう。
「それは、殺される直前じゃないか」
春木警部は、眼鏡の奥の細い眼を、光らせた。
「そうなりますか」
フロント係は、いやに落着いた声で、いった。
「それは、男だったのか？　それとも、女かね？」
「男の声でした。そこに、大阪の安藤という客が泊っている筈だから、電話をつないでくれといわれたんです」
「その男は、名前を、いったかね？」
「東京の真田と、いわれました」
「それで、つないだんだな？」
「はい、五〇一二号室の安藤様に、お回ししました」
「電話の内容は、わからんだろうね？」
「そこまでは、わかりません」
「その電話のあと、被害者は、一階ロビーに降りて来たんだろう。そして、トイレで、殺されたか。君は、被害者が、一階ロビーに降りて来たのを、見たかね？」
「それが、見ておりません。ごらんのように、エレベーターのあるところは、ここからは死角になっておりますし、トイレは、そのエレベーターの向う側にあります。もう一つ、あの時刻に、団体のお客様が、お着きになったので、一階ロビーが、混雑しておりましたから」
「すると、犯人らしき人物も、見ていないんだな？」
「はい。申しわけございませんが」
「電話して来た男の声だがね、何か、特徴はなかったかね？」

「特別に、ありませんでしたね」
「訛りはどうだ？　関西弁とか、東北、或いは、九州の訛りといったものは、なかったかね？」
「標準語だったと思いましたが」
「何歳ぐらいの感じだったね？」
「それも、よくわかりません。三十歳前後という感じでしたが、自信はありません」
（何にもわからんのじゃないか）
春木は、じろりと、フロント係を睨んでから、部下の刑事たちと、被害者の泊っていた五〇一二号室に、あがって行った。

2

ダブルの部屋である。
被害者は、一人で、泊っていたが、ゆったりした部屋がいいと、ダブルの部屋にする客もいるから、別に、不思議とは感じなかった。
春木自身も、最近、太り気味なので、シングルルームより、ダブルの方が、寝やすい。
問題は、被害者、安藤英夫の持ち物だった。
部屋にあったのは、釣具一式だった。海釣りの道具である。
そういえば、死体のはいていた靴は、底がゴムになっていた。磯釣りの時、滑らないためだろう。
釣具と一緒に、クラブの名前の入った帽子もあった。
「恐らく、ここで、釣り仲間と、落ち合うことになっていたんじゃありませんか？」
部下の一枝刑事が、至極、当り前のことをいった。
「南紀へ釣りか」
「羨やましいですね」
「しかし、殺されちまったら、何にもならんさ」
「そりゃあ、そうですね」
「すぐ、大阪へ連絡してくれ。家族に知らせるん

だ。家族に、何か、犯人の心当りが、あるかも知れん」
「わかりました」
安藤英夫は、宿泊カードに、自宅の電話番号を、記入してなかった。
一枝刑事は、大阪の104で、電話番号を調べてから、連絡を取った。
「安藤でございますが」
という女の声が、電話に出た。
四十三歳の一枝刑事は、こういう連絡は、何度やっても、嫌だなと思いながら、
「安藤英夫さんの奥さんですか？」
「はい」
「こちらは、和歌山の警察ですが、ご主人のことで、お話があるのです」
「主人が、何か？」
と、相手の声は、もう、甲高くなっている。一枝は、重い気持で、
「ご主人が、亡くなられました」
「――――」
相手が、絶句してしまったのが、わかった。
こういう時は、心を鬼にして、用件だけをいってしまう方がいい。
「ご主人は、和歌山駅前のホテル『南紀』にお泊りでしたが、殺された可能性があるのです。それで、遺体を解剖に回さなければなりません。至急、こちらに、おいで願えませんか。和歌山駅近くの東警察署です」
「はい。東警察署で、ございますね」
「そうです。それから、ご主人は、ここで、誰かと、落ち合うことになっていたようなのですが、心当りは、ありませんか？」
「東京の友だちと一緒に、磯釣りに行くとはいっておりましたけど」
「相手の名前は？」
「聞いておりません」

「そうですか」
「主人は、本当に、亡くなったんでしょうか？」
「残念ですが、本当です」
一枝は、電話を切り、ふうッと、小さく息を、吐いた。
「何か、わかったかね？」
と、春木警部が、きいた。
「被害者は、東京の友人と、ここで落ち合うことになっていたようです。そして、南紀へ磯釣りに行く予定だったと、奥さんが、いっていました。ただし、その相手の名前は、わからないと」
「電話して来た男の名前は、東京の真田といったそうだ」
「その男と、ここで、落ち合うことになっていたんでしょうか？」
「さあ、それは、どうかね。犯人が、その名前を使って、電話して来たのかも知れん」
春木が、いったとき、部屋の電話が、鳴った。
春木が、受話器を取った。
「こちら、フロントですが」
という、押し殺した声が、聞こえた。
「何だね？」
「今、東京の真田とおっしゃる方が、安藤様に、会いたいと、着かれたところです」
「逃がすなよ」
春木は、一枝刑事を従えて、部屋を飛び出し、五階のエレベーターコーナーに向って、突進した。
ロビーに降りると、問題の男は、すぐわかった。フロントのところに、釣道具を肩に下げ、フィッシング・ハットをかぶった男が、立っていたからである。
春木が、背後から、近づいて、
「真田さんですね？」
と、声をかけると、相手は、びっくりした顔で、振り向いた。
年齢は、四十五、六歳といったところだろうが、

大きな身体だった。
「あんた方は？」
と、男が、きいた。
春木は、警察手帳を見せた。
「和歌山県警の春木です」
男は、やはり、警察手帳を見ると、一般的な反応の仕方をした。
不快そうに、眉をひそめたあと、急に、不安気な顔になって、
「安藤さんが、どうかしたんですか？」
「ちょっと、こっちへ来て下さい」
春木は、男を、ロビーの端にある喫茶室へ引っ張って行った。
「安藤さんに何かあったんですか？」
男は、引っ張られながら、何度も、きいた。釣具が、肩からずり落ちそうになるのを、男は、ゆすりあげるようにしながら、喫茶室の椅子に、腰を下した。
春木は、勝手に、コーヒーを二つ注文してから、
「安藤さんは、二時間前に、殺されましたよ」
と、男に、いった。
男の顔色が、さすがに、蒼くなった。
「誰が、そんなことを？」
「東京の真田という男です」
「冗談じゃない。私が、真田ですよ」
男は、あわてて、ポケットから、名刺を取り出して、春木に、差し出した。
春木は、その名刺に、眼を通した。

〈真田興業社長　真田　誠〉

と、あった。
会社も、自宅も、東京である。
「ふむ」
と、春木は、肯いた。
「今日、ここで、五時に会うことになっていたんで

すよ。ちょっと、おくれましたが、やって来たんです」

真田は早口で、いった。

なるほど、今は、午後五時を十二、三分、回ったところである。

「二人だけで、南紀へ、釣りに行くことになっていたんですか？」

春木は、じろじろと、真田の恰好を見ながら、きいた。どう見ても、磯釣りのスタイルである。

「そうですよ。三日ほどかけて、南紀の海岸を、磯釣りをして歩くことになっていたんです」

「安藤さんとは、どういう関係だったんですか？」

「釣り仲間ですよ」

と、真田が、いったとき、ウエイトレスが、コーヒーを運んで来た。

「まあ、飲んで下さい」

と、春木は、すすめてから、

「東京と大阪の人が、釣り仲間というのは、どういうことですか？」

「安藤さんは、去年まで、東京にいましたからね。その当時の釣り仲間なんですよ。安藤さんも、大阪に越してから、初めての海釣りというので、張り切っていたんですがねえ」

「安藤さんは、何をしている人なんですか？」

「弁護士さんですよ」

「ほう、弁護士の先生ですか。誰かに、恨まれていましたか？」

春木は、無遠慮なきき方をした。

真田は、当惑した顔になって、

「それについては、私には、わかりませんね」

「しかし、もう何年ものつき合いだったんじゃありませんか？」

「そうですがねえ。私は、安藤さんとは、釣りを通じてのおつき合いで、仕事上のつき合いじゃないんですよ。だから、安藤さんが、仕事の上で、何かトラブルに巻き込まれていたとしても、私には、わか

らんのです」
「去年、安藤さんが、大阪に引越したのは、どんな理由からなんですか？」
「安藤さんは、もともと、大阪の人だったし、奥さんが、大阪の人ですからね。その関係からじゃありませんか」
「失礼だが、あなたのアリバイは、ありますか？今日の午後三時前後のアリバイです」
「確かに、失礼ですね」
と、真田は、言返してから、
「その時刻には、新幹線の中でしたよ。今日の一二時四二分東京発の『ひかり』に乗ったんです。新大阪に着いたのが、午後四時少し前だから、間違いなく、新幹線の車内でしたよ」
「新大阪から、ここまでは？」
「地下鉄で、天王寺へ出て、天王寺から、阪和線の快速に乗ったんです。午後五時の約束だったけど、ジャスト五時に着く列車がなくて、和歌山に着いたのは、五時一〇分でしたよ。それで、駅から、このホテルまで、駈けましたよ。まさか、死んでるなんて、思いませんでしたね」
「ふーん」
と、春木は、唸りながら、真田のいうことを、手帳に、メモしていた。
「午後三時に、新幹線の車内にいたことは、証明できますかね？」
春木は、相変らず、無遠慮に、じろじろ、相手を見て、きいた。
「そうですねえ。いちいち、証明しながら、列車には、乗りませんからねえ」
「はっきりしたアリバイはないですか？」
「そうだ。食堂車で、友人に会いましたよ。それなら、証明になるでしょう？」
「それが、事実なら、証明になりますがね。何という友人ですか？」
「浜谷という大学の同窓でね。五年ぶりに、食堂車

で、会ったんですよ。今は、名古屋で大学の先生をやっていると、いっていました。英文学を教えてるといってました。彼に聞いてくれれば、わかります」

「聞いてみましょう」

春木は、肯いた。

真田は、ぶぜんとした顔で、

「この私が、疑われるなんてねえ」

「とにかく、真田さん、午後三時少し過ぎに、このホテルに泊っていた安藤さんに、真田の名前で、電話があった。安藤さんは、それで、ロビーへおりて来て、殺された。だから、あなたを、一応、疑うのは、当然でしょうが」

「しかし、警部さん。私が犯人なら、わざわざ、自分の名前で、呼び出したりはしませんよ。違いますか？」

「そう思いますがね。最近は、犯罪も、ひねくれて来て、逆の逆をいく犯人もいるんですよ。犯人なら、そんな馬鹿なことをする筈がないと、思わせておいて、その馬鹿なことをするんですよ。われわれ刑事も、油断は出来んのです」

「それなら、名古屋の友人に、確めて下さいよ」

「やってみましょう。電話番号を教えてくれませんか」

「食堂車で、名刺を貰いましたよ」

真田は、もぞもぞと、ポケットを探し、名刺を一枚くれた。

名古屋K短大である。

春木は、離れた公衆電話のところへ行き、百円玉を何枚か用意しておいて、名刺のダイヤルを回した。

相手の浜谷助教授が出ると、警察だと告げ、真田のことだというと、

「奴が、何かやりましたか？」

と、浜谷は、いきなり、きいた。

「なぜです？」

「奴は、悪党ですからね。これは、冗談じゃなく、いってるんですよ」
「なるほど。ところで、今日、真田さんに、新幹線の食堂車で、会ったそうですね？」
「あっ、そのことですか。確かに、会いましたよ。奴は、南紀へ釣りに行くとかいってましたがね」
「東京を何時に出た新幹線か、覚えていますか？」
「ああ、覚えてますよ。東京を一二時四二分に出る『ひかり』です。大学に、午後三時までに、戻らなければならなかったんで、この列車にしたんですよ。会議には、間に合いました」
「真田さんというのは、どんな風に、悪党なんですか？」
「他人を犠牲にして、自分は、儲けようという男でね。それに、嘘つきです。だから、ずいぶん人から、恨まれていると思いますよ」

3

春木は、喫茶室に戻ると、真田に向って、
「浜谷さんの証言は、とれましたよ。一応、あなたのアリバイは、成立です」
「当然ですよ。私が、安藤さんを殺す筈がないんだから」
「それで、これから、どうなさるんですか？　東京へ、帰られますか？」
「いや、家の者にも、南紀で、大きな鯛を釣って来てやると、いって出て来ましたからね。それに、串本のホテルに、予約してあるんです。今から、行きたいんですがね。構いませんか」
「何というホテルですか？」
「ホテル『新串本』です。安藤さんと一緒に泊って、でかい鯛を釣るつもりだったんですがねえ。仕方がありません。ひとりで、楽しんで来ますよ」

「まあ、いいでしょう」
と、春木は、肯いた。
真田が、釣道具を肩に背負って、ホテルを出て行くと、春木は、一枝刑事に、
「すぐ、串本のホテル『新串本』に、電話するんだ。今日、真田と、安藤が、予約しているかどうか」
「今のあの男の言葉を、信じていらっしゃらないんですか？」
一枝がきくと、春木は、ニヤッと笑って、
「おれは、ああいう男の言葉は、全く、信用しないんだよ」
「しかし、午後三時に、新幹線に、乗っていたことは、証明されたんでしょう？」
「一応はね。だが、証言した大学の先生も、真田という男は、油断がならんと、いっていたよ」
「友人にも、人気のない男なんですね」
「いいから、早く電話してみろ！」
と、春木は、怒鳴った。
一枝は、あわてて、公衆電話のところへ、飛んで行った。
五、六分すると、戻って来て、
「確かに、今日一日、ホテル『新串本』に、二人は、予約しています」
「そうか」
と、春木は、いっただけだった。
午後七時をすぎ、暗くなってから、被害者、安藤英夫の妻、和子が、捜査本部の設けられた東警察署に、着いた。
若いなというのが、春木の第一印象だった。
被害者は、四十六歳である。今、眼の前にいる妻の和子は、それより、ひとまわりは、若そうである。
春木が、ぶしつけに、年齢を聞いてみると、やはり、十三歳も若い三十三歳だった。
顔は、さすがに蒼ざめていたが、それでも、美しさは、輝やいてみえた。

（よく、こんな、若くて、きれいな女が、あの被害者と結婚したものだな。そんなに、弁護士というのは、女にもてるのだろうか？）

春木は、そんなことを考えながら、まず、和子を、死体に引き合せた。

「ご主人に間違いありませんか？」

「ええ、主人ですわ」

と、和子は、肯いた。

涙はなかった。

「それで、奥さんには、犯人逮捕に、協力して頂きたいのですよ」

春木は、じろじろ、和子を見ながら、いった。

（誰が見たって、不釣合いな夫婦だ。ひょっとすると、この女が、殺しの原因じゃないのか）

「何でも、お話しますわ」

和子は、殊勝ないい方をした。

「去年、東京から、大阪に、越して来られたそうですな？」

「ええ。去年の七月ですから、丁度、一年ですわ」

「なぜ、越して来られたんですか？」

「私の実家が、大阪だからですわ」

「それだけの理由ですか？」

「ええ」

「真田さんを、ご存知ですか？」

「サナダ？　ああ、東京にいた頃の、主人の釣り仲間の方でしょう」

「ご主人と、その真田さんと、南紀に、釣りに行くことになっていたのを、ご存知でしたか？」

「真田さんと一緒とは知りませんでしたけど、四、五日、南紀で、磯釣りをして来るとは、いっていましたわ」

「ご主人は、昨日、ここのホテルに入っているんですが、ホテルから、連絡はありましたか？」

「ええ。ホテルに着いた時に、連絡がありましたわ」

「わからないことが、一つあるんですがね」

「どんなことでしょうか？」
「大阪から和歌山へなら、その日の中に、ゆっくり着ける。一時間ちょっとしか、かからない。それなのに、なぜ、ご主人は、前日に、ホテルに、チェック・インしたんですかね？　お金が、あり余ってるからかな？」
「主人は、急ぐのが、嫌いなんです。ゆっくり、やる主義だから、前日に、泊ったんですわ。それに、きっと、昨夜、主人は、マッサージを呼んでますわ」
「なぜですか？」
「主人は、マッサージを受けるのが、好きなんです。私が、家では、やってあげないんで、旅に出ると、いつも、マッサージを呼ぶんですわ」
「おい。一枝刑事！」
と、春木は、大声で呼んだ。
「わかってます。すぐ、ホテルに電話して、確めます」
一枝は、肩をすくめるようにして、電話に、手を伸ばした。
「やっぱり、被害者は、昨日の午後十一時に、マッサージを呼んでいます。特に入念にやって貰い、一万円のチップを弾んだそうです。マッサージ婦の話では、かなり、こっていたということです」
「そうでしょう」
と、和子は、満足そうに、春木を見た。
夫の死を悲しんでいる気配はない。多分、この女にとって、夫が殺されたことは、ショックではあっても、悲しみでは、ないのだろう。
（まあ、これだけきれいなら、いくらでも、再婚のチャンスは、あるだろう）
と、春木は、思っていた。
若い刑事が、和子を、今夜泊るホテルに案内して行った。
その頃から、雨が降り出した。
まだ、当分、梅雨は、あけそうにない。

4

春木は、大阪府警と、東京警視庁の両方に、捜査の協力を依頼することにした。

弁護士の安藤英夫が殺された動機が、大阪にあるのか、東京にあるのか、わからなかったからである。

一年間の大阪での生活の間に、誰かの恨みをかったのか、それとも、その前の東京の生活の間なのか。

午後十時を過ぎてから、春木は、念のために、串本のホテル「新串本」に、電話をかけた。

「東京の真田さんなら、さっき、お着きになりました」

と、そのホテルのフロント係が、いった。

「さっきというと、何時頃かね？」

「確か、九時五十分頃です」

それなら、串本行の特急の最終に、あの男は、乗ったのだろう。

串本行のL特急「くろしお28号」は、一八時五一分に、和歌山を出る。串本着は、二一時三〇分である。

午後九時三十分に串本に着けば、五十分にはホテルに入れるだろう。

「お部屋へ、おつなぎしますか？」

フロント係が、きいた。

「いや、それはいい。彼は、ひとりで、来たのかね？」

「はい。おひとりでした。予約は、お二人だったんですが」

「それでいい」

「真田様は、何か、問題を起こしそうな人物なんですか？」

「いや、そんなことはないよ」

と、春木は、いった。

電話を切ったあと、春木は、腕を組み、考え込んだ。

今夜は、捜査本部に、泊り込むつもりなのである。

一枝刑事は、難しい顔をしている上司に、お茶をいれながら、

「警部は、何を考え込んでおられるんですか？」

「もちろん、今度の事件のことだ」

春木は、無愛想な顔で、いった。

「それは、わかっていますが、事件の何をかと、思いまして」

「君は、今度の事件を、どう思うね？」

春木は、きいた。

一枝は、質問された生徒みたいに、首をかしげて、考えていたが、

「普通の殺人事件だと思いますが」

「そんなことを、きいてるんじゃないよ。殺人事件であることは、わかってる。どこか、おかしなところはないかと、きいてるんだ」

「おかしなところですか？」

「そうだよ。犯人の行動として、おかしなところはないかだ」

「そういえば、私には、犯人が、なぜ、ホテルの中で、殺したのか、それが、わかりません。私なら、ホテルの外で、人のいないところで、殺しますね」

「それだよ」

春木は、ぱちんと、指を鳴らした。いや、鳴らしたつもりだったが、指が太いので、びしッと、鈍い音がしただけである。

「やはり、警部も、同じ疑問を、持たれたんですか？」

「おれはね、外へ連れ出して殺す方がいいとは、思わない。おれが犯人なら、逆に、安藤英夫の部屋に行って殺す。その方が、他人に見られずにすむし、逃げるのも、楽だ。部屋で殺し、ドアを閉めておけば、発見されるのが、おくれるから、ゆっくり逃げ

られる筈だ」
「確かに、そうですね」
「これまで、何件か、ホテルでの殺しを見て来たがね。泊り客を、わざわざ呼び出して、ロビーの傍のトイレで殺したなんていうのは、初めてだよ」
「そういわれれば、二年前に、新宮で起きたホテルでの殺人でも、客室に、死体が、ありましたね」
「それが、犯人にとって、一番安全だからだよ。部屋に入ってしまえば、密室だ。ゆっくりと殺して、逃げることが出来る。だが、今度の犯人は、そうはしなかった」
「トイレは、誰が入って来るかわかりませんから、犯人にとって、一番、危険な場所だと思いますね」
「ホテルのロビーのトイレというのは、各室にトイレがついているから、利用者は少ないが、それでも、今、君がいったように、いつ、他人が入って来るかわからない。ホテルの中で、一番、殺人に適さないところかも知れないね」
「しかし、今度の犯人は、わざわざ、そのトイレに連れ込んで、殺していますね」
「そこが、奇妙なところなんだ。犯人は、あのホテルに、安藤が泊っているのを、知っていた。部屋番号は、フロントで聞けば、教えてくれる。電話でもだよ。だから、犯人は、黙って、その部屋に行き、ドアをノックすればいいんだ。安藤が、ドアを開いたところを、押し込んで、刺せばいい。簡単に出来る筈なんだ。それなのに、犯人は、わざわざ、部屋の外に呼び出している。多分、電話で、ロビーにおりて来てくれと、犯人は、いったんだ。安藤は、エレベーターで降りてくる。犯人は、待っていて、近くのトイレに連れて行って、刺殺した。なぜ、こんな殺し方をしたんだろう？」
「なぜですかね。ひょっとすると、犯人が、安藤のことを、ひどく憎んでいて、こいつは、トイレで死ぬのがふさわしいとでも、思っていたんじゃありませんか？」

「ふむ」
「あまりいい考えじゃありませんが――」
「そうでもないぞ。案外、君の考えが、正しいかも知れんよ」
「そうでしょうか」
一枝刑事は、嬉しそうに、顔を、ほころばせた。
「安藤英夫は、弁護士だ。弁護士といえば、社会的な地位も高いし、人から尊敬される職業だよ。その弁護士が、殺された。ひょっとすると、何か、汚いことをやっていたのかも知れない」
「いわゆる悪徳弁護士という奴ですか？」
「そうだ。もし、悪徳弁護士だったとすると犯人は、そういう汚い奴は、トイレで殺すのが、一番ふさわしいと思ったのかも知れん。どうだ。これなら、何とか、理屈に合うだろう？」
「そうですね。殺された安藤英夫は、本当に、悪徳弁護士だったんですか？」
「可能性はあるよ。真田という男は、どうも、悪党らしい。その悪党とつき合っていたんだから、立派な弁護士だったとは、思えないからな。もっとも、大阪府警と、東京警視庁の捜査を待たないと、はっきりしたことはいえないが」
と、いってから、急に、
「どうしたんだ。いやに、やかましいじゃないか」
と、耳をそばだてた。
廊下で、男の怒鳴り声がする。
春木が、気になって、出て行くと、受付のところで、二十五、六歳の若い男が、受付の警官を相手に、大声で、何かわめいているのだ。
聞いていると、旅館を世話しろと、怒鳴っているように、聞こえた。
世話好きの春木は、当惑している警官に向って、
「どうしたんだ？」
と、声をかけた。
若い警官は、ほっとした顔で、
「この人が、警察のおかげで、旅館に泊れなくなっ

たから、どこか、世話しろと、いってるんです。そういわれても、困るんで、どうしたらいいかわからなくて」

「警察のおかげで――？」

春木は、じろりと、相手の顔を見た。

背の高い青年だった。

大きなリュックサックを背負い、カメラをさげ、スニーカー姿というところをみると、南紀を廻って歩く観光客らしい。

（どこかで、見たような顔だな）

と思いながら、

「警察のおかげで、旅館に泊れなくなったというのは、どういうことだね？」

と、きいた。

青年は、まだ、興奮のさめやらぬ蒼い顔で、

「僕を、ここへ引っ張って来て、傷害の犯人扱いをして、遅くまで、引き止めておくもんだから、旅館が、とれなくなっちゃったんですよ」

「ああ」

と、春木は、思い出した。

六時頃、三好という刑事が、この青年と、国鉄の車掌をつれて、廊下を歩いていたのである。

「三好刑事が、まだいたら、ここへ来るようにいってくれ」

と、春木は、受付の警官に、いった。

当直だった三好が、上から降りて来た。

「警部。何か用ですか？」

と、呑気な声を出した。

「この人を、知ってるだろう？」

春木が、きくと、三好は、青年の顔を見て、

「なぜ、まだ、ここにいるんだ？　事件は、もう解決した筈だろ」

「時間が、遅くなってしまったんで、旅館が、とれなくなってしまったんですよ」

青年は、口をとがらせた。

「警察は、そこまで責任はとれんよ。もともと、君

が、悪いんだから。駅前のホテルなんか、部屋があいてるんじゃないの？」

「僕は、そんな高いホテルには、泊れないんですよ。安い旅館が、もう、一杯なんです。ここで、取調べをされなければ、今頃、串本へ、行ってたんだ。責任をとって貰えないですか」

「話にならん」

三好刑事は、舌打ちした。

春木は、そんな三好に向って、

「どんな事件だったんだ？」

「この男が、和歌山線の列車の中で、車掌を殴って、怪我をさせたんです。それも、悪質でしてね。一度、おさまったのに、終点近くなったら、また乗務員室に押しかけて行って、殴ったんですよ」

「悪いのは、車掌の方だ。こっちは、止むにやまれず、殴ったんですよ」

青年も、負けずに、いい返している。

「調書は、とったんだろう？」

と、春木は、三好にきいた。

「警部が、見るほどのことは、ありませんよ」

「しかし、警察のおかげで、旅館がとれなくなったというのは、警察の信頼に、かかわってくるじゃないか。とにかく、今は、PRの時代だからね」

春木は、そんなことをいって、調書を、持って来させた。

「殺人事件の捜査の方は、いいんですか？」

三好は、調書を渡しながら、そんなことをきく。

「今は、大阪や東京の調査待ちだよ。被害者のことが、よくわからないんじゃ、捜査のすすめようがないんだ」

「真田という東京の男が、犯人じゃないんですか？」

「かも知れんが、一応、アリバイがあるんだ」

春木は、喋りながら、調書に、眼を通した。

青年は、東京のサラリーマンで、名前は、畑山恵。二十五歳である。

四日間の休暇をとって、東京から、南紀の旅行にやって来た。

まず、奈良へ行ったのは、中学生の頃、修学旅行で行ったのを、思い出してである。

奈良から、関西本線で、王寺に出て、王寺から、和歌山線に乗った。

王寺発一三時一四分の列車である。行先は、和歌山。

乗ってすぐ、畑山は、車掌の太田研一（四十二歳）との間で、足を踏んだ踏まないで、ケンカになった。

その場は、一応、車掌が、謝って、おさまったが、終点の和歌山が、近づくと、畑山は、また、乗務員室に押しかけ、太田車掌とケンカになり、殴りつけた。そのため、太田車掌は、転倒して、頭部に負傷した。全治三日間の怪我である。

和歌山へ着いたあと、警察に通報し、取調べということになった。

「悪質なんですよ。いったん、おさまったのに、また、むし返して、殴りつけたんですからね。それに、悪いのは、あくまで、車掌だと主張するので、調書を作るのが、長引いたんです。だから、時間が、かかって、旅館がとれなくなっても、自業自得というもんですよ」

三好刑事は、吐き捨てるように、いった。

「この列車は、何時に、和歌山に着いたんだ？」

と、春木は、きいた。

三好が、「何時でしたかなあ」と、考えていると、畑山が、横から、

「一六時〇五分、定刻に着きましたよ」

と、いった。

「午後四時五分か。それで、何時まで、調べは、かかったんだ？」

「確か、午後八時頃までです」

「そりゃあ、長過ぎるじゃないか」

あきれて、春木は、三好を、睨んだ。

三好は、肩をすくめた。
「仕方がありませんよ。この男が、六時頃になると、腹がへったから、夕飯を出せというし、のどが渇くから、コーヒーが飲みたいというしで、時間が、かかったんですよ」
「当然でしょう。僕は、来たくて、ここに来たんじゃないんですからね。連れて来られたんですよ。夕食を出すくらい、当然じゃありませんか？」
「だから、食事は、とってやっただろう！」
三好が怒鳴った。
「お前さんが、ケンカして、どうするんだ？」
春木は、三好刑事を、叱りつけた。それから、畑山という青年に眼をやった。
「結局、どうして貰いたいのかね？」

5

「安く泊れるところを、世話して貰いたいんですよ。新人サラリーマンだから、高いホテルには、泊れないんです」
畑山は、しらッとした口調で、いった。
（こういう図々しいのが、現代の若者なのか？）
と、春木は、思いながらも、一方では、何となく、この青年が、好きになってきていた。
どことなく、憎めない感じがしたのである。それが、なぜなのか、春木自身にも、よくわからなかった。
一枝刑事が、春木を、呼びに来た。
「大阪府警から、連絡が入っています」
「そうだ。本職の方を忘れちゃいかんな。三好刑事、何とか面倒をみてやれや」
春木は、三好に、いい残して、自分の部屋に戻った。
机の上に置かれた受話器を取りあげた。
大阪府警本部の八木という警部からだった。
「安藤英夫について、これまでにわかったことを、

お知らせします」
「誰かに、恨まれていましたか？」
春木は、せっかちなきき方をした。
電話の向うで、笑った感じがした。
「それは、わかりませんが、安藤は、大阪市東区で、法律事務所を開いていました。しかし、弁護士会に問い合せたところ、安藤は、東京で、サギ事件に関係したことで、三年間、弁護士活動を禁止されていたというのです。それが、今度の事件と関係があるのかどうかは、わかりませんが」
「東京のサギ事件というのは、どんなものなんですか？」
「なんでも、安藤英夫が、景気の悪い会社の社長なんかと組んで、資産家に、インチキ債券を売りつけたり、幽霊地所を買わせたりしたようですが、くわしいことは、まだ、わかりません。なにぶんにも、東京で起きた事件ですから」
「景気の悪い会社の社長ですか」
春木は、真田の顔を思い出していた。
真田興業社長と、名刺に刷ってあった。どうも、怪しげな男だと思っていたのだが、あの男が、東京で、安藤と組んで、サギを働いたのではないのか。
（そうだとすると、あの野郎、釣りだけのつき合いだと、ぬかしやがった）
春木は、腹が立った。
春木は、礼をいって、受話器を置いた。
被害者は、殺されるだけの理由があったのだ。
犯人は、二通り考えられた。安藤英夫が、欺した人間に、復讐されたのか、それとも、仲間割れかである。
東京から、情報が入ってくれば、更に、何かわかるだろう。
「そろそろ、寝るぞ」
と、春木は、一枝に、声をかけた。
一枝が、毛布をかき集めて来た。
春木は、牢名主よろしく、一枝が、毛布を敷いて

いるのを、見やりながら、
「あの図々しい青年は、どうなったんだ？」
「旅館が、どうとかいっていた男ですか？」
「そうだよ」
「留置場が、からっぽなんで、三好刑事が、そこへ泊めたみたいです。あそこなら、タダですから」
「ふーん」
「そっちへ毛布を二枚、持って行きましたから、こっちは、下へ敷くのは一枚で、我慢して下さい」
「一枚じゃあ、明日、起きると、身体中が痛いぞ」
春木は、文句をいった。

第二章　南紀・串本

1

国鉄紀勢本線の串本駅で降りると、駅の入口のところに、「本州最南端の串本駅」の碑が、立っている。
これが、黒い長方形の大理石で出来ていて、まるで、墓石のように見えるのが、何とも、奇妙である。
串本駅が、本州最南端の駅なら、ここには、本州最南端の潮岬がある。
一番くびれた部分に、串本の町があり、その先に、ぷくッとふくれたところが、潮岬である。

台風が、一番よく通過するところとして知られているし、潮岬の最南端に立つと、眼の前に、広大な太平洋が広がり、さえぎるものがないので、水平線が、丸く見えるという。

もう一つの串本の名物は、串本節で有名な「向いは大島」の大島である。

仲を取りもつ巡航船と唄われたように、今でも、串本港の桟橋から、巡航船が出ていて、十分間で、着く。

しかし、この二つの古典的な名所より、今の若い人たちには、串本海中公園の方が、人気があるだろう。

串本駅を降りると、駅前に、バスターミナルがある。

潮岬行のバスも出ているが、ここから、海中公園センター行のバスに乗ればいい。

国道42号線を、海沿いに十五分走ると、海中公園センターに着く。

この辺りの海は、黒潮の関係で、水温が高く、透明度も高いので、サンゴが多く、熱帯魚も多い。

マリンパビリオンと呼ばれる水族館では、水槽に泳ぐ熱帯魚が見られるが、本命は、沖に作られた海中展望塔だろう。

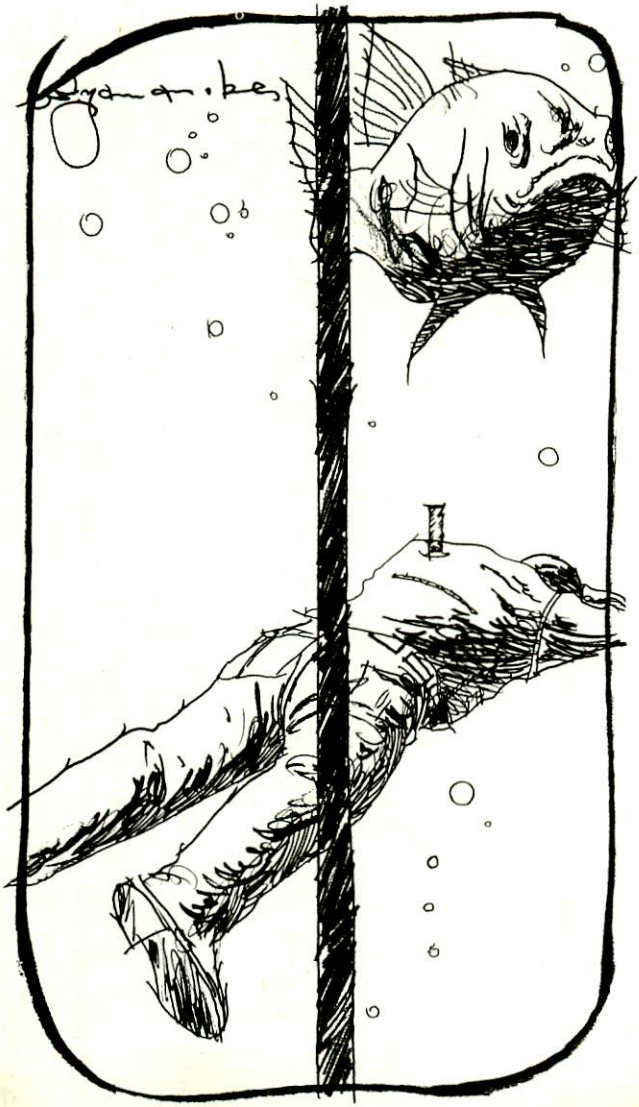
沖の岩礁に向って架けられた鉄筋コンクリートの橋は、朱色に塗られているので、遠くからでも、すぐわかる。

百四十メートルの沖である。

六・三メートルの深さに、展望塔が沈めてあり、らせん階段を降りて行くと、小さな窓から、六・三メートルの南の海の生態が、のぞける仕組みである。サンゴ礁や、海藻の間を、熱帯魚が泳ぎ廻っている。

マリンパビリオンと、海中展望塔の両方を見て、料金は、八百円である。

バスが着くと、どっと、見物客が、海中展望塔に、押し寄せてくる。



午後三時頃も、展望塔の中は、見物客で、あふれていた。

展望窓に押しつけられるようにして、海中の景色を眺める感じになっている。

その人垣が解けた時、中年の男の身体が、急に、ずるずると、崩れ落ちた。

見物客の間から、甲高い女の悲鳴が、起きた。

倒れた男のまわりから、人々が、飛び退った。

男の背中に、ナイフの柄が、突っ立っているのが見えた。血は、ほとんど流れていない。

見物客たちも、とっさに、どうしていいかわからず、呆然として、立ちすくんでいるようだった。

死んでいるのかと、いう顔で、倒れている男を、恐る恐る、のぞいている若い女性もいた。

かかり合いを恐れて、その場から逃げ出して行く人もいる。

係員が、来て、警察に連絡したのは、少くとも、十二、三分たってからだった。

串本の町から、警察が、やって来た。救急車も着いた。が、男は、すでに、死亡していた。

二人の警官の中の一人が、死んだ男の身元を知るために、所持品を、調べている間に、もう一人が、電話で、和歌山県警本部に、連絡をとった。

男のポケットからは、いろいろなものが出て来た。

五十万近い現金の入った財布、いろいろなカードの束、名刺、折りたたんだ南紀の観光地図、煙草にライター、などである。

警官は、名刺の名前と、カードの名前から、死んだ男の名前は、「真田誠」だと、断定し、和歌山県警に伝えた。

2

春木警部が、その知らせを受けたのは、午後三時四十分である。

「間違いなく、あいつだ」
春木は、昨日会った真田の顔を思い出した。
「これは、連続殺人でしょうか？　それとも、別の事件と思われますか？」
一枝刑事が、首筋をなぜながら、春木にきいた。
首筋が痛いのは、昨夜、椅子を並べて、その上で寝たので、寝違えてしまったのである。
「当然、連続殺人だよ。犯人は、安藤と真田が、南紀へ来るのを知っていて、追っかけて来て、殺したんだ」
「同一犯人とすると、動機は、大阪でなく、東京に、ありそうですね」
一枝が、したり顔で、いう。
「なかなか、いいことをいうじゃないか。おれも、同感だよ。殺されたのが、大阪の安藤弁護士だけなら、大阪か、東京か、どちらに動機があるのかわからなかったが、これで、東京に決ったな」
と、春木も、いった。
刑事課長も、同じ意見で、捜査員は、五人から、八人に増やされた。
その中には、三好刑事も、入っていた。
今後の捜査方針を説明したあと、春木は、三好に、
「ところで、例の青年は、どうした？」
「あの図々しい男ですか。あいつは、朝早く、出て行きました。さすがに、タダで、泊めて貰った礼は、いっていましたがね」
「確か、串本へ行くようなことを、いっていたな？」
「そうです。南紀を、ずっと廻ると、いっていました」
「東京の人間だったな？」
「そうです。東京の人間で、名前は、畑山です」
「まさか、あの男が、犯人なんてことはないだろうが――」
春木が、呟くと、三好は、あっさりと、

「奴が、犯人ということはありません」
「それならいいんだがな」
「ホテルで、安藤英夫が殺されたのは、昨日の午後三時少し過ぎです。畑山が、和歌山に着いたのは、一六時〇五分（午後四時五分）です。これは、殴られた車掌が、証言していますから、間違いありません。奴には殺せません」
「そいつは、良かった」
「警部は、奴に、同情されているんですか？」
「別に、同情なんかしとらんよ。ただ、犯人だったら、それと知らずに警察が、宿を貸したとなったら、とんだ恥さらしだからな。それを心配しただけだ」
と、春木は、いった。
春木は、一枝と、一七時四七分和歌山発のL特急「くろしお26号」で、串本に、向った。
海沿いに走る紀勢本線は、素晴らしい景色の連続だったが、列車が、和歌山を出るとすぐ、春木は、座席で、大きないびきをかいて、眠ってしまった。
確かに、美しい海岸の風景だが、御坊の生れの春木にとっては、見なれた景色だったし、それに何よりも、眠かったのである。
一枝に、身体をゆすられて、眼を覚ますと、窓の外は、もう暗くなっていた。
「間もなく、串本です」
と、一枝が、いった。
一九時五七分に、列車は、串本に着いた。
駅を出て、少し歩くと、国道42号線にぶつかる。串本の町のメインストリートである。
その42号線沿いに、串本の警察署がある。隣りは、町役場である。
春木と一枝は、まず、真田誠の死体と、面会した。
最初に、現場である海中展望塔に駈けつけた警官が、春木に、事情を説明してくれた。
「被害者が、展望塔に入った頃は、かなり混んでい

まして、押されるようにして、窓から、海中のサンゴや熱帯魚を眺めていたようなのです。犯人は、恐らく、被害者を、後から押すようにしながら、いきなり、ナイフで、背中を、刺したんだと、思います」

「被害者は、悲鳴をあげなかったのか？」

「あげたと思います。現に、悲鳴を聞いたという者もいます。ただ、その時間には、子供の入場者が多く、がやがやとしていたそうですから、悲鳴が聞こえても、子供が、ふざけ合っているのではないかと、思ったそうです」

「犯人の目星は？」

「全く、ついておりません。被害者は、東京の人間ですし、犯人は、どうやら、騒ぎにまぎれて、逃げ去ってしまったらしいのです」

「これが、凶器のナイフか」

春木は、ポリ袋に入っているナイフを、手に取った。

刃渡り十五、六センチといったところだろう。ダイバーがよく使うナイフである。

「刃の根元まで、深く突き刺さっていましたから、犯人は、自分の体重を全部かけて、刺したんだと思いますね」

と、警官は、いう。

真田の所持品が、机の上に並べられた。

財布や、腕時計と一緒に、面白いものが、入っていた。

潮岬に来た記念にと一枚二百円でうっている「本州最南端訪問証明書」が、所持品の中にあった。

潮岬の突端に、「望楼の芝」という名所がある。初夏には、青々とした芝生の広がる大地があり、そこに寝転んで、眼の前に広がる太平洋を眺めるのである。

望楼の芝というのは、そこに、軍隊の望楼があったからだろう。「本州最南端訪問証明書」は、この望楼の芝にある無料休憩所で、売っていて、串本町

長の印も、押してある。
「被害者は、あそこへ行ったのか」
と、春木は、呟いてから、
「釣道具は、持っていなかったのか？　この仏さんは」
と、警官に、きいた。
「そういうものは、持っておりませんでしたが」
「おかしいな。仏さんは、串本に、釣りに来た筈なんだがな」
「釣りのあとで、海中公園に遊びに来たんじゃありませんか」
「ホテルへ行ってみよう」
「はい。被害者の泊っていたホテルは……」
「こっちは、わかっているよ」
春木は、ちょっと得意気に、ニヤッと笑って見せた。
ホテル「新串本」は、潮岬の突端に近く、ホテルや、ユースホステル、民宿などが、集中している場所にあった。
望楼の芝からも、近かった。
六階建の真新しいホテルで、真田の借りた六階の部屋からは、太平洋が、間近かに、広がって見える。
串本駅から、車で、二十分ぐらいだろうか。
あのものものしい釣道具は、部屋においてあった。串本へ来て、釣りをした形跡はなかった。
「あの客に、誰か、会いに来た人間は、いなかったかね？」
春木は、フロントで、きいた。
「誰も、見えなかったと、思いますね。フロントに、訪ねて来られた方は、いらっしゃいません」
「電話は、どうだ？」
「それなら、一度、かかって来ました」
「どんな電話だ？」
「こちらに、東京の真田という客が泊っていないかという男の人の電話でした」

「それで、何と答えたんだ？」
「その前に、海中公園に行くと、いわれて、キーを預けていかれたんで、そうお答えしましたが」
「その電話は、何時頃なんだ？」
「午後二時頃だったと思います」
「真田は、わざわざ、君に、海中公園に行くといって、出かけたのか？　普通は、黙って、出かけるもんだろう？」
春木は、じろりと、小柄なフロント係を見た。
「それが、海中公園へ行くのは、どう行ったらいいか、私に質問されていましたので」
「それで、電話の男に、教えたんだね？」
「いけませんでしたか？　私のせいで、お客さんは、殺されたんでしょうか？」
「気にすることはないさ。犯人は、海中公園で殺してなければ、このホテルで殺しているよ」
「恐ろしいですね」
「真田誠は、昨夜おそく、チェック・インした筈だな？」
「はい」
「今日は、どんなことをしていたんだね？　この客は」
「お部屋の中のことは、わかりませんが、午前中に、この先の望楼の芝へ散歩に行かれたようです」
「それは、わかっている」
「そのあと、帰って来られてから、東京へ電話しておられます」
「その電話番号は、わかるかね？」
「０３―４２５までは、記録されていますが、それ以上は、わかりません」
「長い電話だったのかね？」
「料金は、四千三百円になっていますから、かなり長い電話だったと思いますね」
と、フロント係は、いった。
「家族には、電話したのか？」
「はい。すぐ、お知らせしました」

「宿泊カードを見せてくれ」
と、春木は、いった。
それによると、真田の書いた住所は、東京の渋谷になっていて、電話番号は、406局になっている。
「この電話番号は、正しいのかね？」
「その番号にかけると、留守番電話で、会社の番号を言いました。それで会社のほうへ電話しましたところ、緊急連絡先の番号を教えてくれました。それにかけましたら、妹さんが、お出になりましたので、お話をしておきました。今日中に、こちらに、着かれるということでした」
「奥さんじゃなく、妹が来るのか？」
「はい。そういわれました」
と、フロント係は、いう。何か、家庭の事情が、あるのだろう。
真田が、東京に長い電話をかけたというが、その局番は、自宅ではなかったし、フロント係がいった妹の番号でもない。彼の会社の番号とも違っている。
春木が、ホテル「新串本」にいる間に、真田の妹が、駈け付けた。
三十五、六歳の背の高い女だった。
名前は、真田めぐみというところをみると、まだ、結婚していないのか。
イラストの仕事をしているのだと、誇らしげに、いった。
「真田さんに、奥さんは、いないんですか？」
と、春木は、きいてみた。
「一年半前に、別れましたわ」
「理由は、何でした？」
「兄が、いけないんです」

3

「真田さんが、いけないというのは、どういうこと

ですか？」
春木は、興味を持って、真田めぐみの顔を見つめた。
「兄のことを、悪くはいいたくないんですけど、サギまがいの商売ばかりやっていて、他人に、迷惑をかけ続けていましたから」
と、めぐみは、眼を伏せて、いった。
「それで、奥さんが、愛想をつかして、離婚になってしまったということですか？」
「ええ。もう少し、我慢してくれるように、私も、頼んだんですけど」
「お兄さんが、南紀へ来ていたことは、知っていましたか？」
「いいえ。正直にいうと、最近、兄とは、あまり、つき合いがありませんでした」
「安藤という弁護士を、ご存知ですか？」
「和歌山で殺された方でしょう？　兄から、その名前を聞いたことは、ありましたわ。一年以上、前ですけど」
めぐみの言葉は、終始、冷静だった。どうやら、兄とは、うまくいっていなかったようだと、春木は、思った。
殺された真田誠は、友人にも、妹にも、信用されていなかったのだ。
（これじゃあ、容疑者は、うじゃうじゃいるんじゃないだろうか？）
春木は、少しばかり、うんざりして来た。眼の前の妹だって、ひょっとすると、兄の真田を、殺したかも知れないのだ。もっともめぐみが、弁護士の安藤を殺したとは、信じがたいのだが。
「お兄さんは、ホテルから、東京に、長い電話をかけています。０３―４２５までではわかっています。この４２５というのは、東京世田谷の経堂（きょうどう）あたりらしいんですが、そこに、お兄さんの友人なり、知人が住んでいますか？」
春木は、質問を続けた。

「いいえ、知りませんわ。今もいいましたように、最近は、兄と、没交渉でしたから」
「じゃあ、お兄さんが、どんな仕事をやっていたかも、ご存知ありませんでしたか？」
「はい」
と、めぐみは、肯いた。
この妹から、真田誠について、ほとんど何も、聞くことは出来ないようだった。
春木は、四人兄弟で、結婚した今でも、べたべたとしたつき合いがあって、何でも知られてしまっている。もう少し、兄弟の間は、他人行儀にした方がいいんじゃないかと、思うことがあるのだが、真田誠と、めぐみというのは、逆の意味で、極端すぎると、思った。もう少し、兄のことについて、知っていてもいいのではないのか。
多少、がっかりして、春木は、質問を、切り上げた。
「こういうのが、都会的な兄妹なんですかね？」
一枝が、あきれた顔で、春木に、きいた。
「どうかね。君の妹さんは、どうなんだ？」
「うるさくて、仕方がありませんよ」
「殺された真田のことで、東京から、電話が入ってないか？」
「東京警視庁からですか？」
「その報告も欲しいが、真田が、ホテルからかけた03―425の人間だよ。真田は、長い電話を、この相手にかけてるんだ。かなり親しい人間だろう。真田が殺されたことは、テレビのニュースで、もう、やってる筈だ。だから、何か、問い合せてくるんじゃないかと思っていたんだがね」
「やはり、関わり合いになるのを恐れているんじゃありませんか」
「冷たい兄妹に、冷たい友人か。どうも、やり切れん事件だねえ」
「被害者は、なぜ、釣りに行かなかったんですかねえ？　それがわかりません」

一枝が、首をひねった。
「あんな立派な釣道具を、持っていたのにか？」
「そうです。この辺りの海は、磯釣りには、絶好ですよ。いいポイントが、いくらでもあるんです。わかりませんね」
「和歌山で、仲間の安藤弁護士が、殺されてしまったので、釣りどころじゃなかったのかも知れんよ」
「それなら、海中公園で、熱帯魚を見ていたというのも、おかしいんじゃありませんか」
「お前さんは、何がいいたいんだ？」
春木は、文句を、いった。
「真田は、最初から、釣りなんか目的じゃなかったのと違うでしょうか？」
「釣道具は、飾りだというわけかね？」
「そんな感じがするんですよ。それに、和歌山で会うことになっていた安藤弁護士が殺されたというのに、予定していたからと、串本に行く神経もわかりませんね。私だったら、友人が死ねば、予定は、取り止めますよ」
「じゃあ、真田が、なぜ、串本へ来たと、思うんだ？」
「釣りに来たのでないことだけは、間違いないと思います。誰かに、ここで、会うことになっていたんじゃないですかね。だから、どうしても、串本へ来なければならなかったんじゃないかと思うんです」
「しかし、ここで、誰にも会った様子は、ないぞ」
「来る筈の人間が、来なかったのかも知れません」
「それが、東京の０３―４２５の人間ということか」
「そう思います」
「すると、まだ、この事件は、あとを引きそうだな」
「と、いいますと？」
「最初、真田と、安藤は、和歌山で、落ち合うことになっていたのに、先に来ていた安藤が、殺された。今度は、串本だ。もし、ここで、真田が、誰か

に、会うことになっていたとすれば、和歌山と同じことになったわけだよ。とくれば、当然、次は、この串本で、真田と会う筈だった人間が、殺される番だろう」
「０３－４２５の人間ですね」
「そうだ」
「しかし、これだけでは、あまりにも、漠然としていますね」
「東京の警視庁が、何とか、調べ出してくれるんじゃないかね。それに、期待しているんだがねえ」

4

東京の警視庁では、捜査一課の十津川警部たちが、和歌山県警からの要請を受けて、和歌山で殺された安藤弁護士のことを調べていた。
そこへ、続けて、今度は、串本で殺された真田誠の調査依頼である。
この二人は、明らかに、同一犯人によって殺されたと、和歌山県警は、見ているようだったし、十津川も、同じ見方をした。
一昨年の十一月に、東京で、一つのサギ事件が、新聞を賑わせた。
当時、真田誠は、不動産会社の社長をやっていたが、つぶれかけたゴルフ場を買い取り、名称を変え、安藤を、顧問弁護士に迎えて、会員権を、売りさばいた。
もちろん、それだけでは、会員権は、売れない。そこで、政治家や、芸能人の名前を使うことにした。
その橋渡しをしたのが、安藤弁護士だった。
百万単位の金を渡せば、政治家や、芸能人は、自分の名前が、宣伝パンフレットにのるのを、簡単に許可した。もっとも、このサギ事件が発覚してからは、いずれも、自分たちの名前が、無断で、使われたと文句をいったが。

セールスマンを、大量に使ったのも、よかったのかも知れない。市価より安い、そのゴルフ会員権は、飛ぶように売れた。

売るだけ売っておいて、真田は、そのゴルフ場を、倒産させてしまったのである。もともと、つぶれかけていたゴルフ場である。売りつくした会員権は、紙屑になった。

真田は、不動産会社をやめ、今度は、真田興業を作った。

この方も、何をやるのかわからない会社である。

警察が動いたが、真田は、訊問は受けたが逮捕はされなかった。

つぶれかけたゴルフ場を買い取ったときも、新しく会員を募った時も、相手を欺すつもりはなかったと、真田が、主張したからである。

警察は、そんな真田の証言は、信用しなかった。真田は、前にも、債券の偽造で、逮捕されたことがあったし、偽ブランド製品の販売で、注意されるといった前科があったからだ。

だが、サギ事件の実証は難しい。果して、最初から、相手を欺すつもりだったかどうかの証明が、難しいからである。

安藤弁護士は、東京の弁護士会から、除名され、当分の間の弁護士活動を禁止されて、大阪へ引っ越した。

だが、安藤は、一年半前の事件で、一億円は、手にしたろうと、いわれている。

真田のまわりには、当時、彼にふさわしい人間が、集っていた。

真田によく似た悪党である。

プロゴルファーあがりで、ゴルフ評論家の西田新太郎も、その一人だった。

四十三歳の西田は、真田から大金を受け取り、欠陥ゴルフ場と知りながら、いろいろな雑誌に、推薦文を書き、真田の会社に、問い合せてくる人々に、買えば、必ず値上りすると、甘い言葉を、ささやい

たのである。
西田も、その時には、立派なゴルフ場だと信じていたといい、今は、自分の不明を恥じていると殊勝にいい、逮捕を、まぬがれた。
真田に、資金援助をした佐伯要（さえきかなめ）という三十七歳の男もいる。
三十七歳で資産十二億円といわれている男である。
無職ということになっているが、儲（もう）かりそうなところに、投資するのが、趣味の男である。
Nというラブホテルの実質的なオーナーともいわれているが、そんな噂が立つと、さっさと、手を引いてしまった。
真田のゴルフ場にも、億単位の金を出し、それに見合う利益を得たことは、間違いなかった。
そのくせ、佐伯は、警察に調べられると、自分も、被害者であると主張した。
十津川は、この四人の名前を、マークした。

安藤英夫
真田　誠
西田新太郎
佐伯　要

一年半前の事件で、主役を演じたのは、この四人である。
会員権は、一枚三百万円で、五百枚売ったところで、倒産した。被害総額は、単純に計算して、十五億円になる。
被害者は、四百三十六名である。五百人でないのは、一人で、二枚以上の会員権を買った人もいるからである。
自分で、そのゴルフ場を使いたいといって買った人は、ほとんどいなかった。被害者は、大部分、投資の対象として、買ったのである。
安藤弁護士が、殺された時点では、十津川は、ま

だ、一年半前のこの事件が動機だという確信はなかった。
続いて、串本で、真田誠も、殺されたと聞いて、この事件が、引き金になっていると、確信したのである。
十津川は、取り敢えず、その事件のことを、和歌山県警に、知らせてから、更に、調査を、続けた。

5

容疑者は、残った二人の中か、或いは、一年半前の事件の被害者の中にいるか、どちらかだと、十津川は、思った。
この四人が、その時、ふところにした金は、十五億の半分に近い七億円だろうといわれていた。
安藤弁護士と、西田は、資金を出していないので、一億円ずつ。残りの五億円を、佐伯と、真田が、三対二の割合いで、分けたというのが、事情通の話だった。
この分け前で、仲間割れが起きたのだろうか？
「違うな」
と、十津川は、断定した。
「違いますか？」
亀井が、きく。
「安藤と、西田の二人が、分け前に不満で、佐伯と、真田を襲ったのならわかるがね。殺されたのが、安藤では、不自然だ」
「とすると、被害者の中に、犯人がいるということですか？」
「被害者か、その家族だね」
「しかし、被害者の数は、四百三十六人もいます。その家族を入れれば、大変な数になってしまいます」
「そうだが、しぼってはいけるさ。サギにあったからといって、たいていの人間は、相手を殺したりはしない。このゴルフ場の会員権は、一枚三百万円

だ。ある人にとっては、大金だが、ある人にとっては、何でもない金額だろう。何でもない方から、落していけばいい」

「会社で買ったのがいますね。お得意へのプレゼントとして、二十枚も買った会社があります」

「それは、除外していいね」

と、十津川は、あっさりと、断定した。

被害者の人数が、だんだん減っていく。

自殺者も、出ている。しかし、そのうち家族がいないものは、除外した。

弁護士を立てて、損害賠償を求めて、真田と、交渉を続けている被害者もいた。これも、十津川は、除外した。

肝心の真田や、安藤を殺してしまっては、一円も、返って来なくなってしまうからである。

最後に残ったのは、一人息子のために、会員権を、五枚も買い、全財産の千五百万円を失って、自殺した夫婦だった。

定年間近かだった五十四歳のサラリーマンと、四十九歳の妻である。

定年後の生活と、一人息子に、財産を残してやりたいという両方の願いから、二、三年で、値打ちが二倍になるといわれて、会員権を五枚も買ったのである。

その金は、退職金の前借りだった。その他に、借金もしている。

それが、紙屑になったと知って、この両親は、心中した。

残された一人息子は、現在、二十五歳で、サラリーマンをしている。

「会社の同僚が、真田や、安藤を告訴しろとすすめましたが、彼は、それをしていませんし、両親の死を、忘れたように、振る舞っています」

と、亀井は、いった。

「だから、なおさら、怪しいと、カメさんは思うのか？」

「そうです。両親は、結婚して、七年たってから生れた子なので、溺愛していたそうなんです。息子の方も、両親を大事にしていました。それなのに、告訴もしないというのは、おかしいですよ」
「名前は？」
「死んだ両親の名前は、畑山晋と、有子です。問題の一人息子は、畑山恵です」
「今、どこにいるんだ？」
「それが、休暇を貰って、旅行に出かけているそうです」
「行先は？」
「わかりません。行き当りばったりの旅行が好きな青年だということです」
「写真は、手に入ったかね？」
「会社で、貰って来ました。入社の時のものだそうです」
亀井は、正面を向いた青年の写真を、十津川に、見せた。
「なかなかの美男子だね」
「身長百八十センチ。体重七十キロで、すらりとした長身だそうです」
「性格は？」
「朗らかで、協調性があり、頭もいいということです。大学時代は、バスケット部のキャプテンでした」
「今でも、そうなのかな？」
「それが問題ですね。今は、両親の仇を討つことだけを、考えているかも知れません」
「とにかく、この青年の写真と、履歴を、和歌山県警へ送ってみよう」
と、十津川は、いった。

6

畑山恵の顔写真と、彼のことを書いた文書は、和歌山県警本部に、ファクシミリで、送られてきた。

春木は、その写真と、名前を見て、
「なんだ。あいつじゃないか！」
と、思わず、大きな声をあげた。
一番、驚いたのは、三好刑事だった。
「間違いなく、あの男ですよ。タダで、留置場に一泊して、その上、食事までしていった青年ですよ」
三好は、溜息をついた。
「東京からの説明では、この畑山恵が、第一の容疑者みたいに、書いてあるがねえ」
「動機は、十分ですね。千五百万円を損をした上、両親は、自殺してしまっているようですからね。それに、南紀に来たのも、ただの偶然かどうか、わかりません」
「しかし、この男には、安藤殺しについて、アリバイがあるんだよ。安藤弁護士が、ホテルで殺されたのは、午後三時十何分かだが、畑山恵が、和歌山線で、和歌山に着いたのは、一六時〇五分。午後四時過ぎなんだ。一時間もおそく着いたんでは、絶対に、殺せないよ。その列車の車掌が証人では、どうしようもない」
春木は、ぶぜんとした顔で、いった。
「串本の殺人が、畑山恵かも知れません」
「和歌山と、別の人間が、やったということになるのか？」
「ええ」
「駄目だよ。おれはね、この二つは、同一犯人だと思ってるんだ。別人だったら、動機は、どうなるんだ？　別々の動機ということになるのか？」
「動機は、一緒です。東京の調べでは、一年半前に、四百人を越す人間が、安藤や、真田たちに、欺されているわけですよ。被害者の何人かが、協力したというのは、どうでしょう？」
「グループを作って、仇討ちか。まるで忠臣蔵じゃないか。今どき、はやらんよ。それにだ、そんなに、何人もいるんなら、なにも、一人ずつ殺さなくたって、四人の悪党を、まとめて殺すんじゃないの

かね」
「テレビの必殺仕事人みたいにですか？」
一枝刑事が、きいた。
「そうさ。おれは、あの番組のファンなんだよ。一人ずつ殺していったら、他の連中に、覚られてしまうからな。まとめて殺した方が、簡単なんだ。それをせずに、一人ずつ殺したところを見れば、犯人は、一人だよ」
春木は、頑として、いい張った。
「となると、犯人は、この畑山恵以外の人間ということになってしまいますね」
「何しろ、アリバイがなあ。まあ、念のために、畑山が、串本に現われているかどうか、調べてみよう。もし、海中展望塔にでも来ているとわかったら、和歌山でのアリバイも、調べ直さなければいかん」
「彼は、今朝、留置場を出るとき、これから、串本を廻って、南紀を一周するといっていました。だから、来た筈ですよ」
と、三好が、いった。
春木は、畑山の写真をコピーして、刑事に持たせ、串本駅、タクシー、バス、それにホテル、旅館の聞き込みを、やらせることにした。
すでに、深夜になっている。
勝負は、明日になりそうだった。

7

翌日になると、十津川たちも、もう一つの調査にかかった。
和歌山県警から、０３―４２５の人物を、探してくれと、頼まれていたからである。
だいたいの想像はついた。
元プロゴルファーの西田が、世田谷区経堂に、住んでいて、電話番号が、４２５―××××番だったからである。

四人の最後の佐伯は、四谷に住んでいて、電話番号は、359局である。

十津川は、亀井と二人で、経堂にある西田のマンションを訪ねた。

七階建の高級マンションで、西田は、その最上階に、住んでいた。

百九平方メートルというから、かなりの広さである。

西田は、そこに、ひとりで住んでいるということだった。

十津川と、亀井は、エレベーターで、七階へ、あがって行った。

だが、西田の部屋の前へ行き、インターホンで、呼びかけても、返事が、なかった。

十津川と、亀井は、顔を見合せた。

四人の中、二人までが、南紀で殺されているとなると、どうしても、不吉な想像が、頭に浮んでしまうのは、止むを得ないだろう。

十津川が、なおも、ベルを押していると、廊下に、人の気配がして、若い女が、

「西田さんは、お出かけになりましたよ」

と、いった。

隣りの部屋に住んでいるという女性だった。どことなく、水商売の匂いがした。

「どこへ行ったか、わかりませんか？」

十津川が、きいた。

「行先は、わかりませんけど、釣道具を、かついでいましたよ。だから、これから、釣りですかって、きいたら、ええって」

「出かけるところを、ごらんになったんですね？」

「ええ」

「いつですか？」

「昨日の午後ですよ。五時頃だったかしら」

「どんな様子でした？　楽しそうでしたか？　それとも、浮かない顔でしたか？」

「釣りに行くんですもの。楽しそうでしたよ。違い

ます？　男の方って、ゴルフとか、釣りに行くときは、楽しそうでしょう？」
女は、ふふッと、笑って見せた。
どうやら、そうだろうという先入主で、いっているらしい。
西田の出かけた時刻は、信用がおけても、その時の顔の表情は、首をかしげた方が、良さそうである。
念のために、管理人を呼び、部屋の中を見て貰ったが、西田が留守であることは、間違いなかった。
「行先は、南紀でしょうか？」
亀井は、マンションを出たところで、十津川に、きいた。
「常識的に考えると、南紀だろうね」
「なぜ、南紀なんでしょうか？」
「それと、なぜ、釣道具かだろう？」
十津川は、苦笑している。
「そうなんです。安藤も、真田も、釣道具を持って、南紀へ出かけています。今度は、西田です。どういうことなんでしょうか？　和歌山県警の話では、どうも、釣りが目的じゃないようなことらしいんですが」
「そういえば、畑山恵が、犯人じゃないと、いって来ている。安藤弁護士殺しについて、アリバイがあるということだ」
「しかし、今のところ、畑山恵が、最有力の容疑者だと思いますが」
亀井は、首をかしげた。
「それに、畑山は、南紀を旅行している。怪しいことは、怪しいんだ」
と、十津川は、いった。
「もう一人の佐伯は、どうしていますかね？　彼も、釣道具を持って、南紀へ行ったんでしょうか？」
「カメさんは、四谷へ廻って、佐伯に会って来てくれないか。私は、警視庁へ戻って、西田が出かけた

ことを、和歌山県警に、知らせなければならないからね」
十津川は、亀井とわかれて、警視庁に戻ると、すぐ、和歌山県警の春木警部に、電話をかけた。
「西田新太郎の写真は、ゴルフ雑誌にのっていたのがありますので、これを送ります」
と、十津川は、いった。
「西田は、本当に、釣道具を持って、出かけたんですか？」
春木は、どうやら、半信半疑のようだった。
「隣室の女性が、昨日の夕方、西田が、釣道具を持って出かけるのを目撃しています。なぜか、四人の中、三人までが、釣道具を持って、出かけているわけです」
「何のためですかな？」
「こちらでも、考えているんですが、わかりません」
「四人目の佐伯は、どうしてますか？　彼も、釣道具を持って、出かけているんですかね？」
「今、調べているところです。畑山恵には、アリバイがあったそうですが、串本の事件についても、アリバイがあるわけですか？」
今度は、十津川が、きいた。
「まだ、調査中です。しかし、十津川さん、私は、この二つの殺しは、犯人は、同じ人間だと思っているんですよ」
「その点は、同感ですね」
「従って、和歌山の事件にアリバイのある畑山は、串本の事件の犯人ではあり得ないと、思っておるんです」
「しかし、一応、調べてはいらっしゃるんでしょう？」
「念のために、畑山の行方は、追いかけていますが、これは、あくまで、念のためです」
春木は、がんこないい方をした。
十津川は、何となく、春木の顔立ちが、想像でき

るような気がして、微笑した。
「もう一度、聞きますが、畑山恵には、確かなアリバイがあるんですね？」
「国鉄の車掌が、証人だから、困っているんです」
と、春木はいい、もう一度、畑山のアリバイについて、説明してくれた。
「わかりました」
と、十津川は、いった。
今度の二つの事件は、あくまでも、和歌山県警の事件である。十津川たちは、そのサポートをするだけである。
それでも、十津川は、電話がすむと、時刻表を取り出して、和歌山線というのを、調べてみた。
東京の人間には、あまり、なじみのない線である。
しかし、畑山は、奈良を見物してから、和歌山に出たというから、そのルートの旅行をするには、便利な線に思える。
畑山は、この和歌山線で、和歌山に出た。
和歌山着が、一六時〇五分というから、時刻表によると、王寺発一三時一四分の列車に乗ったわけである。
奈良―王寺間は、関西本線で、十五、六分だか



ら、奈良で、昼食をすませてから、和歌山線に乗ったということだろうか？

安藤が、和歌山駅前のホテルで殺されたのは、午後三時十五、六分過ぎであることは、はっきりしている。

と、すれば、畑山には、アリバイがあることになってくる。

一六時〇五分（四時五分）に、和歌山に着いた和歌山線の列車に、乗っていたからである。

しかも、乗っていたことを、国鉄の車掌が証言しているのだから、こんな強固なアリバイは、ないだろう。

8

亀井刑事が、戻って来た。

「佐伯は、家にいたかね？」

と、十津川がきくと、亀井は、なぜか、疲れた顔で、

「会って来ました」

「どうしたんだ？　元気がないね」

「ああいう男は、どうも苦手です」

「カメさんが苦手だというと、よっぽど、妙な人間なんだな？」

と、十津川が、きくと、亀井は、眉をひそめて、

「表面的には、物静かで、礼儀正しいですがね。あいつは、本当の悪党だと思いましたよ。全てを、金銭で考えている。ひょっとすると、自分の値段まで、冷静に、自分で、値ぶみしているんじゃないかと思いましたね」

「頭は、切れそうかね？」

「切れますね。しかし、それに、情が伴っていないから、怖いんです」

「家族は？」

「いたらしいんですが、今は、ひとりです」

「安藤弁護士と、真田誠が殺されたことについて

は、どういってるんだ？」
「気味の悪いくらいはっきりしていますね。死んだ人間には関心がない。そんな人間のことを、あれこれ考えても、一円にもならない。これが、佐伯の考えです」
「それは、逆に、金になれば、死んだ人間のことも考えるということかも知れんな」
「そうですね」
「安藤弁護士や、真田誠を、知っていることは、認めているんだね？」
「そういう点は、こっちが、張り合いがないぐらい、簡単に、認めるんです」
「だが、肝心の点は、認めないか」
「そうですね。安藤と真田が、なぜ、南紀で出会ったのかと、きいても、全く知らないと否認しています。多分、あの四人で、何か企んでいたんだと思いますがねえ」
「佐伯という男は、そういう企みには、参加しない方かな？」
「金だけ出して、自分は、かげに廻って、じっと、眺めている男だと思いますね。収穫は貰うが、責任はとらないというのが、あの男の生き方じゃありませんか」
「佐伯が、昔の仲間を消しているということは、考えられないかね？」
「あの男がですか？」
「そういう男なら、もちろん、自分じゃ、手は下さんだろうがね。金で、誰かを傭って、昔の仲間を、消していくというのは、どうだね？」
十津川が、きくと、亀井は、言下に、
「それは、ないと思いますね」
「そうか。そういうことは、しない男かね？」
「そんな男なら、むしろ、御しやすいんですが、あの男は、そんな非能率なことは、しないですね。自分が危険になったら、金にあかして、力のある弁護士を傭うか、われわれを買収にかかると思います

ね。そういう男だと思います」
「われわれを買収しようとするかね？」
十津川は、笑いながら、きき直した。
亀井は、真顔で、
「多分、あの男は、金で買えないものはないと、考えているんじゃありませんか。もちろん、警察もです。だから、やたらに、私の月給を知りたがっていましたね」
「それで、カメさんは、教えたのかい？」
十津川は、興味を持って、きいた。
「なぜ、私の月給を知りたがるのか、きいてみましたよ」
「佐伯の答は？」
「こんなことを、いってましたね。月給二十万円の男に向って、二十万円やるから、不正をしろといっても、駄目だ。月給と同じでは、とても、その男の良心は買えない。しかし、月給の十倍なら、彼は、考え込む。そして、百倍なら、間違いなく、その男の良心を買うことが出来る」
「二十万円の百倍だと、二千万円か」
「そうですね。どうも、佐伯は、冗談で私にいったのではなくて、真面目に、いっていたみたいです。或いは、私の反応を、見ていたのかも知れません」
「カメさんは、二千万円で、考えるかね？」
十津川がきくと、亀井は、「そうですねえ」と、腕を組んで、
「どうしますかねえ」
「おい、おい、カメさん。二千万円ぐらいで、よろけちゃ困るよ」
「大丈夫ですよ。ただ、佐伯というのは、そういう男だということです。にこりともしないで、警部にだって、札束で、買収しようとかかって来ますから、覚悟しておいた方が、いいですね」
「そうだな。自分に、いくらぐらいの値打ちがつけられるのか、一度、それを知ってみたい気もするねえ」

9

佐伯は、東京にいることがわかったが、西田新太郎の行方は、つかめなかった。

七月三日は、午後三時十五、六分頃、和歌山で、安藤弁護士が、殺された。

翌、四日の午後、串本の海中展望塔内で、真田が刺殺された。

この真田は、その日に、東京の人間に、電話をしている。かなり長い電話だったという。

０３―４２５という局番から、十津川は、その相手が、西田新太郎に違いないと思っている。

西田は、四日の午後、釣道具を持って、どこかへ出かけた。

西田は、串本で、真田が殺されたのを知ってから出かけたのだろうか？　それとも、知らずに、出かけたのだろうか？

時間的に、微妙なところだった。

真田が、海中展望塔の中で、刺殺されたのは、午後三時頃である。

夕刊には、間に合わない時刻である。テレビは、夕方のニュースで、報道している。

西田が、経堂のマンションを出たのは、隣室の女の証言によれば、四日の午後五時頃だという。

あまり、信用のおけそうにない女だったから、五時といっても、ジャストではなく、三十分ぐらいの幅は、見ておいた方が、いいだろう。

民放テレビは、六時にニュースの時間があるが、五時にはない。五時に、ニュースの時間があるのは、ＮＨＫだけである。

しかし、ラジオは、ＮＨＫも、民放も、ほとんどが、五時のニュースをやっているから、西田には、出発前に、真田の殺されたことを、知っていた可能性もあるのだ。

真田は、串本から、電話で、西田に、安藤の殺さ

れたことを、知らせたに違いない。
善後策を話し合ったからこそ、長い電話になったのだと思う。
その時、真田は、西田に向って、早く串本に来るように、いったのだろうか？　串本で落ち合って、今後のことを話し合うことにしたのか？
いや、前から、西田も、南紀へ行くことになっていたのかも知れない。
西田は、真田まで殺されたと知っていて、それでも、南紀へ行ったろうか？
疑問は、いくらでも、わいてくる。
（釣道具を持って、この三人は、何をしに集まることになっていたのだろうか？）
それが、わかればなと、十津川は、思った。
和歌山県警の春木から連絡が入った。
「どうやら、こちらの捜査は、壁に、ぶち当りましたよ」
と、春木は、いきなり、腹立たしげに、いった。
十津川は、笑って、
「まだ、七月五日ですよ。捜査は、始ったばかりじゃありませんか」
「そりゃあ、そうですがねえ。和歌山と串本の二つの事件について、聞き込みを続けているんですが、これといった手応えは、皆無ですよ」
「畑山恵の行方は、わかりましたか？」
「これも、全く、行方がつかめずです。また、どこかの警察で、無銭宿泊でもしてるんじゃないかと、思っているんですがねえ」
「西田新太郎は、どうですか？」
「そちらから、送られて来た西田の顔写真をコピーして、和歌山、串本周辺のホテルや、旅館に当っているんですが、まだ、見つかっていません。和歌山、串本以外のところに、行っているのかも知れませんな」
「同じように、釣道具を持って出かけたといいますから、南紀へ行ったことは、まず、間違いないと、

思うんですが」
と、十津川は、いった。
「南紀に、いったい、何があるんですかね？」
春木は、大きな声で、いった。
「南紀の魅力は、何ですか？」
「魅力ですか。海、食べ物、温泉、景色、そんなところですか。それが、今度の事件と何か関係があると、お考えですか？」
「いや、別に、考えてはいませんが、私も、南紀という言葉に、憧れているんですよ」
「しかし、悪徳弁護士の安藤や、サギ常習の真田が、そんなものに憧れて、南紀へやって来たとは、思えませんな」
春木は、吐き捨てるように、いった。
その電話があってから、一時間ほどして、三重県警から、十津川に、電話が、かかった。
すでに、時刻は、午後十時を回っていた。
「西田新太郎という男について、調べて欲しいんですが」
と、三重県警の佐藤という警部が、いった。
「西田新太郎？　ひょっとして、その男は、身長百七十六センチで、年齢四十三歳、がっちりした身体つきの元プロゴルファーじゃありませんか？」
十津川は、きき返した。
彼の西田新太郎？　という言葉で、亀井たちが、じっと、注目した。
「ご存知なんですか？」
佐藤が、きき返した。
「釣道具を、持っていませんでしたか？」
「ああ、持っています」
「殺されたんですか？」
「そうです」
「すると、伊勢志摩か、熊野あたりで、殺されていたんですか？」
と、十津川は、きいた。
南紀の新宮までが、和歌山県である。

三重県というと、どうしても、南紀というより、伊勢志摩になってしまう。

しかし、佐藤は、「いや、違います」と、いった。

「河芸駅のホームで、死んでいたんです」

「かわげ？」

「山河の河に、芸術の芸です。伊勢線の駅です」

「その駅は、串本に近いですか？」

「いや、全く、離れています。四日市と、津の間にある小さな駅ですから」

「なぜ、そんな駅のホームで、西田は、殺されていたんですか？　彼は、南紀へ行った筈なんです」

「こちらでも、全くわからなくて、当惑しているんです」

「何時頃、死体は、発見されたんですか？」

「死体とわかったのは、午後九時少し過ぎです」

「駅員が、見つけたんですか？」

「いや、違います。河芸という駅は、無人駅ですから」

「すると、誰が？」

「最終列車が、二一時〇九分に、この河芸を発車します。車掌が、その時、ホームに、男の人が、一人で、ぽつんと腰を下しているのを見つけたんです。最終ですから、車掌は、親切心で、声をかけたといっています」

「それで、死んでいるのが、わかったというわけですか？」

「そうです」

「その駅を利用する他の乗客は、気がつかなかったんですか？」

十津川が、不審に思ってきくと、

「それがですね、この河芸駅の一日の乗降客は、平均、たったの二名なんです」

「二名ですか――」

それでは、気がつかなかったとしても、無理はない。

（しかし、そんな駅に、なぜ、西田は、いたのだろ

うか？）

「西田新太郎に、間違いありませんか？」

と、十津川は、念を押した。

「間違いありません。運転免許証を持っていましたし、うちのゴルフ好きが、元プロゴルファーの西田新太郎だと、いって、驚いていましたから」

それなら、西田新太郎本人だろう。

しかし、なぜ、そんな小さな駅でという疑問は、残った。

第三章　伊勢線・河芸駅

1

十津川は、時刻表を広げた。

伊勢線の名前も、初めて聞くし、河芸（かわげ）などという駅があるというのも、初耳だった。

すぐには、見つからなかった。四日市の近くということで探して、やっと見つけることが、出来た。

伊勢線は、南四日市―津の間、二十六キロの短かい線である。

紀勢本線を走る特急列車は、四日市―亀山―津と、回っていたのを、少しでも早くと考えて、バイパスとして作られたのが、伊勢線だという。

亀山を回るのに比べると、伊勢線を通る方が、九キロ短かく、時間も、二十分早くなる。

名古屋―紀伊勝浦間を結ぶ、特急「南紀」は、全て、このバイパスの伊勢線を使っていた。

面白いことに、四日市と、津の間に、伊勢線の駅が、八つあるのだが、特急「南紀」は、全く停車しないのである。線路を、借りるだけになっている。

十津川は、和歌山県警の春木警部に、西田が、伊勢線の河芸駅で殺されていたことを、告げてから、伊勢線のことが、出ている本を、図書室で、見つけてきた。

伊勢線は、バイパスの意味もあったが、当初は、四日市工業地帯の発展と、鈴鹿地区の発展を計算して、作られた線だったと、書いてある。

そのため、複線のレールを敷くだけの用地も、購入された。

しかし、その後、四日市公害訴訟に、国側が敗れて、予定されていた乗客も、のぞめないことがわかって、単線になってしまった。

各駅とも、立派な建物だったが、乗降客は少く、第二次廃止候補線になってしまった。

南四日市と、津をのぞく他の七駅は、全て無人駅である。

特急「南紀」が、通過するが、他に、各駅停車の気動車が、上り下り、各七本が、運転されている。

赤い二両連結の気動車だが、時には、乗客が、一名も乗っていないことがあるともいう。

問題の「河芸」は、南四日市からは六つ目、津からだと二つ目の駅である。

一日の乗降客二人という数字ものっていた。

伊勢線の中で、さすがに、この河芸駅の乗降客が、最低だが、他の駅にしても、中瀬古十一名、東一身田が十四名、玉垣二十三名と、少い。これでは、第二次廃止線の候補にされるのも、無理はなかった。

そして、結局、同じ疑問に、ぶつかるのである。

西田が、なぜ、こんな小さな駅で、殺されていたのかという疑問だった。

それを、十津川は、亀井に向って、「面白い事件だねえ」と、いった。

だが、前の二つの殺しと同じように、三重県下で起きた以上、これも、警視庁は、ただ、三重県警を、サポートするだけしか出来なかった。こちらでは、県警の要請に応じて、西田新太郎について調査して、報告するだけで、自分たちの意見をいうことは、控えなければならない。

三重県警は、当然の捜査として、西田の足取りを追っているようだった。

西田は、七月四日の午後五時頃、東京、経堂のマンションを出ている。釣道具を、持ってである。

そして、翌五日の夜、伊勢線の、一日の乗降客が平均二名という小さな駅で、死体で発見された。

その間、西田は、どこで、何をしていたのか。

四日の夜、河芸駅で見つかったのなら、東京から、まっすぐ来たと解釈できる。しかし、死体で見つかったのは、翌日だった。

当然、四日の夜、どこで、泊ったかが、問題になってくる。

「われわれは、二つのルートを、考えています」

と、最初、三重県警の佐藤警部は、十津川に、いっていた。

第一は、西田が、南紀の新宮、串本に行った帰りに、河芸に寄って殺されたというルートである。

第二は、まだ、南紀には、行っていないという考えになる。東京を、四日の夕方出発した西田は、名古屋あたりに一泊してから、南紀に向った。その途中で、河芸に、立ち寄ったのではないかということである。

それが、西田新太郎の遺体を解剖したあとで、前者に、なってきたようである。

西田の遺体は、三重大学で解剖されたが、その結果、次のことが、わかった。

西田は、背中をナイフで刺されており、それが、死亡原因だが、他に、後頭部を強打された痕も、見つかった。

犯人は、いきなり、背後から、西田の後頭部を殴りつけ、倒れたあと、背中を、ナイフで刺して殺したのだろう。

背中をナイフで刺されたところは、串本での第二の事件に似ているが、西田の場合は、後頭部を強打されているし、今度は、凶器のナイフは、持ち去られていた。

次は、死亡推定時刻である。

解剖報告によると、七月五日の正午から午後一時までの間と、なっていた。

もちろん、これだけでは、第一のルートか第二のルートかの判断はつかない。

「そこで、われわれとしては、被害者の西田新太郎が、どうやって、伊勢線の河芸駅へ行ったかを、考えてみました」

と、三重県警の佐藤警部は、電話で、十津川に、いった。

「河芸に行くには、伊勢線に乗るか、車で行くかだと思ったのです。伊勢線の列車は、上り、下り各七本しかありませんし、いつも、車内はがらがらで、二両連結ですから、車掌が、西田を覚えているに違いないと思ったのです。元プロゴルファーで、体格はいいし、何よりも、釣道具を持ち、フィッシング・ハットをかぶっていて、目立ちますからね」

「そうでしょうね」

と、十津川も、肯いた。

「それに、死亡推定時刻に近い、列車を、重点的に、当ってみました。ところが、いくら車掌に当っても、西田新太郎を、見ていないというわけです。それで、これは、タクシーを使ったのだろうと考えました」

「四日市側と、津側の両方から、タクシーで行った可能性がありますね」

「そうなんです。もちろん、われわれは、四日市と、津の両方の駅前のタクシーに、当ってみました。そして、津の駅前タクシーの中に、見つけたんです」

佐藤は、嬉しそうに、いった。

「見つけましたか」

「そうなんですよ。『津タクシー』の原田という運転手なんですが、五日の午前十一時三十分頃、西田と思われる男を乗せたと、証言したんです。顔も、釣道具を持っていたことも、はっきりと、覚えていました。原田運転手は、それを見て、南紀で海釣りをしての帰りだろうと、思ったそうです」

「その客は、河芸へ行ってくれと、いったんですか？」

「正確にいうと、『ここから二つ目の駅へ行ってくれ』と、運転手に、いったそうです。河芸という駅名は、覚えにくいですからね。特に、東京の西田にとっては、そうだったんだろうと、思います」

「それで、西田は、タクシーで、河芸へ行ったわけですね？」

「河芸に着いたのは、十一時五十分頃だったと、いっています。タクシーの運転手は、そのまま、津へ戻ったので、あとで、何があったか、わからないと、証言しています」

「すると、西田は、南紀から、戻る途中で、河芸に寄ったということになりますか？」

「そう考えるのが、自然だと思いますね」

と、佐藤はいい、電話を切った。

2

「西田は、なぜ、そんな小さな駅へ行ったんですかね？」

亀井は、わけがわからないという顔で、十津川に、いった。

「まず、考えられるのは、誰かに、そこで会うため

だったろうと、いうことだね」
「ところが、その相手が、犯人だったというわけですか」
「西田にとっては、そうなってしまったんだ」
「しかし、それにしても、なぜ、という疑問が、わいて来ますね。内密の話をしたかったのなら、ホテルでも、いいわけですしね」
「しかしね、カメさん。この駅も、内密の話をするには、なかなか、いいんじゃないかな。無人駅で、駅員はいないし、何よりも、一日の乗降客が二名しかない。日によっては、一人もないんじゃないか。特急列車は、全部通過してしまう。各駅停車の列車は停るが、上下七本ずつだから、少くとも一時間の間隔がある」
「そういえば、そうかも知れませんが」
亀井は、まだ、釈然としない顔だった。
もし、警視庁が扱っている事件なら、亀井は、すぐにでも、この河芸という小さな駅へ、すっ飛んで行くことだろう。
だが、あいにく、三重県警の事件である。
夜もおそくなったので、十津川たちが、帰宅しようとしていたときだった。
佐伯が、負傷したという知らせが、飛び込んで来た。
最初は、ただ、負傷したというだけの知らせだった。
問題の人間なので、十津川は、亀井と一緒に、パトカーで、四谷に飛んだ。
すでに、夜の一時を過ぎている。
四ツ谷駅から、歩いて十五、六分のところにあるマンションだった。
「このビル自体、佐伯のものだそうです」
と、パトカーから降りて、九階建のマンションを見上げて、亀井が、いった。
「火薬の匂いがするね」
と、十津川が、いった。

十津川と亀井は、エレベーターで、九階へあがって行った。
九階でおりると、硝煙の匂いは、ますます、強くなって来た。
九階全部を、佐伯は、自室として、使っているのだが、そのドアが、ひん曲って、外れそうになっていた。
ドアの、郵便受けのあたりに、大きな穴があいている。
四谷署の警官が、ロープを張って、ガードしていた。
「ドアの郵便受けに、ダイナマイトでも、投げ込んだのかも知れませんね」
亀井が、小声で、いった。
「佐伯さんは？」
と、十津川が、警官に、きいた。
「奥で、手当てを受けています」
と、警官が、答える。
十津川と、亀井は、こわれたドアの隙き間から、身体を横にして、部屋の中へ入って行った。
玄関の壁が、黒く焦げ、下駄箱などが、打ちくだかれている。
佐伯は、奥の居間で、医者の手当てを受けていた。看護婦も、いた。
佐伯は、ナイトガウン姿で、左腕に、包帯を巻かれている。
十津川は、自分の名前を、いってから、
「大丈夫ですか？」
と、きいた。
「まあ、命に別状はないようです」
佐伯は、顔をしかめて、いった。
「救急車は、呼ばなかったんですか？」
十津川が、きくと、佐伯は、笑って、
「ああいうものは、私は、信用していないんですよ」
「ああいうもの？」

「公的な機関といったらいいですかね。救急車も、官選弁護人も、区役所も、税務署もです」
「なぜです？」
「競争原理が働いていないから、勉強をしない。努力もしない。個人的な努力が、そのまま、報酬にはね返らないから、特別に、親切にするとか、特別に、努力するといったことがない。だから、嫌いだし、信用しないのですよ。私はね、いくら重傷を負っても、救急車を呼ばずに、この先生に、来て貰うんですよ。その代り、いくらでも払います」
「しかし、遠く離れたところで負傷したり、病気になったら、困るでしょう？」
「その時は、飛行機で、来て貰いますよ」
と、佐伯は、いった。
医者と、看護婦が、手当てをすませ、薬を置いて、帰ったあと、佐伯は、十津川たちに向って、
「私に、何か用ですか？」
と、きいた。
「あなたの命が狙われたというので、捜査に来たんです」
「なるほど」
「われわれも、公的機関の一つですが、信用されませんか？」
「あまり、信用していませんね。あなたが、民間人で、成功報酬を一千万円払うといえば、こちらのいう通りに動いてくれる。もし、そういうことなら、信用しますがね」
佐伯は、冷静な口調で、いった。
冗談でなく、本心で、そう思っているようだった。
「まず、何があったか、聞きましょうか」
と、亀井が、佐伯に、いった。
亀井の、かたい語調から、佐伯に対して、腹を立てているのが、感じとれて、十津川は、おかしかった。
「とにかく、ベッドに入っていたら、玄関の方で、

音がしたんですよ。何だろうと思って、ガウンを羽おって、出て行ったんです。とたんに、いきなり、爆発が起きたんです。内側の木製の扉が、倒れて来ましてね。とっさに、左手で受けたので、負傷してしまったんです。耳も、がーんとして、一分ぐらい、聞こえなくなりましたよ」
「犯人に、心当りは？」
「さあ、ありませんねえ」
佐伯は、肩をすくめるようにして、いった。
「元プロゴルファーの西田さんが、殺されたのを、知っていますか？」
十津川が、きいた。
「いや、知りません」
「伊勢線の河芸という小さな駅で、殺されていました」
「そんな駅名も、初耳ですね」
佐伯は、相変らず、落着いた声でいった。
内心、ショックを受けているのかも知れないが、それが、表情に現われては、いなかった。
「これで、三人が、殺されたわけです。四人目として、自分が狙われたとは、思いませんか？」
「さあ、どうですかね。犯人が誰とわかってれば、推測も、つきますが、今は、推理のしようがありませんね。それとも、警察は、三人を殺した犯人に、心当りがあるわけですか？」
「いや、それは、まだですがね。あなたには、心当りなしですか？」
「ありませんね、全く」
「本当に、心当りは、ありませんか？」
「ありませんね」
「しかし、あなたには、敵が多かったんじゃありませんか？　殺された三人と、同じように」
「それは、違いますね」
「違うというのは、どういうことですか？」
「私の生き方を嫌いな人はいるかも知れない。それは、人生観の違いだから仕方がない。しかし、だか

らといって、私を殺そうと思うものはいないでしょう。私が、直接、相手を傷つけては、いませんからね」

「だが、傷つけたということは、認めているんでしょう？」

「ある人間が、区役所へ行き、窓口で、不当な扱いを受けたと、怒ることが、よくあります。しかし、彼を不当に扱ったのは、本当は、法律なんですよ。窓口の人間は、ただ、その法律を、正直に実行しただけなのです。ところが、人々は、想像力が不足しているから、法律を作った法律家を、憎むことが出来ないで、窓口に、当り散らすわけです」

「すると、あなたは、自分をその法律家だと、思っているんですか？」

「少くとも、窓口の人間じゃないと思っていますよ」

「しかし、今度の犯人は、かなり想像力が強そうですからね。金を出して、真田や、西田の背後にいたあなたも、憎んでいるようですがね。われわれとしては、あなたに、死んで貰いたくないので、今日から、護衛をつけますよ」

十津川が、いうと、佐伯は、手を振った。

「それは、願い下げにして貰いたいですね。さっきもいいましたが、私は、公的機関の人間を、全く、信用していない。警察の人間もです。それに、あなたも、そこにいる亀井という刑事さんも、私を、悪い人間だと思っている。思うのは勝手だが、そう思っている人間に、護衛されるほど、不安なことは、ありませんからね」

「しかし、犯人は、また、あなたを殺そうとしますよ。どうするんですか？」

「自分のことは、自分で守りたいと思いますね」

「ガードマンでも、傭いますか？」

「それをしてはいけないという法律はないでしょう？」

「ありませんが、ガードマンが果して、命がけで、

あなたを、守ってくれますかね？」
「それは、こちらの支払う報酬によると思いますよ。とにかく、私のまわりに、刑事をうろうろさせるのは、やめて頂きたいですね」
「いいでしょう。われわれも、強制はできませんからね。ただし、この事件は、殺人未遂ですからね。徹底的に、捜査させて貰いますよ。その捜査の過程で、あなたの過去をあばくようなことになってもです」
十津川は、佐伯に向って、いった。

3

四谷署に、捜査本部が置かれた。
やっと、警視庁も、この一連の事件に、正式に、タッチすることが出来るようになったのである。
十津川も、捜査一課長の本多も、和歌山で始まったこの事件を、同一犯人の犯行と見ていた。
そのため、夜が明けると、和歌山県警と、三重県警に、合同捜査が、申し込まれた。
和歌山県警も、三重県警も、共に、捜査が、壁にぶつかっていた。
和歌山県警の場合は、唯一人の容疑者と思われた畑山恵に、完全なアリバイが、あったためである。
三重県警の場合は、被害者の西田が、なぜ、伊勢線の河芸駅に行ったかという理由が、わからないせいだった。
東京では、爆発物の破片が集められて、昨夜の中に、分析が行われていた。
その結果は、朝になって、十津川のもとに報告された。
爆発物は、ダイナマイト二本と思われる。時限装置は、使用されておらず、導火線の長さで、時間を、調整したと思われる。
もし、佐伯が、物音で起きて、まっすぐ、玄関に来たら、恐らく、死亡していたろう。彼が助かった

のは、パジャマの上から、ナイトガウンを羽おった、その時間だけ、おそくなったからである。
「犯人は、きちんと、計算したんだと思うね」
と、十津川は、報告書から眼をあげて、亀井に、いった。
「ドアの郵便受けに、ダイナマイトを投げ込めば、佐伯が、起きて、見に来る。その時間ですね」
「そうさ。犯人は、佐伯のマンションの間取りも、寝室の位置も、知っていたんだと思う。そうした全てのことを計算して、導火線の長さを、調整したと思うね」
「ただ、佐伯が、ナイトガウンを羽おってから、出てくるのまでは、計算しなかったということですか。奴も、悪運が強いですね」
「もう一度、佐伯に、会って来ようじゃないか」
と、十津川は、いった。
「爆発物のことを、知らせるためですか？」
「いや、聞き忘れたことがあったからだよ。殺された三人が、なぜ、釣りの仕度をしていたのか、なぜ、南紀へ行ったのか、その理由を、どうしても、知る必要がある。佐伯は、黒幕だから、当然、理由を知っている筈だよ」
「そうですね」
「正直に、答えるかどうかは、わからないがね」
十津川は、笑いながら、亀井と、捜査本部を出た。
マンションの九階に行くと、こわれたドアは、すでに、新しいものに取りかえられ、ドアの上には、監視カメラが、取りつけてあった。
「ものものしいねえ」
と、十津川は、眉をひそめながら、インターホンを押した。
「誰だ？」
太い男の声がした。
佐伯の声ではなかった。ガードマンを傭うと、いっていたから、その男の声らしい。

十津川が、名乗ると、ドアが開いて、四十五、六歳の男が、顔を出した。
「どうぞ」
と、いう。
中に入りながら、十津川は、その男の顔に、見覚えがあるような気がした。
中には、もう一人、三十歳ぐらいの男がいた。
これも、ガードマンらしい。
佐伯は、広い居間で、新聞を読んでいたが、十津川と、亀井を見て、
「まず、ご紹介しておきましょう。私が、今日から、身辺警護をして貰うことにした塚本と、青木の二人のガードマンです。塚本と、十津川さんは、前からの知り合いじゃなかったですか？」
と、いった。
十津川は、その言葉で、ああと、思った。
五年前に、警察をやめた男だったのだ。
警視庁ではなく、千葉県警の刑事だったが、やめたときは、警部補だった。
きれる男という評判は、十津川も聞いていた。
上司と、捜査方針で、意見が衝突し、塚本は、その上司を殴りつけて、やめてしまったのだ。警察の不祥事ということで、週刊誌が書き立てた。
（あの塚本だ）
と、思った。
塚本は、にやッと笑って、
「あんたのことは、時々、聞いている。なかなか優秀らしいじゃないか」
と、十津川に、いった。
十津川が、黙っていると、塚本は、皮肉な眼になって、
「その若さで、警部になっているところをみると、世渡りの方も、上手のようだな」
「あんたみたいに、上司を殴らないだけだよ」
と、十津川は、いい返した。
「あいつは、馬鹿だった。今考えれば、殴る価値も

なかったんだ」
「いや、人望のある上司だったと、私は、聞いている」
「そんなのは嘘さ。組織の名誉と威信を保つために、おれ一人を悪者にしているんだ。いつか、内情を暴露してやるつもりだがね」
「そっちの若いのも、君と同じ元刑事かね？」
「警察官だったことはある。二年ぐらいは、やったのか？」
塚本は、大きな声で、こちらを見ている青木に、きいた。
「一年三ヵ月警察にいました」
「ということだね」
と、塚本は、十津川に、いった。
「あんたたちに、佐伯さんが、守れるのかね？」
十津川は、二人の元警官を、等分に見て、きいた。
「大丈夫だよ」
塚本は、自信満々に、いった。
「しかし、相手は、ダイナマイトまで使う人間だ。それでも、あんた方二人で、防げるのかね？」
「こういう仕事には、なれてるよ。われわれのことを心配するより、君たちは、一刻も早く、犯人を見つけて貰いたいね。君たちが、もたついているようなら、われわれが、犯人を見つけ出してもいいが」
「あんたは、もう、民間人なんだ。それを忘れないで行動して欲しい。ガードマンだからといって、凶器を持っていたりすれば、逮捕せざるを得ないからね」
「物騒なものなど、持っておらんよ。ただ、これだけは、持っている。前もって、申告しておこう」
塚本は、奥から、柄のところに、虎の彫刻がしてあるステッキを持ち出してきて、テーブルの上にのせた。
「まさか、これを、凶器だとは、いわんだろうね？」

「相手を殴るのに使わなければね」
「正当防衛以外には、使わんよ」
「その言葉を忘れないで下さいよ」
と、十津川は、いってから、青木という若い男に向って、
「君も、何か、持っているのかね？」
と、きいた。
青木は、にやッと笑って、
「私は、カラ手をやっているから、ステッキは、必要ありません」
「有段者なのかね？」
「三段です。ボクシングも、四回戦ボーイだったことが、ありますよ」
「それが、自慢かね？」
「別に、自慢はしていませんが、今度の仕事には、役立つと思いますね」
結局は、自慢しているのだ。
十津川は、この若い男にも、好感は、持てなかった。
「佐伯さんに、お聞きしたいことがあるんですが、この二人を、他の部屋にやってくれませんか」
と、十津川は、佐伯に、いった。
「私は、もう、何も話すことは、ありませんがねえ」
「こちらは、そうは思っていないんですよ」
十津川が、強くいうと、佐伯は、仕方がないというように、肩をすくめて、十津川と亀井を、書斎に、連れて行った。
「われわれは、一刻も早く、事件を解決したいと思っていますが、そのためには、佐伯さんの協力が、必要です」
と、十津川は、いった。
佐伯は、煙草をくわえた。が、よく見ると、煙草ではなく、禁煙用のハッカ製品だった。
「そりゃあ、協力はしたいですがね。知らないものは、知らないと、いうより仕方がありませんよ」

「安藤弁護士、真田さん、それに西田さんの三人は、ご存知ですね？」
「それは、知っていると、いいましたよ」
「この三人が、なぜか、釣道具を持って、南紀へ行き、殺されているんです。なぜ、この三人が、釣道具を持って、南紀へ行ったのか、その理由を、教えてくれませんか？」
「知りませんね。三人の人は、知っていますが、彼等のプライバシイまで、私は、タッチしていませんからね」
「あなたに相談もなく、勝手に、あの三人が、釣道具を持って、南紀へ行ったというわけですか？」
「それ以外にないでしょう。彼等は、釣りが好きだったと思いますが、私は、釣りの趣味は、ありませんからね」
「信じられませんね」
「私は、無趣味ですよ」
「いや、南紀のことです。私は、むしろ、あなたの指図で、あの三人が、南紀へ行ったんだと、思ったんですがね」
「とんでもない。なぜ、私が、そんなことをするんですか？　教えて頂きたいものですね」
「あなたが、われわれに協力して下さらないと、われわれも、あなたを、守るのが難しくなってしまいますよ」
「だから、私は、あの二人を、傭っているんです。私をガードすれば、金になることを知っているから、必死になって、守ってくれると、思っていますよ」
「しかし、所詮は、金で動く人間でしょう？　いざとなった時、命がけで、あなたを守ってくれますかね？」
「失礼だが、十津川さんは、大学を出て、すぐ、警察に入り、その後一度も、失業の経験は、ないんじゃありませんか？」
「それが、どうかしましたか？」

「だから、あなたは、金の力というものを、頭の中でしか考えていないんだ。本当に、金に困ったことのない人ばかりですよ。今の世の中では、金があれば、何でも出来るが、なければ、何も出来ない。これを、実感として、あなたは、わかっていない。金さえあれば、偉い政治家だって、頭を下げて来ますよ。しかし、一円もなかったら、浮浪者にだって馬鹿にされる。私は、その差の激しさを、身をもって知っているんです。幸い、あの二人は、失業し、金に困った経験を持っています。片方は、金に困って、恐喝までしたことがある男です。金の有難さが、身にしみているわけです。私のために、何かしてくれるなどとは、思っていませんよ。金のために、私を守ってくれるんだと、思っているし、だからこそ、信用できるんです」

「金、金っていうが、犯人の方が、あなたより大金を出したら、あの二人は、犯人の方へついてしまうんじゃありませんかね」

亀井が、皮肉をこめていうと、佐伯は、笑って、

「私以上に、金を出す人間がいないことを、あの二人は、よく知っていますよ」

と、いった。

4

十津川と、亀井は、塚本たちの強い視線に送られながら、マンションを出た。

「カメさんが、佐伯という男に腹を立てる理由が、少しずつわかって来たよ」

と、十津川は、苦笑しながら、いった。

「彼が傭った塚本ですが、私も、思い出しました。上司を殴って、やめたんじゃなかったですか。警部が、話されているのを聞いていて、思い出したんです」

「週刊誌の中には、彼を英雄みたいに書いたのもあったよ。上司にたてついてまで、筋を通した男だ

といってね」
「そうだったんですか？」
「私も、そうかなと思って、県警の友人に、話を聞いてみた。全然、逆だったよ。塚本という男は、一匹狼、といえば聞こえがいいが、自分勝手な男でね。自分に頼むところがあるので、容疑者を痛めつけて、それが、問題になったんだ。上司が、それを注意したところ、かっとして、いきなり殴りかかったというのが本当のところでね。友人の話によると、塚本には、もともと、サデスチックなところがあって、容疑者だけでなく、スナックに飲みに行って、そこのホステスを殴りつけたことがあったらしい。これは、示談ですませたらしいがね」
「結婚はしているんですか？」
「していたが、彼が、警察をやめた直後に、別れたという話を聞いている」
「しかし、切れる男ではあったようですね？」
「ああ、頭は良いらしい。だから余計、上司は、手を焼いたんだろう」
「これから、どうしますか？」
「和歌山県警、三重県警と、合同捜査をやるんだから、南紀へ行って、向うの責任者と、直接、話し合ってみたいね」
「それに、私は、伊勢線というのに、乗ってみたいですね」
「私は、むしろ、和歌山線に乗ってみたいね」
「と、いいますと、警部は、やはり、畑山恵が、犯人ではないかと、お考えですか？」
「彼以外に、今のところ、犯人らしき人物はいないのでね。それに、畑山という青年は、列車内で、車掌にからむような人間じゃないような気がするんだ」
「そういえば、大学時代の友人や、社会へ出てからの会社の上司も、素直で、協調性があるということでしたね」
「それが、いったんおさまった口論だったのに、あ

とになって、わざわざ、乗務員室へ押しかけて行って、ぶん殴っている。どうも、引っかかるんだよ」
「アリバイ作りですか？」
亀井が、眼を光らせた。
「その可能性があるんだが、その場にいたことだけは、事実だからねえ。和歌山県警でも、アリバイありになってしまっているんだ」
「伊勢線でも、妙なことがあると思うのですよ」
亀井は、そういい、捜査本部に戻ると、時刻表を持ち出して来た。
「三重県警の話では、西田は、津駅で、タクシーを拾って、伊勢線の河芸駅へ行ってくれといったことになっています」
「その通りだよ。だから、西田は、南紀から戻ってくる途中で、津で降り、タクシーを拾ったことになったんだ」
「タクシー運転手が、西田を乗せたのは、午前十一時三十分頃だったといっています」
「それで、死亡推定時刻と、合うんだよ。河芸駅に着いたのが、十一時五十分頃だからね。そのあと、すぐ殺されたということになる。別に、おかしくはないだろう」
「そのことじゃなくて、南紀から、西田は、どの列車に、乗って来たかということなんです。津駅で、十一時三十分に、タクシーに乗ったとすると、それより前に、南紀から、津に、着いたことになります。各駅停車で、帰って来たとは、思えません。各駅停車は、亀山行で、帰京するには、回り道になるし、時間が、かかり過ぎます。従って、特急『南紀』を、利用したと思うのです」
「そうだろうね」
「ところで、津へ、十一時三十分以前に着く特急『南紀』というと、新宮を六時四六分に発車する名古屋行の『南紀2号』しかありません。次の『南紀4号』は、津着が、一二時二六分だからです」
「そうだね」

「だから、『南紀2号』に乗ったことになるんですが、津着が、九時三六分。西田が、この列車に乗ったとすると、タクシーに乗った時まで、二時間近くも、時間があることになってしまうんです」
「二時間か」
「少しおかしくはありませんか？」
「まあ、おかしいといえば、おかしいがね。西田が、新宮あたりにいて、犯人と、伊勢線の河芸で、会う約束をしたとする。犯人が、十二時と、指定した。丁度、ぴったりの列車がなければ、たとえ、二時間前に着くとわかっていても、その列車に、乗って行くんじゃないかね」
と、十津川はいったが、亀井は、まだ、納得できない顔つきだった。
確かに、亀井のいう通りなのだ。第一、なぜ、こんな小さな駅で、待ち合せたのかもわからない。
「すると、カメさんは、西田が、南紀から来たんじゃないと、思うわけかい？」
「じゃないかと思うんです」
「しかし、津駅で、タクシーに乗ったことは、間違いないんだ」
「ええ。わかっています」
「新宮あたりにいて、朝、列車に乗って、津へ来たのではなく、津の近くにいたんじゃないかと、思うわけかい？」
「そうなんです。新宮とか、熊野だったら、特急に乗らなければ、不自然です。しかし、特急の停らない小さな駅で、しかも、津の近くなら、普通列車に乗って、津へ来たとしても、おかしくは、ありません」
「普通列車なら、適当なのがあるのかね？」
「一〇時五五分に、津へ着くのがあります。これでも、タクシーに乗るまで、四十分近くありますが、特急『南紀2号』で着いたと考えるより、不自然さは、小さくなると思うんです」
「なるほどね」

十津川は、肯いてから、改めて、紀伊半島の地図を眺めた。

犯人は、七月三日に、和歌山で、安藤を殺した。

翌七月四日、串本で、真田を殺害。

翌七月五日、河芸で、西田を殺害。

同七月五日深夜、東京で、佐伯のマンションに、ダイナマイトを放り込み、佐伯が負傷。

犯人は、七月三日から五日にかけて、南紀を、ぐるりと廻り、東京に戻って来た。三人の人間を殺してである。

「まるで、殺人ルートですね」

亀井が、溜息をついた。

「この殺人ルートに沿って、われわれも、廻ってみる必要があるね」

と、十津川が、いった。

翌七日に、十津川は、畑山恵が勤めているS電機に、電話をかけてみた。

ひょっとすると、畑山は、出勤していないのではないかと思ったのだが、S電機の研究開発部に、ちゃんと、来ていた。

昼休みなら、会ってもいいという畑山の言葉なので、十津川と、亀井は、三鷹にあるS電機に出かけて行った。

研究開発部の建物は、広い敷地の中に、緑に囲まれて、建っていた。

グリーンの芝生、テニスコート、五十メートルプール。それに、手入れの行き届いた杉林。

環境は、素晴らしかった。

十津川と亀井は、人工池の傍のベンチで、畑山に会った。

「めぐまれていますねえ」

十津川は、周囲を見廻しながら、畑山に、いった。ここでは、小鳥のさえずりも、聞こえてくる。

「ありがたいと、思っています」

と、畑山は、いった。

「畑山さんは、ここで、何を研究していらっしゃるんですか？」
十津川が、きいた。
「僕は、まだ、開発グループの一員でしかありません。音声が、そのまま文字になるワープロの開発グループですが、その中じゃ、僕は、一番の下っ端です」
「旅行は、時々、なさるんですか？」
「研究と実験のくり返しですからね。何よりも、旅行が、一番の頭のリフレッシュになるんです。それも、行き当りばったりとか、ローカル線を利用したものとか、そういう旅行が、一番いいですね」
「和歌山線も、その一つだったわけですか？」
十津川がきくと、畑山は、一瞬、「え？」と、いう顔をしてから、
「よくご存知ですね」
「和歌山県警から連絡がありましてね」
「ああ、向うの警察には、ずいぶん、お世話になってしまったんです。留置場に泊めて貰いましたよ。毛布を二枚、貸してくれましてね。お礼状を出しておかないといけないな」
「奈良から和歌山に出たとすると、七月二日は、奈良に一泊したわけですね？」
「そうです」
「すると、二日から昨日の六日まで、丸五日間の旅行をされて来たことになりますね」
「ええ」
「休暇は四日間だけとったように、聞いていますが」
「二日は、日曜だから、四日間で、よかったんです」
「ああ、そうでしたね。二日に、奈良の何という旅館に泊ったんですか？」
「猿沢池の近くの『きくや』という小さい旅館です」
「そして、三日は、和歌山の警察の留置場です

か？」
「ええ。一生の思い出ですよ」
「四日は？」
「新宮まで、足を伸ばして、新宮市内の旅館に泊りました。あそこは、小さい旅館の多いところですね。商人宿みたいな『朝日館』という旅館に、泊りました」
「串本へ行く筈じゃなかったんですか？」
「最初は、そのつもりだったんですが、名古屋行の特急『南紀』は、新宮発ですからね」
「すると、五日は、どうしたんですか？」
「九時三八分発の『南紀4号』で、名古屋へ行きましたよ」
「ちょっと待って下さい。あと一日、休みがあるのに、『南紀4号』で、南紀を出てしまったんですか？」
「ええ。本当は、瀞峡とか、あの辺りにある温泉にも行ってみたかったんですがね」
「なぜ、そうしなかったんですか？」
「静岡で、友人に会うことになっていたのを思い出したんです。近くに来たら、必ず、寄ってくれといわれていたのですよ」
「それで、名古屋から、静岡へ行った？」
「ええ。静岡で、夕食を一緒にしました」
「そのお友達の名前を、教えて貰えませんか」
「大学時代の友人で、林勇一郎といいます。静岡のK機械に勤めている男です。彼の退社後、夕食を一緒にしましたよ」
「その日は、静岡に泊ったんですか？」
「そうです。駅前のホテルに泊りました。ホテル『新静岡』です」
「小さな旅館にしなかったんですか？」
「南紀を一日早くきりあげて、お金が余りましたのでね。最後に、ホテルに泊ってみたんです」
「そして、翌日の六日に、東京に帰って来たんですか？」

「そうです。昼少し前に、東京に着きました」
「念のために、調べますが、構いませんか？」
「どうぞ。別に、やましいことは、ありませんから」
と、畑山は、微笑した。

5

捜査本部へ戻ると、十津川と、亀井は、畑山のいった旅館や、ホテル、それに、静岡の友人、林勇一郎に、電話をかけてみた。
畑山は、嘘は、いっていなかった。
七月二日に、奈良の旅館「きくや」に、間違いなく、一泊している。
七月四日は、新宮の「朝日館」に宿泊。
七月五日は、静岡市のホテル「新静岡」のシングルルームに一泊。
静岡市のK機械に、間違いなく、林勇一郎という青年が、勤めていた。
十津川の質問に対して、
「ええ。間違いなく、五日に、畑山に会いましたよ。そうです。大学時代の友人です。ええ。夕食を一緒にしました」
と、はっきり答えた。
「近くへ来たら寄るということになっていたそうですね？」
「ええ。そうなんです」
「五日の何時頃、電話があったんですか？」
「確か、午後一時四十分頃じゃなかったかな。今、南紀を廻って、名古屋に着いたところだというんです。もちろん、会社の方へ、かかって来たんですよ。それで、静岡へ来るというので、夕食を一緒にすることにしたんです」
「何時頃まで、一緒にいたんですか？」
「十時頃までだったと思いますね。奴は、南紀を廻って疲れているみたいでしたが、バーを一軒つき

あってくれましてね。ホテルまで送っていったんです。それで、別れました」
「それが、十時頃？」
「そうです。奴は、警察沙汰になるようなことはしませんよ。いい奴なんです」
「わかっていますよ」
と、十津川は、いった。
確かに、爽やかな感じの青年である。しかし、どんな人間だって、殺人はやる。
十津川は、礼をいって、電話を切った。
「予想どおりだな」
と、十津川は、亀井に、いった。
「しかし、警部は、まだ、彼を疑っていらっしゃるんでしょう？」
「ああ。疑っている。彼は、頭がいい青年だ。われわれに、すぐ、ばれるような嘘はつかないだろうと、思っていたんだ」
「特急『南紀4号』に乗ったというのも、本当のようですね。この列車は、終点の名古屋に、一三時三〇分に着きます。友人の林は、午後一時四十分頃、名古屋に着いたという電話を貰ったと、いっていますから」
「他の場所にいて、今、名古屋に着いたと、電話することも、可能だよ」
「そうなんですが、次の『南紀6号』では、新宮発が一三時三八分ですから、走行中の列車内ということになってしまいます」
「林勇一郎に、新宮のホームから『今、名古屋に着いた』と、電話してから、『南紀6号』に、乗ったということは、あり得るだろう。午後一時四十分頃といっても、ジャストじゃないからね。いかにも、『南紀4号』に乗って来たと見せかけて、次の『南紀6号』に乗って来たということは、考えられるだろう？」
「それは、あり得ませんね。『南紀6号』は名古屋着が、一七時三二分。名古屋から静岡まで、新幹線

の『こだま』で、一時間十五分かかります。午後六時には、会えなくなりますからね」
「駄目か」
「従って、畑山は、その点でも、事実を話しているわけです」
「どうも、気に入らないね」
「事実ばかりだからですか？」
「そうだよ。これでは、まるで、アリバイ作りの旅じゃないか。畑山が、丁度、南紀を廻った時に、南紀で、連続殺人事件が起きている。しかも、畑山と関係のある男たちが、殺されているんだ。畑山をマークするのは、当然だよ」
と、十津川が、いった時、本多捜査一課長から、電話があった。
「明日、和歌山で、向うの県警と、合同捜査の打ち合せをやってくれ。三重県警の担当者も来ると、いっている」
と、本多は、いった。
「私と、カメさんで、行って来ます」
十津川が、いった。

第四章　合同捜査会議

1

七月八日の朝、十津川と亀井は、新幹線で、大阪へ向った。

朝は、小雨が降っていたが、新大阪へ着く頃には、あがっていた。

新大阪から、地下鉄で、天王寺へ出て、ここから、和歌山行の列車に乗った。

天王寺から和歌山へは、阪和線の快速も出ているし、L特急の「くろしお」に、乗ってもいい。

会議は、和歌山駅近くの東警察署に設けられた、捜査本部で、午後一時からということだった。

十津川と、亀井は、天王寺発一一時四六分の快速に乗った。

和歌山着が、一二時四〇分である。

東京を出たのが、午前八時〇〇分の「ひかり3号」だったから、五時間足らずで、和歌山に着いたことになる。

意外に近いというのが、実感だった。

三重県警の佐藤警部は、すでに、到着していた。

和歌山県警の春木警部とは、電話で、一番話したわけだが、十津川が、想像した通りの男に見えた。

一見、気さくだが、頑固な中年男という感じである。身体も、大きい。声も大きい。

和歌山県警の本部長が司会して、会議になった。

十津川が、最初に、一番新しい事件として、東京で、佐伯が狙われた事件を、詳しく説明した。

「これは、明らかに、三つの殺人事件の続きだと、私は思います。従って、佐伯は、もう一度、狙われると、考えていますし、三つの殺人事件は、同一犯

人の筈です」
と、十津川は、いった。
「当然、佐伯の周辺は、警戒されているわけでしょうな？」
春木が、怒ったような口調でいった。いつも、喋るときは、そんな口調になるらしい。
「一応、佐伯の住んでいるマンションは、見張っていますが、佐伯自身が、男を二人傭いましてね、自分のことは、自分で守るといっているのですよ」
十津川は、佐伯の傭った二人の男のことを、説明した。
特に、塚本については、詳しく話した。
「佐伯が、自分のガードマンを身近かに置くのを止めさせるわけにはいきませんが、塚本は、問題があって、警察をやめた男です。私が会った限りでは、その性格は、変っていないように思いますし、むしろ、金のために、危険な行為に走りかねないと、それを、心配しているのですがね」
「元警察官か」
県警本部長が、苦い顔をした。
「そうです。塚本が、何かすれば、必ず『元警察官』という但し書きつきで、記事になるでしょうね」
「具体的に、何をやる心配があるということですか？」
三重県警の佐藤が、静かな調子で、十津川を見た。
「そうですね。まず、考えられるのは、過剰防衛です。犯人を捕えたとき、大人しくわれわれ警察に引き渡すとは、ちょっと考えられないのです。正当防衛を理由に、痛めつけると思いますね。下手をすると、殺しかねない。それを心配しています」
「殺す？　まさか、そこまではしないんじゃありませんか？」
「と、思いますが、塚本は、現職の刑事だった頃、容疑者を暴力的に、痛めつけることで、物議をかも

していたんですが、その時に、彼は、よく『おれが、刑事じゃなかったら、お前みたいな悪党は、叩き殺してやるんだ』と、脅していたというのです。その枠がなくなって、正当防衛という名分があるわけですからね」

「こちらが、一刻も早く、犯人を逮捕してしまえば、その心配も、杞憂に終るわけですね」

「そうです」

「それで、この一連の事件について、犯人は同一人ということでは、意見は、一致しているわけだね？」

本部長が、三人の警部の顔を見廻した。

「これは、同一人としか考えられんのです」

と、春木が、大きな声で、いった。

春木は、更に、言葉を続けて、

「和歌山と、串本の事件についていえば、犯人は、ホテルに電話して、被害者が、どこにいるかを確めたり、ロビーに呼び出したりして、殺しています。手口は、同じです。三重と、東京の事件は、多少、違っていますが、狙った二人は、前の二人と、同じ穴のムジナの悪党です。当然、同じ犯人ですよ」

「それで、その犯人だが、東京では、どう考えているのかね？」

本部長が、十津川を見た。

「被害者四人が、東京の人間か、或いは、東京にいた男ですし、今度の事件の原因となった一年半前の騒ぎも、東京で起きています。それで、犯人も、東京の人間と思って、調べていったわけですが、最後に残ったのは、畑山恵という二十代の青年です」

十津川は、改めて、畑山の写真を、配った。

「しかし、この畑山には、アリバイがあるんだろう？」

本部長は、春木を見やった。

「和歌山の殺人事件について、アリバイがありますな」

「それは、どうしようもないのかね？　そんなに強

いアリバイなのか？」
「証人が、国鉄の車掌ですからね。公判にでもなった時は、有力な証人になると思いますね」
「その車掌と、畑山のなれ合いということは考えられないのか？」
「それは、まず、考えられませんね。いろいろと、この車掌のことを調べてみましたが、畑山とは、世代も違うし、東京に行ったこともありません。二人の間に、何か関係があったということは、ないと、確信しています」
「しかし、畑山の態度は、私には、どうも、不自然だがねえ」
本部長は、首をかしげている。
春木は、ハンカチで、太い首筋の汗を拭き、近くにいた一枝刑事に、
「おい。もっと冷房を強くしろ」
と、小声で、命令してから、
「確かに、わざわざ、乗務員室まで、押しかけて行って、口論をむし返し、殴るというのは、アリバイ作りの匂いもしますがねえ。だからといって、それなら、畑山が、どうやって、和歌山で、安藤を殺したかということになると、わからんのです。とにかく、彼の乗った和歌山線の列車は、一六時〇五分に、和歌山に着いたことは、まぎれもない事実なんですよ。この事実だけは、否定できない。安藤弁護士の殺されたのが、三日の午後三時十五、六分頃。これも、動かしようがない。とすると、午後四時過ぎに、和歌山線で、和歌山に着いた畑山には、絶対に、殺せないんですよ。残念ですがね」
「十津川警部は、その点を、どう思うかね？」
本部長が、十津川の意見を聞いた。
「畑山が犯人とすれば、何か、アリバイトリックがあるに違いないと思います。それに、彼は、七月三日から五日にかけて、南紀を廻っていますから、彼が、一連の事件の犯人である可能性は、大きいと、思っています」

「畑山は、それを隠していないようだね？」
「全く、隠していませんね」
「なぜかね？　自信があるからだろうか？　それとも、彼がシロだからかね？」
と、本部長が、きく。
「シロだとは、私は、思っていないのです。他に、容疑者がいませんし、彼に会って、彼と話をしていると、確信は、強くなって来ました」
「どんな男だね？」
「清潔な感じのする、いい青年ですよ。おかしない方ですが、私は、好きになりましたね。曇りのない、きれいな眼をしていました。芸術家は、多分、この男は、無実だ、眼を見れば、わかると、いうでしょうね」
「しかし、君は、逆に、畑山が犯人だと、確信したんだね？」
「そうです」
「なぜだね？」
「畑山は、覚悟を決めて、犯行を行っているんじゃないかと思うのです。しかも、自分が、正しいことをしているのだという確信がある。だから、迷いのない、きれいな眼をしているんだと、思うのですよ。従って、こちらが、論理的に追いつめていけば、意外に、あっさりと、自供することも考えられます。なぜなら、彼は、自分の思いを、誰かに、打ち明けたい、自分の、やっていることの意味を、誰かに聞いて貰いたいと考えていると、思うからです」
「三重県警の意見も、聞きたいね」
と、本部長は、佐藤警部に声をかけた。
佐藤は、「そうですねえ」と、静かに、いった。
「畑山が、新宮の『朝日館』に、泊ったことは、われわれも、確認しました。畑山が到着したのは、四日の午後六時頃だと、旅館の主人は、いっています。興味があるのは、畑山が、翌朝、午前六時半に、旅館を出ていることです。東京警視庁からの連

絡では、畑山は、七月五日の『南紀4号』に乗って、名古屋へ戻ったといっていますが、この列車の新宮発は、午前九時三八分なのです。三時間以上も前に、彼は、旅館を出ているのですよ」

「その前の列車に、乗ったんじゃないかと、思っているのかね？」

「そうなんです。『南紀2号』の新宮発は、六時四六分です。六時半に、旅館を出れば、ゆっくり、この列車に間に合います。多分、畑山は、この『南紀2号』に、乗ったのではないかと思っています。旅館の話だと、畑山は、急に、静岡に寄らなければならなくなってしまったので、朝の中に、新宮市内を見物してから、『南紀4号』に乗るのだといって、朝早く、出て行ったそうですがね」

「一応、理屈は、通っているがね」

「しかし、私は、畑山が、午前六時四六分新宮発の『南紀2号』に、乗ったと、思っているんです」

と、佐藤は、いった。

刑事というのは、やはり、みんな強情なのだ。

「しかし、畑山が、『南紀2号』に乗ったことは、どんな意味があるんだろうか？」

本部長は、当然の疑問を口にした。

「西田も、『南紀2号』に、乗ったんじゃないかと、思っているのです」

と、佐藤は、いった。

十津川は、亀井と、顔を見合せた。亀井も、同じことを、考えていたからである。

「すると、西田は、畑山と、五日に、同じ列車に乗っていたということか？」

本部長が、眼をむけて、佐藤を見た。

「その可能性が出て来たということです。西田は、五日の十一時三十分頃、津駅から、タクシーに乗って、伊勢線の河芸へ行き、殺されました。南紀から来て、十一時三十分に、津で、タクシーに乗るためには、『南紀2号』に乗っていなければ、ならないんです。とすると、西田と畑山は、同じ『南紀2

号』に乗っていた可能性が、強くなります」
「それは、面白いね」
本部長が、大きく、肯いた。
確かに、興味のあることだった。
ただし、それが、事件の解明に、どう役立つのだろうか？

2

当然、疑問は、そこに、集中した。
特急「南紀2号」の車内で、西田が殺されたというのであれば、容疑者の畑山も、同じ列車に乗っていたことは、大きな意味を持っている。
それだけでも、畑山を逮捕する理由になるだろう。
だが、西田が殺されたのは、「南紀2号」の車内ではなくて、河芸のホームである。
「二つ、疑問がありますね」
と、いったのは、佐藤である。
「いってみたまえ」
本部長が、促した。
「自分で、いっておいて、変なんですが、新宮、熊野、尾鷲、紀伊長島といった、特急の停る駅の周辺を、調べているんですが、いくら、聞き込みをやっても、西田新太郎が、泊ったホテル、旅館が、見つからないのです。これが、疑問の第一です。第二の疑問は、二人の行動です。西田は、津から、タクシーに乗って、河芸へ行った。これは、運転手の証言で、はっきりしています。問題は、畑山の方です。彼が犯人なら、彼も、河芸へ行ってなければいけないわけです。ところが、津駅のタクシーを、いくら調べても、畑山らしい男を乗せた運転手は、見つからないのです。といって、適当な伊勢線の列車もないのです」
「畑山は、四日市の側から、河芸へ行ったんじゃないかな？」

春木が、佐藤に向って、顎を突き出すようにして、いった。
「どういうことだね？」
と、本部長が、きく。
春木は、また、本部長に向き直って、
「畑山が、犯人だとします。殺す相手の西田と一緒に、津でおりたのでは、あとになって、調べられたときに困る。そこで、会う場所を、河芸と決めてから、自分は、特急『南紀2号』に乗って、四日市まで行ったんじゃないかと思うのです。そして、四日市側から、河芸へ行けば、津駅のタクシーを調べられても、彼は安全ですからね」
「特急『南紀2号』に乗って、四日市へ着くと、何時になるのかね？」
「一〇時〇四分です」
「四日市から、河芸へ行くと、何時になるね？」
「こちらも、適当な伊勢線の普通列車はありません。一三時一二分四日市発の列車がありますが、これの河芸着は、一三時四九分で、死亡推定時刻に合いません。だから、四日市から、タクシーに乗ったんだと、思いますね」
「なかなか、面白いな」
「この考えで、今まで、謎だったことに、説明がつきます」
「何だね？」
「西田が、津からタクシーに乗った時刻のことです。彼は、十一時三十分頃に、乗っています。彼は、『南紀2号』に、乗って来たと思われるわけですが、とすると、津着九時三六分で、二時間も、あります。なぜ、もっと早く、河芸へ行かなかったのかという疑問があったわけです。相手の畑山が、四日市まで行って、遠廻りして、河芸へ来ることになっていたとすれば、二時間という時間の謎は、解けるんじゃないかと、思うんですよ。遠廻りしてくる畑山に、時刻を合せたので、九時三六分に、津に着きながら、十一時三十分まで待って、タクシーに

乗った。そう思いますがね」
春木は、得意気に、鼻をうごめかせた。
確かに、彼のいう通りに考えれば、謎の一つは、答が見つかったことになる。
「しかし――」
と、いったのは、佐藤だった。
「三重県警では、四日市駅のタクシーも、調べました。しかし、畑山と思われる男を、七月五日に、乗せたという運転手は、見つからないんですよ」
「運転手全員に、当ったのかね？」
春木は、眉をひそめて、佐藤を見た。
「当りましたよ」
「おかしいな。すると、畑山は、津からも、四日市からも、河芸へ行かなかったことになってしまう」
「そうなんです。それで、私も、当惑しているんですよ」
と、佐藤は、いった。
「しかし、畑山が犯人なら、彼も、伊勢線の河芸へ行っている筈なんだ」
春木は、唸るような声で、いった。
合同捜査会議は、結局、いくつかの疑問を残したままに、終った。
その疑問点は、箇条書きにされ、コピーして、全員に渡された。
それは、次の通りだった。
①畑山が犯人とした場合、七月三日、和歌山線で、一六時〇五分（午後四時五分）に、和歌山に着いた彼が、どうやって、三時十五、六分頃、和歌山駅前のホテルで、安藤を殺したのか？
②犯人が畑山なら、四日の午後三時に、串本の海中展望塔内で、真田を殺した筈である。畑山は、午後六時に、新宮の旅館に入っているが、その間の行動を、明らかにする必要がある。
③七月五日の西田殺しについて。
畑山が、犯人なら、どうやって、河芸へ行ったのか？

西田の足跡がつかめないのは、なぜなのか？　二人とも、特急「南紀2号」に乗ったのか？

④畑山が犯人なら、同じ五日の夜半、どうやって、東京に行き、佐伯のマンションに、ダイナマイトを、放り込んだのか？

3

翌九日は、日曜日である。

十津川と、亀井は、問題を抱えたまま、東京に帰ることになった。

「和歌山線に乗って、帰ることにします」

と、十津川は、春木に、いった。

畑山は、奈良から、関西本線で、王寺に出て、王寺から、和歌山線で、和歌山に出た。その逆を、行ってみることにしたのである。

春木が、和歌山駅まで、送ってくれた。

和歌山駅は、地上四階、地下一階の堂々としたステーション・ビルである。

ホームは、一階である。

十津川たちは、一〇時三四分発の列車に乗ることにした。

和歌山駅には、紀勢本線、阪和線、和歌山線、それに、南海貴志川線が入っているが、メインは、何といっても、紀勢本線と、阪和線である。

ローカル線の和歌山線は、一番端のホームの8番線からの発車だった。

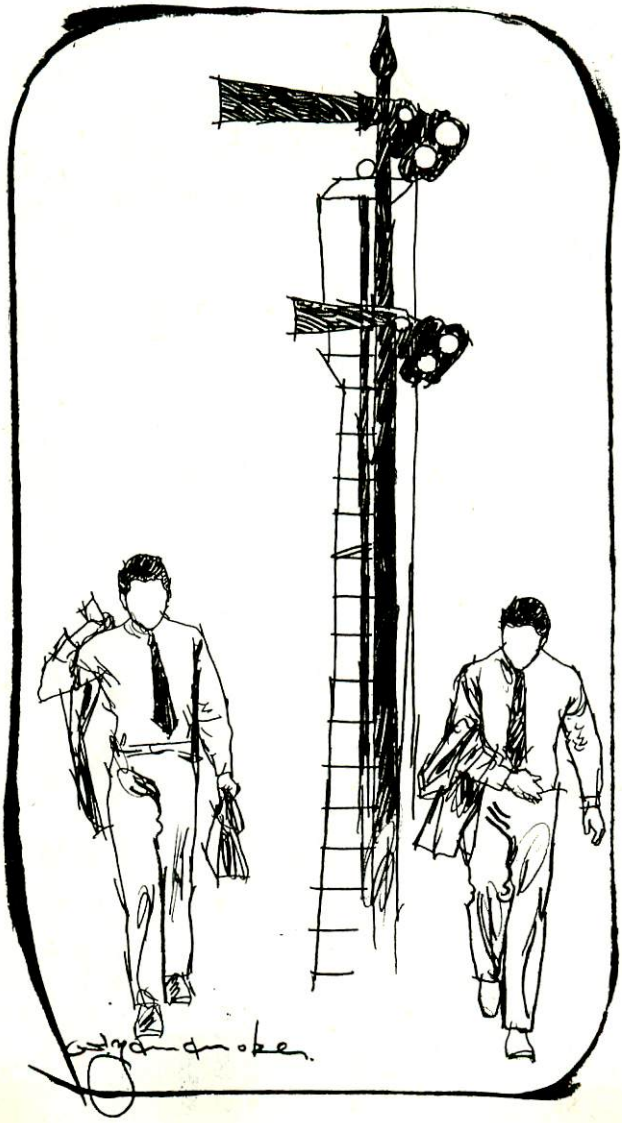
「しかし、前よりは、良くなりましたよ」

と、送りに来た春木が、いった。

ごく最近まで、和歌山から、途中の五条までは、電化されていなかったために、和歌山駅からは、気動車に乗り、五条で、電車に乗りかえたのだという。

「やっと全線が電化されたので、乗りかえずにすみますよ」

と、春木が、嬉しそうに、いった。



非電化の時は、従って、和歌山から五条まで、赤い車体のキハ35とか、キハ45といった気動車が、走っていた。

今、8番線に停車しているのは、113系と呼ばれる、白地に赤い帯の入った電車である。

十津川と、亀井は、四両編成の王寺行に乗った。

発車する時、春木が、大声で、

「お互に、がんばりましょう！」

と、いった。

十津川は、照れ臭いので、ただ、手を小さく振っただけである。

日曜日なので、がらがらということはなかったが、六十パーセントぐらいの乗車率といったところか。

二人は、向い合いの席に腰を下した。

「これから、王寺まで、二時間十三分の旅です」

と、亀井が、時刻表を見ながらいった。

「各駅停車だから、仕方がないさ。ローカル線の旅も、悪くはないよ」

十津川は、窓の外に、眼をやった。

和歌山線は、紀ノ川に沿って、走る。紀ノ川沿いの歴史を調べるといった旅には、丁度いい線だろう。

十津川は、和歌山市内で買った和歌山線の案内を広げながら、列車が、次々に停車する駅名を見ていた。

田井ノ瀬、千旦、布施屋と、面白い駅名が続く。

この辺りは、水田が広がっている。

布施屋というのは、律令制が施かれていた頃、旅人に、施しをした施駅のことだと、案内に出ている。

考えてみると、紀ノ川を、さかのぼっていくと、奈良の吉野である。古い歴史が、ちらつくのは、当然なのだ。

五つ目の船戸に着く。船戸は、文字通り、紀ノ川の船着場のことである。

船戸を出てすぐ、十津川たちの乗った列車は、轟音を立てて、紀ノ川を渡った。

豊かな水量である。川岸に沈めた白いテトラポッドが、太陽を反射して眩しい。

「七月三日ですが、畑山も、窓の外の景色に見とれていたんでしょうか？」

亀井が、きいた。

「彼が犯人なら、そんな余裕はなかった筈だよ。何かトリックを使って、午後三時十五、六分に、和歌山のホテルで、安藤を殺し、また、この和歌山線の列車に、戻って来たわけだからね。多分、ちらちら、腕時計を見ていたんじゃないかね」

「乗務員室に押しかけて、車掌を殴る必要もありましたからね」

「あれは、明らかに、アリバイ作りだよ。自分が、その列車に乗っていたことを、印象づけるのに、よくやる手だからね。車内で、わざと問題を起こすのは」

紀ノ川を渡ったところが、岩出である。

下井阪、打田と、続くのだが、窓の外を見ていると、新しい家が、かたまって建っている。この辺りまで、和歌山市のベッドタウンになっているのだろうか？

粉河は、西国三番札所で有名な粉河寺のあるところ、次の名手は、華岡青洲の墓がある。

まるで、歴史散歩のような線だなと、十津川は、思った。

小さな駅が、いくつもある。一つ置きぐらいに、無人駅である。

西笠田、笠田、大谷、妙寺、中飯降、高野口、と、由緒ありげな駅が続く。

この中、笠田は、中世の荘園があったところとして有名である。

五条には、一一時五三分に着いた。ここで、半分以上、来たことになる。

ここから、紀ノ川と、お別れである。紀ノ川は、

この辺りから、吉野川と、名称が変わる。
二つ先の吉野口で、十津川と亀井は、駅弁と、お茶を買った。
和歌山線で、駅弁を売っているのは、和歌山、王寺の二つの終点と、吉野口駅だけである。
二人の買ったのは、いずれも、吉野口の名物の鮎ずしと、柿の葉ずしだった。
鮎ずしの方は、吉野川の鮎を使った押しずし、といっても、今は、養殖の鮎だろう。柿の葉ずしは、鯖ずしを、柿の葉で、包んだものである。
十津川は、駅弁を食べながら、しきりに、腕時計を見たり、時刻表を見たりしていた。
「どうされたんですか？」
と、亀井が、きいた。
「この列車の時速を計算していたのさ。和歌山から王寺まで、時刻表によると、約九十キロだ。それを、二時間十五分で走る。時速は四十五キロまでいっていないことになる。これにアリバイトリックがあるような気がするんだがねえ」
と、十津川は、いった。
高田駅で、桜井線と一緒になった。
だんだん、家並みが、混んでくる。今度は、この辺りから、大阪への通勤圏に入るからだろう。
終着の王寺駅に着いたのは、定刻の一二時四七分である。
ホームに降りると、亀井は、大きく伸びをしてから、
「これから、どう帰りますか？　畑山のように、奈良を廻って、帰りますか？」
「ちょっと待ってくれないか。カメさん」
「待つのは構いませんが、どうしたんですか？」
「畑山は、七月三日に、この王寺を一三時一四分に出るのに乗って、和歌山に向ったんだ」
「ええ。その通りですが」
「今、十二時四十七分、いや四十八分になったが、まだ、間に合うよ」

「また、和歌山まで行くんですか？」
亀井は、二時間十三分の旅を思い出して、肩をすくめた。
「畑山が乗ったのと同じ一三時一四分の列車に、乗ってみたいんだ」
「彼のアリバイトリックが、わかりましたか？」
「ちょっと、気になることが、あってね。一三時一四分発に乗って、それを、試したくなったんだよ、悪いね、カメさん」
「とんでもない。アリバイトリックが、解明できるんなら、何回往復しても、構いませんよ」

4

二人は、いったん、改札口を出たあと、和歌山までの切符を買い求めて、ホームに戻った。
和歌山行の四両連結の列車に、乗った。
一三時一四分、王寺駅を発車した。
畑山は、すぐ、足を踏んだ踏まないで、車掌と口論をしたらしいが、十津川と亀井には、そんなことは、もちろん、なかった。
亀井は、十津川がどんな風に、畑山のアリバイトリックを破ろうとしているのか、わからなかった。
車窓からの景色は、もう、和歌山から来る時に、見てしまっている。
（退屈だな）
と、思った。
煙草を取り出して、火をつけた。
（畑山は、途中で降りて、車を飛ばして、和歌山に行ったのだろうか？）
さっき、十津川は、この列車の時速は、四十五キロ以下だから、それが、トリックに使われたのではないかと、いった。
途中でおりて、タクシーを飛ばせば、この列車より先に、和歌山に着けるだろう。
地図によれば、国道24号線が、和歌山線と、ほぼ

平行して走っている。それを、時速四十五キロ以上で、飛ばせば、先に、行けるのだ。

（一時間も、先に着くのは、ちょっと骨かも知れないが――）

と、そこまで考えてから、亀井は、「あれ？」と、思った。

十津川の姿が、見えない。

さっき、トイレに立った筈なのだが、まだ、戻っていないのである。

（トイレにしては、長過ぎる）

と、思ったが、十津川は、いっこうに、戻ってくる様子は、なかった。

（もう、アリバイトリック解明の実験を始めたらしい）

と、思ったが、亀井は、このまま、和歌山まで行くことにした。

亀井までが、途中下車してしまったら、実験にならなくなってしまうからである。和歌山線に乗って、和歌山まで行く人間もいなくては、実験の意味がない。

十津川が、消えてしまったのに気付いたのは、高田を出てからである。と、すると、王寺から高田までのどこかで、十津川は、この列車を降りてしまったらしい。

王寺から、高田まで、駅の数は、高田を入れて、四つである。

畠田（はたけだ）、志都美（しずみ）、下田（しもだ）、高田である。この中のどの駅で、十津川は、おりたのだろうか？

途中から、雨が降り出した。

まだ、梅雨が、あけていない。

亀井は、窓の外の雨足を見ているうちに、つい、うとうとしてしまった。

はっとして、眼をさますのだが、また、眠ってしまう。それだけ、二度目の景色は、詰（つま）らないということだろうか？

「カメさん」

と、ふいに、呼ばれて、亀井は、眼を覚ました。
向いの席で、十津川が、にこにこ笑っている。
亀井は、眼をこすりながら、
「今、どこですか？」
「あと十七、八分で、和歌山へ着くよ」
「警部は、途中で、いなくなりましたね？」
「そうだったかな」
十津川は、とぼけた顔になった。
亀井が、窓の外を見ると、布施屋駅に、停ったところだった。
この駅名は、覚えがある。あと、少しで、和歌山である。
景色の中に、家並みが増えて来て、やがて和歌山駅に着いた。
一六時〇五分。定刻着である。
七月三日にも、畑山は、同じ時刻に、和歌山線で、ここに着いたのだ。
「実験は、成功だったんですか？」
と、ホームに降りてから、亀井は、十津川に、きいてみた。
「まあ、だいたい成功したね」
と、十津川が、いう。
「私には、よくわかりませんが」
「まず、お茶でも、飲まないか。実験のために、走り廻ったんで、少し、疲れたよ」
十津川は、本当に、疲れた顔で、いった。
二人は、駅の構内の喫茶店に入った。
十津川は、珍しく、コーヒーでなく、オレンジジュースを頼んでから、
「畑山は、若いんだなと、わかったね。当り前なんだが」
「走り廻ったというのは、どういうことですか？」
「駅での乗りかえに走り、切符を買うのに走りでね。もっとも、七月三日の畑山は、前もって、切符を買っておいたんだと思うがね」
と、十津川は、いった。が、まだ、亀井には、よ

くわからなかった。
「畑山が、犯人とすると、駅前のホテルで、安藤を殺したわけですが、その実験も、すませたわけですか？　もちろん、殺人の実験なんかは出来ませんが、殺人に必要な時間は、考慮しておく必要があるでしょう？」
「ああ、ちゃんと、その時間も、確保したよ」
「午後三時十五、六分に、警部は、和歌山へ行って来られたわけですか？」
亀井は、信じられないという顔になっていた。
「まあね」
「そんな時間が、作れましたか？」
「作れると思ったからこそ、畑山は、王寺から、わざわざ、和歌山線に乗り、車内で、車掌とケンカしたりしたんだ」
「畑山が犯人とすれば、そうなりますが」
「とにかく、もう、四時を過ぎてしまったから、今日中に、東京に帰るのは、諦めた方がいいね」
十津川が、腕時計を見て、いった。
「畑山と同じように、和歌山警察の留置場に、泊めて貰いますか？」
亀井は、多少、ふざけて、いった。
「あれも、畑山が、和歌山線に乗っていたことを強く印象づけようとして、警察に文句をいって、車掌とのケンカを、ぶり返して、見せたんだと思うよ」
「慎重な性格ということですかね？」
「畑山にとっては、最初の殺人だったわけだからね。彼は、四人全部を殺したいんだ。最初の殺人で、逮捕されてしまっては、一人しか殺せない。逆に、最初の殺人がシロという印象を作ってしまえば、第二、第三の殺人でも、容疑をかけられずにすむ。警察は、当然、同一犯人と考えるからね。だから、畑山は、慎重の上にも、慎重を期したんだと思うね」
「それで、今日の実験のことですが」
「それより、まず、今夜泊る場所を、確保しておこ

うじゃないか」
「留置場は、駄目ですか？」
「向うも、困るだろう」
と、十津川は、笑ってから、
「やはり、安藤弁護士の泊ったホテル『南紀』にしたいと、思うんだがね。カメさんは、どう思うね？」
「そうですね。殺人現場になった一階ロビーのトイレも見たいと思います。しかし、今日は日曜日ですから、今から、部屋をとるのは、難しいんじゃありませんか？」
「まあ、部屋がとれるかどうか、ホテルのフロントに、かけ合ってみようじゃないか」
十津川は、オレンジジュースを飲み干して、立ち上った。
小雨は、まだ降り続いていたが、それでも、日曜日のせいか、和歌山駅前は、観光客で、賑わっている。
（今から、大丈夫かな？）
と、思いながら、亀井は、十津川と、駅前のホテル「南紀」に、入って行った。
一階ロビーにも、観光客の姿が多い。
亀井が、フロントの受付と書かれたところへ行き、
「部屋を、借りたいんだが」
「ご予約をされていますか？」
「いや、今、来たところなんだが」
「申しわけございませんが、全室、ふさがっておりまして」
フロント係は、頭を下げた。
亀井が、やはり駄目でしょうという顔で、十津川を振り返ると、十津川は、
「私だよ」
と、フロント係に、いった。
フロント係は、そのとたん、にっこりして、
「ああ、さっき予約して頂きました、東京の十津川

様ですね。それなら、よろしいんです」
「私が、何時頃、ここへ予約しに来たか、覚えているかね？」
「ええ。今日の三時少し過ぎでした。それが、何か？」
「いや。覚えてくれていれば、それでいいんだ」
十津川は、満足そうに肯き、部屋のキーを受け取った。
十津川は、亀井を促して、エレベーターのところへ歩きながら、
「実験は成功したよ」
「三時に、ここへ来られたんですね？」
「ダブルルームの予約をした。五、六分、かかったと思う。それだけあれば、畑山は、一階ロビーのトイレで、安藤を、殺せたんじゃないかと思ってね」
十津川は、喋りながら、エレベーターの横にあるトイレを、のぞき込んだ。
そこからは、完全に、フロントが見えない。泊り客も、ここに、トイレがあることに気付かないのか、利用者は、ほとんどいないようだった。
「どうやって、三時に、予約をとることが、出来たんですか？」
亀井が、きいた。
「それは、部屋に入ってから、話すよ」
と、十津川は、にこにこ笑いながら、いった。
二人は、五階のダブルルームに入った。
亀井は、部屋に用意されていたお茶を、注いで、十津川の前に置いた。
「そろそろ、話して下さってもいいんじゃありませんか」
「いいよ。カメさんにもいったが、畑山のケンカは、アリバイ作りだと、確信していた。彼は、和歌山線に乗ってすぐ、足を踏んだ踏まないで、車掌と口論した。そして、和歌山に近づいたところで、また、それを、ぶり返して、今度は、殴りつけている。もちろん、これは、自分を、強く印象づけるた

めとしか考えられなかった。これが芝居だとすれば、畑山の狙いは、はっきりしている。王寺を出てすぐと、和歌山近くで、自分を誇示して、ずっと、和歌山線に乗っていたと思わせたいということだね。逆に考えれば、畑山は、ずっと、乗ってはいなかったということになる」

「途中で、畑山は、列車を降りたということですか？」

「そうなんだ。畑山は、途中で、その列車をおりたんだよ。そして、午後三時十五、六分に、和歌山のホテルで、安藤を殺しておいて、また、同じ列車に戻ったのさ」

「どこで、おりたんですか？」

「多分、高田だと思う。それより先では駄目だと思うね」

「高田でおりて、タクシーを飛ばしたわけですか？時速四十五キロ以上で飛ばせば、あの列車を追い越せるわけでしょう？　六十キロを出せば、午後三時に、和歌山に着けるんじゃないですか」

「それもいいかも知れないが、畑山は、タクシーは、使ってない。使えば、あとになって、足がつくからね。それに、タクシーの場合、途中で、渋滞にぶつかる心配もある。だから、計算が出来ないんだ」

「しかし、和歌山線には、特急は走っていませんから、今まで乗って来た列車は、追い越せませんよ」

「彼は、引き返したんだ」

「引き返す？」

「そうさ。そこに気がついたら、あとは、楽だったよ。畑山は、高田でおりて、また、王寺に引き返したのさ。だから、高田より先では、間に合わない。王寺と高田の間なら、どこでおりて引き返しても、間に合うんだよ」

十津川は、にっこり笑って見せた。

十津川は、時刻表を引き寄せると、

「畑山の乗った列車の高田着が、一三時二九分だ。

逆方向への列車は、一三時三五分発というのがある。これに乗って、王寺へ戻ると、一三時五〇分に、王寺に着ける」
「あとは、関西本線ですか？」
亀井は、索引地図を見ながら、いった。
「そうだよ。関西本線で、天王寺に向うんだ。一三時五二分王寺発の列車がある。この快速に乗ると、天王寺着は、一四時一〇分だ」
「天王寺からは、何に乗るんですか？」
「阪和線に乗ればいい。地図で見ると、天王寺から、和歌山まで、かなりの距離があるように見えるが、実際には、六十一キロしかないんだ。阪和線の快速なら、一時間も、かからない。一四時一六分天王寺発の快速に乗れるから、これに乗ると、和歌山着は、一五時〇九分。午後三時九分だよ」
「ゆっくり間に合いましたね」
「そうさ。しかも、安藤の泊っているホテルは、駅前にある。駅から電話して、安藤を一階ロビーに呼び出しておいて、畑山は、ホテルに向ったんだ」
「なぜ、一階ロビーに、呼び出したんですかね？部屋で殺した方が、楽だったんじゃありませんか？」
「その通りだがね。畑山は、時間に追われていたんだ」
「そうでしたね。もとの列車に、戻らなければ、ならないんでしたね？」
「そうなんだよ。だから、時間を、節約しなければならない。そこで、一階ロビーへ呼び出したんだ。真田の名前を使ってね。安藤は、不審に思いながらも、エレベーターでおりて来た。畑山は、一階のエレベーターの前で待ち受けていて、隣りのトイレに引きずり込んで殺した。フロントの死角になっていたから、目撃者はない。そのあと、畑山は、和歌山駅に、急いで、引き返したんだ」
「適当な列車が、あるんですか？」
「和歌山線の一五時二五分発という列車がある。こ

れに乗ればいいんだ」
「一五時二五分ですか。厳しいですね」
「阪和線で、和歌山に着くのが、一五時〇九分だからね。十六分の余裕しかないんだ。だから、五階まであがって行って、安藤を殺す時間はない。安藤に、一階へおりて来て貰って、時間を節約するより仕方が、なかったんだ」
「一五時二五分発の和歌山線に乗ると、間に合いますか？」
「一五時二五分といえば、最初に、畑山が、王寺から乗った和歌山線の列車が、まだ、和歌山の手前を走っているところだ。問題は、どのくらい手前で、元の列車に、乗り込めるかということだよ。時刻表を見てみると、一五時二五分に、和歌山を出た列車は、一五時四五分に、岩出発となっている。元の列車は同じ一五時四五分に、同じ岩出を出ることになっている」
「と、いうと、岩出で、乗り込んだということですか？」
「かも知れないが、私は、今日の実験で、安全策をとって、一つ手前の船戸でおりたよ。こちらの船戸着が、一五時四二分。元の列車が、この船戸を出るのが、一五時四八分だから、ゆっくり待って、乗り込むことが出来たよ」
「畑山も、船戸から、元の列車に、乗り込んだんでしょうか？」
「多分ね。船戸からだと、終着の和歌山まで五つある。時間にして、十七分だ。乗務員室へ押しかけて行って、車掌を殴りつける時間は、十分にあったということだよ」
「これで、安藤弁護士殺しについて、畑山のアリバイは、崩れましたね」
亀井は、嬉しそうに、いった。
だが、十津川は、あくまでも、慎重だった。
「今日、私が実験した方法を使えば、畑山に、安藤を殺せたことは、わかったがね。しかし、それは、

そのまま、畑山が、和歌山のホテルで、安藤を殺したことの証明にはならないんだ。畑山は、王寺から乗った和歌山線の列車を、途中でおりたかも知れないが、おりなかったかも知れない」

「そんな筈は、ありませんよ。畑山は、途中でおりて、関西本線、阪和線を使って、和歌山で、安藤を殺したに、決まっています」

亀井は、息まいた。

十津川は、苦笑して、

「私だって、畑山が、安藤弁護士を殺したと確信しているさ。他に、犯人は、いないよ。だが、それは、証明されていないんだ。畑山が、和歌山のホテルで、安藤弁護士を殺すところを目撃した人間はいないし、彼が、関西本線、阪和線を乗りついで、和歌山に来たことを、証明してくれる人間を見つけるのは、大変なことだと思うよ。こちらは、車内が、がらがらのローカル線と違うからね」

「それでは、和歌山県警に、目撃者捜しを、やって貰いますか？」

「やってくれると思うよ。あの春木という警部は、一見すると、鈍重な感じだが、仕事は、きちんとやる人のようだからね」

「すると、警部が、折角、今日、実験までしたのに、結局は、犯人逮捕の決め手にはならなかったわけですか」

亀井は、口惜しそうに、いった。

十津川は、手を振った。

「そんなことはないさ。まず、第一に、これで、畑山が犯人だという確信を得たよ。今までも、畑山以外に、この一連の事件の犯人はいないとは思っていたが、最初の事件のアリバイが、引っかかっていたんだ。もし、畑山がシロだったらという不安が、頭の隅にあった。しかし、今日、実験してみて、畑山が犯人だという確信が持てた。これは、大きいよ。第二は、和歌山県警が、証拠をつかむ手助けになる。この推理に従って、証拠や、証人を、探せばい

いんだからね」
そのあと、十津川は、和歌山県警の春木警部に、電話をかけ、今日の実験の結果を、説明した。
電話がすむと、十津川は、亀井を見て、
「次は、カメさんが関心があるという伊勢線の河芸駅へ行ってみようじゃないか」
と、いった。

第五章　殺しへのバイパス

1

十津川は、日常生活では、どちらかといえば、呑気な方で、妻の直子に、注意されたりするのだが、仕事の面では、徹底する方である。
今度も、亀井に、
「明日は、伊勢線に乗るつもりでいるんだが、殺された西田と同じルートで、行きたいんだよ」
と、いった。
「西田は、津駅前のタクシーに、十一時三十分頃に乗っていますから、どうしても、『南紀2号』に、乗るよりありません」

「じゃあ、それに、乗ろうじゃないか」
「しかし、新宮発が、朝の六時四六分ですよ」
「わかっているさ。今日中に、新宮へ行っていなければならないだろうね」
二人は、ホテルに事情を話し、半日分の料金を払って、チェック・アウトした。
和歌山発、新宮行のL特急「くろしお28号」に乗った。
新宮行の最終の特急列車である。このあと、「くろしお30号」「32号」と、二本あるが、どちらも、途中の白浜止まりだった。
十津川たちの乗った「くろしお28号」は、一応、新宮行だが、串本から先は、各駅停車になる。
そのせいで、終着の新宮に着いたのは、二二時三一分である。
ホテルや旅館の部屋がとれなかったら、県警に連絡して、新宮署に泊めて貰おうと思っていたのだが、幸い、駅の近くの旅館に、泊ることが、出来た。
翌朝、早目に朝食を出して貰って、すませると、十津川と、亀井は、新宮駅から、「南紀2号」に、乗り込んだ。
紀勢本線の西海岸は、電化されているので、そこを走る特急「くろしお」は、電車だが、こちらの東海岸は、非電化区間なので、気動車である。
80系と呼ばれる特急用気動車の五両編成である。たった五両の短かい編成なのに、一両だけグリーン車が連結されているのは、この「南紀」が、観光列車のせいだろう。
カーブが多いので、スピードは出ないが、窓の外に展開する南紀の海は、素晴らしい。
尾鷲を過ぎると、その海が、見えなくなって、列車は、深い山間を走る。
列車が、喘ぐように思えるのは、80系の特急用気動車が、昭和三十六年に作られて、すでに、二十四年も、走り続けているからだろう。何か、けなげと

いう感じがしないでもない。
津で、十津川と、亀井は、「南紀2号」を降りた。
九時三六分、定刻である。
東出口に向って、跨線橋を歩いて行った。西田は、津駅の東口のタクシー乗り場で、タクシーを拾ったことになっていたからだった。
東出口に近い1番線が、伊勢線である。
西田が、伊勢線に乗って、河芸駅に行ったのなら、ここで、待つのだが、彼は、タクシーで、行っている。
十津川と、亀井は、いったん、駅の外に出ることにした。
津駅は、西口に比べて、東口の方が、賑やかである。
白い三階建の津駅の前は、バスと、タクシーに、分れた乗り場があり、子供を抱いた女性の像が、建っていた。
タクシーは、あまり台数がないのではないかと、思っていたのだが、実際に来てみると、何十台と並んで、客待ちをしている。これなら、タクシーを拾うのは、楽だろう。
駅前のタクシー乗り場の近くは、自転車やバイクが、所せましと並べてある。津駅から通勤や、通学している人たちが、乗って来たものだろうが、この津駅でも、通行の邪魔になっているようだった。
「どうされますか？　すぐ、河芸駅へ行ってみますか？　それとも、十一時半まで待って、タクシーに乗りますか？」
と、亀井が、きいた。
「西田と、同じにしたいね」
「となると、あと、二時間近くありますよ」
「バス乗り場の先に、警察があるから、あそこで、事件のことを、聞いてみよう」
十津川がいい、二人は、バス乗り場の方に歩いて行った。
白塗りの二階建の小さな建物に「津駅前警察官派

出所」と、書いてある。
中年の警官が、一人いた。
十津川と、亀井は、中に入り、名刺を渡してから、河芸駅で死んだ西田のことを、聞いてみた。

2

「くわしいことは、県警本部の方に行って頂かないと、わかりませんが」
と、警官は、緊張した声で、いった。
「河芸駅へ行ったことは？」
十津川が、きいた。
「あります。あの近くの人間ですから」
「西田という男が、その河芸駅で殺された。西田は、東京の人間だ」
「はい。そう聞いております」
「犯人も、多分、東京の人間だと思うんだがね。なぜ、犯人は、河芸駅のホームで殺したのか、土地っ子の君の意見を聞きたい」
十津川が、いうと、警官は、「私のですか？」と、びっくりした顔になった。
「私には、何ともいえませんが」
「この近くで、人を殺すとしたら、君なら、どこでやるね？　河芸駅のホームで、やるかね？」
「人殺しですか」
と、警官は、しばらく考えていたが、
「なにも、河芸駅へ行かなくても、他に、適当な場所は、いくらでもあると思います」
「例えば？」
「ホテルの部屋の中でもいいでしょうし、タクシーで、少し行けば、この近くには、まだ、人の気配のない林だとか、神社だとかが、あります。そこへ連れて行って、殺しますね」
「なるほどね」
「平凡な考えで申しわけありません」
中年の警官は、本当に、申しわけないという顔を

した。

十津川は、微笑して、

「それで、いいんだよ。誰だって、君のように考える。私が、犯人だって、同じだろう。ところが、この事件の犯人は、わざわざ、河芸駅で、殺している。その理由を、知りたいんだがね」

実際に、河芸駅へ行けば、わかるのかどうか、十津川にも、自信はなかった。

二人は、派出所を出ると、道路を渡り、商店街の中にある喫茶店に入った。

コーヒーを頼んでから、十津川は、改めて、時刻表を取り出して、広げてみた。

紀勢本線のページに、「伊勢線」が、小さく、遠慮がちに、のっている。

L特急「南紀」は、全て、この伊勢線を使用しているが、全ての駅が、通過マークになっている。折角、作った線なのだが、特急は、ただ、通過するだけなのだ。

「可哀そうな線ですね」

と、亀井が、いった。

「その線を、なぜ、犯人が、利用したのかな。そこが、わからないね」

「ほとんど、乗降客がないからでしょう。それに、無人駅だし――」

「まあ、常識的には、そう思うんだがね。ただ、それだけなんだろうか？」

「他に、何かありますか？」

「ある筈だと、私は、思っている。人のいない静かな所ならば、さっきの警官が、いったように、雑木林の中でもいいし、神社の境内でも、いいわけだよ」

「それは、そうですね」

十一時半になるのを待ってから、十津川と亀井は、駅前のタクシー乗り場に行き、タクシーに、乗った。

十津川が、河芸駅というと、タクシーは、すぐ、

走り出した。
国道23号線を、四日市の方向に走る。
津の町を離れたが、国道沿いに、新築の家が、多く建っている。
マンションもある。そうした新築の家が、田んぼの間に、少しずつ、かたまって建っているのだ。
次の東一身田駅の辺りまで、新築の家や、マンションが多いのは、津市のベッドタウン化しているのかも知れない。
国道23号線の左側を、伊勢線の高架が、伸びているのが見える。
乗降客も少いし、一日の列車本数も少く、明らかに、赤字ローカル線なのだが、線路や、駅を見ていると、普通のローカル線とは、ずいぶん違っている。
普通、赤字ローカル線というと、線路にも、雑草が生えていて、無人駅は、屋根が傾いていたりするものだが、この伊勢線は、鉄筋コンクリートの高架線で、東一身田駅も、コンクリート造りの立派なものである。
これだけ見ても将来、利用客が、どんどん増えていくものと思って、造られたのが、よくわかる。その思惑が、外れたのだろう。
二十分ほどで、河芸駅に着いた。
国道23号線を左に曲がり、いったん、伊勢線を渡って、駅前ロータリーに着く。
河芸駅の周辺は、ほとんど、田んぼで、稲が、風にそよいでいた。
それでも、駅前の広場は、造成中で、「河芸駅前団地造成工事」の看板が、掲げられている。
しかし、その造成地の裏側は、うっそうとした竹林で、ここを買って、家を建てる人がいるのだろうか、という気がした。
駅前のロータリーには、人影はなく、トラックが二台、ここを駐車場代りにして、停っていた。
「待っていましょうか？」

と、運転手が、いったが、十津川は、タクシーに、帰って貰った。

眼の前に、鉄筋コンクリートの河芸駅があった。人の姿はない。無人駅だし、次の列車は、一三時二一分にならなければ、来ないのだから、当然だろう。

鉄筋コンクリート造りなのだが、まるで、鉄骨だけで出来ているように見える。鳥のガラみたいな駅だなと、十津川は、思った。

駅前に、ぽつんと、公衆電話ボックスがある。

それを見ながら、二人は、階段をのぼって、ホームにあがった。階段といっても、せいぜい七、八段の低いものである。

ホームは、かなり長かった。

乗客が増えたら、伊勢線に、五、六両連結した列車を、走らせるために、ホームを、長くしたのだろう。しかし、今は、たった二両だけの列車が走っている。

片側だけのホームで、単線の線路が、延びている。

階段をあがってすぐのところに、ベンチが一つだけ、置かれていた。

確か、西田は、このベンチに、腰を下すような恰好で、死んでいたのである。

ベンチのあるところは、むき出しだが、一応、待合室の感じで、背後には、壁があるから、ここで、殺しても、駅前からは、見えないだろう。

線路の向うには、田んぼが、広がっている。田んぼの更に、向うには、十津川たちが、タクシーで走って来た国道23号線があり、家も点在しているのだが、そこから、駅の方を見ていたとしても、ベンチに腰を下している西田が、死んでいるなどとは、絶対に、わからなかったろう。

二人は、長いコンクリートのホームを、ゆっくり歩きながら、周囲を見廻した。

「暑いですね」

亀井は、ハンカチで、額の汗を拭いた。
強い太陽が、コンクリートのホームに反射して暑い。
遠くには、工場や、学校といった大きな建物もあるのだが、そこからでは、双眼鏡でも使わなければ、このホームで起きたことは、わからないだろう。
十津川は、立ち止まって、「通過列車にご注意ください」と書かれた頭上の掲示板を見つめた。特急「南紀」が、通過するからだろう。
ホームの端まで歩いて行った亀井が、汗を拭きながら、戻って来て、
「端にも、階段がついていて、ホームから、出られるようになっています」
と、報告した。
二人は、ベンチに腰を下した。
ベンチの傍には、大きな屑籠が置いてあるが、掃除に来ないのか、紙屑で一杯だった。
「静かですね」
と、亀井が、いう。
人の声も、聞こえて来ない。時間が、たっても、乗客の姿は、見えなかった。
国道23号線には、バスが走っているから、この辺りの人たちは、一日に、上り下り、七本ずつしか来ない伊勢線は使わず、バスや、自家用車を利用して、津や、四日市に、行くのだろう。
「眠くなって来ますね」
亀井が、あくびをした。
列車は、来る気配がない。
伊勢線が、上り下り、一日に、七本ずつといっても、朝と夕方に、六本で、昼間は、午後一時台に、上り下り一本ずつしか、走らないのだから、当然だった。
「ここなら、邪魔されずに、殺せますね」
と、亀井が、いった。
「それは、わかったが、それだけじゃあ、犯人が、

ここを殺人場所に選んだ理由は、わからないよ。もっと、静かで、人の気配のない場所は、あるからね」

3

やっと、列車の音がした。

津の方向から、黄色っぽい車体に、赤い線の入ったL特急「南紀」が、近づいて来るのが見えた。

「南紀4号」である。

五両編成の「南紀4号」は、十津川たちの眼の前を、通過して行った。

「畑山は、今の列車に乗って、名古屋へ行ったことになっていましたね」

亀井が、いった。

「そうなんだ」

「つまり、畑山が、この列車に乗って、この河芸駅を通過したときには、西田は、このベンチに、死体で、座っていたわけですね」

「だから、畑山には、アリバイがあることになるんだ」

「畑山は、ここを通過する『南紀4号』の車中から、ホームにいる西田を刺したんじゃないでしょうか？」

「え？」

「畑山は、ここに、西田を呼びつけておきます。電話でです。西田は、ホームで、いらいらしながら、畑山が来るのを待っています。そこに、『南紀4号』が近づいて来る。通過列車だから、西田は、白線の内側にさがっている。その時、畑山は、『南紀4号』の窓を開け、ホームに立っている西田めがけて、ナイフを投げたんじゃないでしょうか。思い切って投げれば、刺さるんじゃありませんか？　もし、こうして殺したのなら、畑山のアリバイは、成立です」

「うーん」

「駄目ですか？」

「特急列車の窓は開かないんだよ、カメさん。それに、もし、開いたとしても、西田は、背中を刺されている。窓からナイフを投げて、果して、背中に命中するだろうか。もう一つ、凶器は、見つかっていないんだ。だから、ナイフを投げて、殺したんじゃないんだ」

「そうですね」

亀井も、肩をすくめた。

犯人は、間違いなく、この河芸駅に来て、ここで、西田を刺し、凶器のナイフを、持ち去ったのである。

「一時過ぎに、四日市行の列車が来る。それに乗って、帰ろうじゃないか」

と、十津川は、いった。

ベンチの傍の壁にかかっている伊勢線の発車時刻表に眼をやった。

次に、この河芸駅に停まるのは、四日市行の、一三時二一分の列車である。

やがて、赤い、気動車が、遠くに見えた。

キハ40と呼ばれる気動車である。二両編成で、ごとごとと、走ってくる。

「津―四日市」の表示が正面に出ていた。

十津川と、亀井は、乗り込んだ。

車内は、がらんとしていた。五、六人の乗客しか、乗っていなかった。

中央部に、向い合う形のボックス席があり、ドアの近くには、ベンチ式のシートがある。

十津川と、亀井は、ボックス席に、向い合って腰を下し、窓を開けた。

冷房がないので、外の風を入れるより仕方がない。

走り出すと、風が入って来た。

車掌が来たので、亀井が、四日市までの切符を買った。

小さなトンネルを抜けると、次の中瀬古（なかせこ）に着いた。

同じような感じの無人駅である。
誰も降りないし、誰も、乗って来なかった。それでも、駅の近くには、大きな造成地が出来ていた。稲生、玉垣、と過ぎて、鈴鹿に近づくと、鈴鹿サーキットのある所らしく、車のスクラップ工場が、一つ、二つと、眼に入って来た。廃棄処分された車が、山のように、積みあげられている。
大きな川を渡った。
だんだん、街に近づいてくる感じだった。
南四日市を過ぎて、窓の外に、巨大なコンビナート群が見えてくると、もう、終着の四日市である。
四日市駅に着いた。
長い島式のホームがあって、その両側が、関西本線の上り、下りの列車が着くようになっている。1番線と、2番線である。
その同じホームの先っちょに、まるで、間借りしているみたいな感じで、伊勢線の発着する3番線が設けられている。
十津川たちの乗って来た二両編成の気動車は、その3番線に着いた。
列車を降りると、自然に、ホームの端に降りる恰好になる。
「まっすぐ、帰京しますか？」
ホームを歩きながら、亀井が、きいた。
「関西本線で、名古屋まで行き、名古屋から、新幹線に、乗ることにしようじゃないか」
と、十津川が、いった。
関西本線の各駅停車で、名古屋まで出た。
名古屋着が、一四時五三分だった。すぐ、新幹線に乗りかえて、東京に向った。
「ひかり24号」の座席に腰をすえると、十津川は、じっと、考え込んだ。
伊勢線の河芸駅を、じっくりと見てきた。
あの駅のホームが、ひっそりと、静まり返っていることは、わかった。特に、昼の十二時頃に着くと、午後一時すぎまで、あの河芸に停車する列車は

ないのだ。
あのホームでなら、人に知られずに、西田を殺せたろう。
だが、十津川には、犯人、つまり畑山が、それだけで、あの駅を、殺人現場として選んだとは、思えなかった。
他に、何か理由がなければならないと、思う。
（いったい、それは、何なのだろうか？）
考えに詰って、十津川は、煙草をくわえた。
亀井は、遠慮して、声をかけて来ない。
「カメさん」
と、十津川の方から、声をかけて、
「畑山は、新宮から、『南紀4号』に乗って、名古屋へ行った。これが、彼のアリバイだったね」
「そうです。畑山が、この列車に乗っている限り、西田は、殺せないんです」
「その接点が、あの河芸駅というわけか」
「西田が、拳銃で射たれて、あの駅で死んでいたというのなら、ばっちりなんですがねえ」
亀井が、口惜しそうに、いった。
「河芸駅を、通過するとき、射つのかね？」
「そうです。客車の窓は開かなくても、乗務員室の窓は開きます。これは、聞いた話ですが、合理化で、特急『南紀』には、前には、車掌が二人乗っていたのが、今は、一人乗務になっているというのです。とすると、車掌のいない乗務員室があることになります。もちろん、カギは、かかっているでしょうが、あけて、中に入り、そこから、河芸駅のホームにいる西田を狙撃することは、出来ますからね」
「そうだな。射的のような気持で、射てるかも知れないね」
「しかし、実際には、ナイフで、刺されているんですね」
「後頭部を殴られてもいる。犯人は、背後から、いきなり、西田の後頭部を殴り、抵抗力を奪っておいてから、背中をナイフで刺して、殺している」

「西田は、運動選手らしく、逞しい身体をしていますからね。まともにいっては、危いので、いきなり殴ったんでしょう。それにしても、なぜ、河芸駅だったのか、わかりませんね」
「伊勢線は、四日市から津までだ。列車の表示板に、そうあった」
「そうですね」
「もし、伊勢線の駅の一つで、西田を殺さなければならなかったとしたら、どうだろう？」
「伊勢線の駅でですか」
亀井は、考え込んだ。
十津川は、手帳を取り出した。そこには、伊勢線の駅名が、書いてある。
「四日市と、津は、大きな駅で、ホームには、乗客が多くいるし、列車の発着も多いから、ホームで、殺人というわけにはいかないだろうね」
と、十津川は、思い出しながら、いった。
「そうなると、南四日市も、難しいと思いますよ。無人駅じゃないし、関西本線も、走っていますからね」
亀井が、いった。
「河原田も、同じだな。この駅も、関西本線が、走っている」
「とすると、残りは、六駅になります。全部、無人駅ですね」
「一つ、一つ見ていこう。四日市側から見ていくと、まず、鈴鹿だ。近くに、鈴鹿サーキットがあるせいか、立派な、大きな駅だったね。ひっそりとしていたが」
「大きなスクラップ工場や、四階建のアパートが、十棟ぐらい建っていました。乗降客も、伊勢線の中では、多いんでした」
「次の玉垣は、どうだ？」
「この駅は、伊勢線の中で、唯一の島式ホームだから、この駅でだけ、単線の伊勢線の列車が、すれ違えます。現に、われわれの乗った列車も、この玉垣

で、下り列車と、すれ違いましたよ」
「そうだったね」
「しかし、乗降客が多いとは、思えませんし、周囲に住宅も、ありませんでした」
「だが、島式ホームだから、両側から、見られてしまうということがある。それに、ホームに、待合室がなかったろう。ベンチはあったがね。だから、ホームでは、隠れるところがないんだ」
「では、玉垣駅では、ホームでの殺人は無理ですね」
「残る四つの駅は、だいたい、条件は、同じだね。稲生、中瀬古、河芸、東一身田の四つの駅の中で、カメさんが、人殺しをするとしたら、どの駅を選ぶね？」
「そうですねえ」
亀井は、見てきた駅の様子を、思い出してみた。
「東一身田は、やめますね。津に近くて、駅周辺に、家が、かなり建っていましたから、見られる危険が、四つの駅の中では、一番、あります」
「うむ」
「あと三つの駅は、条件は、ほとんど同じだと思います。駅の造りも、似たようなものだからです。しかし、私が犯人なら、やはり、河芸駅にしますね」
「別に、実際の犯行に合せなくてもいいよ」
十津川がいうと、亀井は、首を横に振って、
「そうじゃありません。理由があるんです」
「一日の乗降客の数が、一番少いことかね？」
「それもありますが、私は、逃げる時のことを考えたんです」
「逃げる時のことをね」
「ホームで、西田を殺したあと、犯人は、もちろん、逃げた。方法は、二つです。伊勢線の列車に乗るか、車を使うかです。私が、犯人なら、車で逃げますね。死体と一緒に、列車が来るのを待つというのは、嫌ですからね。車で逃げるとすると、国道23号線を走ります。国道23号線は、伊勢線に沿って

走っていますが、河芸駅が、一番、国道23号線に近いんですよ。ですから、私が犯人でも、河芸駅のホームにしますね」
「そうか。犯人が、伊勢線の駅で、殺人をやらなければならないとすると、やはり、河芸駅を選ぶ可能性が強いということになるか」
「そうです。河芸駅が、一番、殺し易いし、逃げ易いですよ」
「問題は、前提の方だね。犯人は、なぜ、伊勢線の駅を使わなければならなかったのか、それが、わかればね。その前提がわかれば、いいのだが」
「西田は、津で、タクシーを拾った時、河芸という駅名をいわず、ここから二つ目の駅へ行ってくれといったそうですね」
「三重県警の捜査では、そうなっている」
「すると、西田は、河芸という駅名を知らなかったということになりますか？」
「いや、そう断定は、出来ないよ。西田は、知っていたが、度忘れしたのかも知れない。それで、二つ目の駅といういい方をしたんじゃないかね」
「それでは、度忘れということにしましょう。しかし、西田が、伊勢線が好きで、彼の方から、河芸のホームで会おうと、犯人にいったとは、思えません」
「その点は、同感だ」
「つまり、河芸で会うというのは、犯人が、西田に、提案したことになります」
「まあ、そうだね」
「犯人、つまり、畑山は、伊勢線のことを、よく知っていたと思います。ひょっとすると、ローカル線マニアで、何度も、伊勢線に乗っていたということも、考えられます」
「だから、河芸駅に、西田を呼び出して、殺したか」
「そうです」
「しかし、それでも、完全な答にはなっていないね

え」
「駄目ですか」
「駅のホームでの殺人というのは、あまり多くはない。あっても、混雑にまぎれて、いきなり殺すか、或いは、ホームで、ケンカをして、カッとして刺すというものばかりだった。小さな駅に呼び出しておいて、刺し殺すというのは、私は、初めてだよ。なぜ、犯人、つまり、畑山が、そうしたのか、わからないね。ローカル線マニアで、伊勢線が好きだったというだけで、河芸駅ホームでの殺人は、やらんだろう」
「そうですねえ。それだけじゃあ、やらんでしょうね」
「犯人には、伊勢線の河芸駅でなければならない理由があったんだと思う。だから、河芸に、西田を呼び出して、殺したんだ。その理由を見つけられたらねえ」
「アリバイ作りのためじゃないですか？」
「考えられるとすれば、それしかないと、私も、思っているんだがね。どうアリバイに関係してくるんだろう？」
「われわれが、河芸駅のホームにいた時、特急『南紀4号』が、通過して行きました」
「そうだ」
「畑山は、あの列車に乗っていたことになっています。つまり、畑山が、『南紀4号』に乗っている限り、河芸で、西田を、殺せません。『南紀』は、河芸駅を、通過するだけで、停車しませんから」
「そういう形のアリバイだったね」
「くわしく、検討してみますか？」
「まだ、東京まで、一時間以上あるから、考えてみよう」
「西田は、津駅から、十一時半に、タクシーに乗りました。運転手に向って、二つ目の駅にやってくれと頼みました。河芸駅には、二十分くらいで、着いたと思います。われわれも、今日、二十分で、河芸

に、着きましたから」
「西田を、津駅前から乗せたタクシーの運転手も、十一時五十分頃、河芸に着いたと、いっているよ」
「西田の死亡推定時刻は、何時でしたか？」
「三重大学で解剖した結果、十二時から、午後一時までの間と、わかっている」
「死体が見つかったのは、伊勢線の最終列車の車掌が、おかしいと思って、声をかけて、はじめて、わかったんでしたね。それまでは、ベンチに腰を下した恰好で死んでいたので、西田が死んでいるとは、気付かなかったということでしたね」
「だから、『南紀4号』が、通過した時、西田の死体は、まだ、河芸駅のベンチにあったわけだよ」
「つまり、それが、畑山のアリバイというわけですか？」
「それに、四日市と、津の両方で、調べても、畑山が、タクシーに乗った形跡がなかったと、三重県警は、いっている。それから、伊勢線にもだよ。伊勢線は、たった二両編成だし、その二両に、車掌が一人いるんだから、畑山が乗っていれば、気がつくだろう。だが、畑山が、乗ったという報告はないんだ。これで、畑山のアリバイは、成立してしまった」
「彼が、『南紀4号』に乗って、名古屋まで行ったことは間違いないと思いますね。静岡の彼の友人が、証言していましたね」
「そうだ。静岡に、畑山の友人の林勇一郎がいて、七月五日の夕食を、一緒にしている。午後六時に、会ってるんだ。静岡で、午後六時に会うためには、『南紀4号』に乗っていなければ、不可能なんだ。次の『南紀6号』では、名古屋着が、一七時三二分で、三十分では、『こだま』で、静岡まで行けないからね。このことは、カメさんと、話し合ったろう？」
「そうでしたね」
「だから、畑山には、アリバイが成立してしまう」

「しかし、彼のアリバイは、完璧じゃありません。第一に、新宮の旅館を、七月五日に出た時間が、おかしいです。彼は、『南紀4号』に乗ったといっているのに、旅館を、朝の六時三十分に出ていますからね。合同捜査会議でも、三重県警の佐藤警部が、問題としていましたが」
「覚えているよ。六時三十分に、新宮の旅館を出ていれば、『南紀4号』ではなくて、一つ前の『南紀2号』に、乗れた筈なんだ」
「つまり、殺された西田と、同じ列車と、いうことですね」
「そこに、何か、からくりがありそうだと、佐藤さんは、いっていたんだがねえ」
「もし、畑山が、『南紀2号』に乗っていたとすると、どうなりますか？」
「西田と同じように、津でおりて、河芸駅へ行ったことになる。そして、河芸駅で西田を殺し、また、津へ引き返し、何くわぬ顔で、『南紀4号』に乗って、名古屋に向ったことになるね」
「もし、そうだとすると、畑山は、『南紀4号』の窓から、自分の殺して来た西田の死体を見たことになりますね。列車が、河芸の駅を通過する時に」
「そうなるね」
「河芸で、西田が殺されたのが、十二時から一時の間でしたね。一方、『南紀4号』は津駅を、一二時二九分に出ます。十二時に殺していれば、間に合いますね。河芸と津の間は、車で二十分ですから」
「私もね、畑山は、河芸で、西田を殺してから、津へ戻って、『南紀4号』に、乗ったと思っているよ。それが、一番、納得できる説明だからね」
と、十津川は、いってから、
「だが、疑問が、いくつか、生れてくる」
と、難しい顔で、つけ加えた。
「畑山が、タクシーに乗った形跡が、ないことですか？」
「それもある。河芸で、西田を殺してから、歩い

て、津へ戻ったのでは、とうてい、『南紀4号』に、乗れないからね。河芸と津の間は、約六キロだ。十二時ぎりぎりに殺して、六キロの道を、二十九分では、歩いて戻れないよ。だが、私が、疑問といっているのは、他のことなんだ」



「河芸へ行った時間のことですね。『南紀2号』で、来たのなら、なぜ、こんな遅く、河芸に行ったのかという疑問が、残りますね。西田は、二時間も、津で、時間を潰してから、タクシーで、河芸に向っています。当然、畑山も、『南紀2号』で来たのなら、津には、九時三六分に、着いている筈です。それなのに、河芸で、西田を殺したのは、十二時から一時の間ですからね。二時間半以上、たっているんです。その理由が、わかりませんね」

「もう一つ、疑問があるよ」

十津川が、いった。

亀井は、わからないという顔で、

「何ですか？」

「西田が、なぜ、河芸へ行ったかだよ。彼は、犯人の畑山に、呼び出されたとしか思えない。だが、この時点で、すでに、安藤弁護士が、和歌山で殺され、真田が、串本で、殺されていた。真田のことは、まだ知らなかったとしても、安藤が殺されたこ

とは、もう、知っていた筈だよ。西田は、安藤や、真田、それに、佐伯と組んで、畑山の両親を欺し、自殺に追いやったんだから、安藤が殺されたと知った時、犯人は、畑山と、想像がついたと思うのだよ。それなのに、西田は、なぜ、畑山に呼び出されて、のこのこ、河芸駅へ行ったのかという理由が、わからない」

「畑山が、別人の名前で、呼び出したんじゃありませんか。例えば、西田の仲間の佐伯の名前を使うとか」

「それは、ないと思うね。西田は、仲間に会うのなら、無人駅の河芸なんかでは、会わないだろう。食事をしながら、会ったっていいんだし、東京へ戻ってからでもいいわけだからね」

4

根本的な疑問まで、出て来てしまった。

西田は、なぜ、畑山に呼び出されて、のこのこ、河芸駅へ出かけて行ったのだろうか。

畑山の方も、なぜ、河芸駅でという疑問がわいてくる。

河芸に、特急「南紀」が、停車するというのなら、まだ、わかると、十津川は、思う。

だが、「南紀」は、停車しないのだ。河芸だけでなく、伊勢線の駅には、津と、四日市をのぞいて、停車しない。

いわば、「南紀」は、早く走るためのバイパスとして、伊勢線を走っているだけなのだ。

それなのに、畑山は、なぜ、河芸駅で、西田を殺したのだろうか？

「どうどうめぐりだね」

十津川は、自嘲的な調子でいい、やれやれという顔で、新しい煙草に、火をつけた。

亀井も、首を振ってから、

「私は、和歌山線のトリックの方が、解明が難しい

と、思っていたんですがねえ。逆でしたね」
「和歌山線の方は、きちんとし過ぎていたから、一つのカギさえ見つかれば、全部が、解けてしまうんだ。ところが、伊勢線の方は、何から何まで、奇妙なんだ。和歌山では、ホテルで殺している。これは、別におかしくはない。串本でも同じだ。海中展望塔で、真田が、海中の景色に見とれているのを、背後から刺殺したのも、不思議はない。相手の油断を見すまして殺すのは、普通に、やる方法だからね。だが、西田の場合だけは、不自然だよ。同じ『南紀2号』に乗っていたようだから、普通なら、車内で殺して、自分は、列車を降りて、逃げるだろう。ところが、わざわざ、無人駅へ呼び出して、殺している。その理由が、わからない限り、こっちの鍵は解けそうもないね」
「西田だけは、別の人間が殺したとは、考えられませんか？」
「誰がだい？」
「例えば、仲間の佐伯です。安藤と、真田が殺されたので、西田が、ぶるッてしまった。このままでは、畑山の両親を自殺させたことを、何もかも喋りそうだというので、佐伯が、先手を打って、殺したというのは、どうでしょうか？　仲間の佐伯が、呼び出せば、西田は、河芸駅にだって、来るんじゃありませんか？」
「犯人が、佐伯だとしてだが、なぜ、河芸駅だったのだろう？」
「それは、西田と、畑山が、新宮にいるのを知っていたからだと思いますね。二人とも、『南紀』に乗って、帰って来ることは、わかっています。伊勢線は、その『南紀』が通ります。従って、伊勢線の駅で、西田が殺されていれば、自然に、畑山に疑惑が集中する。それを読んで、犯行に及んだんじゃないでしょうか？」
亀井は、真顔で、いったが、十津川は、笑って、
「カメさんだって、畑山以外に、犯人がいるとは、

思っていないんだろう？」
「そうなんですが、壁にぶつかってしまったものですから」
と、亀井は、頭をかいた。
二人とも、疲れた顔で、黙ってしまった。
十津川は、窓の外に、ぼんやりと、眼をやった。
少しずつ、東京が近づいて来る。
（何か、見落していることがあるのかも知れないんだが）
それがわかれば、犯人が、伊勢線を使った理由も、わかるだろう。
十津川は、犯人が、畑山だと信じている。彼以外に、犯人がいるとは、思っていなかった。
十津川は、爽やかな畑山の笑顔を思い出していた。好感の持てる青年だが、だからといって、十津川は、甘く見ることはない。畑山が、犯人なのだ。ただ、一つ一つの事件について、各県警と協力して、畑山の犯行であることを、証明しなければならないのだが。
車内に、軽いチャイムが流れ、あと、五分で、東京駅に着くことを知らされた。
「佐伯は、大丈夫ですかね？」
と、亀井が、ふいに、いった。

5

改札口を出ると、十津川は、構内の電話で、捜査本部に、電話をかけた。
日下が、出た。
「佐伯の様子は、どうだ？」
と、十津川は、きいた。
「別に、動きはありません。畑山が、佐伯を狙って、動く気配も、今のところ、ありません」
「例の二人は、どうしている？　塚本と青木の二人だ」
「心配なのは、佐伯より、この二人の方です」

「どこが心配なんだ？　何か妙な動きをしているのか？」
「佐伯は、自分を狙っているのが、畑山だと知っています。それで、大金を貰っている塚本と青木が、逆に、畑山を狙う心配があります。畑山は、今、休暇をとり終って、三鷹の研究開発部へ戻って、仕事をしていますが、塚本がこの近くを歩いているのを見たという人がいるんです」
「警察に委せずに、自分たちで、畑山を始末してしまおうというわけか」
「そのくらいのことは、考えていると思いますね。佐伯は、畑山を殺して、自分の身が安泰になるのを望んでいると思いますし、畑山を、ひそかに消してくれれば、莫大な成功報酬を約束しているかも知れませんから」
「畑山の方の動きは？」
「まじめに、会社へ出ています。今までのところ、畑山は、自分の仕事を一生懸命にやっていますね」
「畑山には、誰かついているのか？」
「西本刑事が、私と交代で、監視しています」
「佐伯の方は？」
「こちらは、清水刑事と、三沢刑事が、監視していますが、例の二人がついているので、あまり近づけません」
「監視は、そのまま、続けてくれ」
十津川は、こういって、電話を切ると、亀井と、捜査本部に、帰った。
捜査本部は、緊張していたが、同時に、一人一人の刑事は、疲れた表情をしていた。
佐伯のマンションに、ダイナマイトを放り込んだのは、畑山だろう。だが、確証はないし、次は、どんな方法で、攻撃しようとしてくるのかわからない。その時間もである。
一方、佐伯の方も、塚本と青木を使って、畑山に対して、先手を打とうとしているらしいのだが、その時期も、方法も、わからずにいる。

いらいらしているのだ。刑事たちが、疲れているのは、そのせいなのだ。

「いっそのこと、畑山や、佐伯を逮捕して、留置場に放り込んでしまえば、ゆっくり、寝られるんですがね」

と、田中刑事が、十津川に、いった。

「まだ、畑山は、逮捕できないよ。彼が、三人の男を殺したんだとは、思うが、証拠がない。証拠が見つかるまで、畑山と、佐伯を、監視しているより、仕方がないね」

「理屈では、畑山の方が、加害者ですが、私は、どうも、畑山という青年を、憎む気になれません。むしろ、被害者の佐伯の方が、小憎らしくなって来ますよ」

田中は、言葉を続けて、いった。

「どっちが悪人かっていえば、佐伯の方が、悪人だからな」

亀井が、田中に、賛成した。

「昔なら、畑山は、殿様から仇討ちを許されて、高田馬場あたりで、佐伯と、果し合いでもしているんでしょうね」

と、日下が、笑いながら、いった。

「昔の方が、合理的だったかも知れんなあ」

亀井が、冗談めかして、いう。

「犯人を捕える刑事が、そんなことをいっていいんですか？」

日下が、亀井に、軽く、絡んだ。

「時々、犯人を捕えたあとで、これでいいのかと、思うことがあるよ。殺された被害者の家族にしてみれば、自分の手で、仇を討ちたいだろうからね。殺人を犯した犯人だって、死刑の判決をうけることは、まれだからね。殺された人間の家族にしてみれば、納得できないだろうと思うよ。だから、仇討ちをさせるということも、感情的には、納得できるんだよ」

「そんな法律が出来たら、カメさんは、賛成するん

ですか？」
「おれの家族が、誰かに殺されていたら、賛成するね。多分、この手で、殺したくなるだろうからね」
亀井が、いった時、電話が、けたたましく鳴った。
日下が、受話器をつかんだ。
「畑山が、やられた！」
と、電話の向うで、西本が、叫んだ。
「死んだのか？」
「いや、それは、大丈夫だ。今、病院に運ばれた」
「どこで、やられたんだ？」
「三鷹発の中央線の電車の中でだ。中野の病院に、運ばれている」
「やったのは、誰なんだ？」
「わからん」
「わからないだって！」
思わず、日下が、怒鳴った。
十津川や、亀井の眼が、一斉に、日下を見た。
「ラッシュだったんだ。混雑にまぎれて、誰かが、畑山を刺したんだよ」
「今、どこだ？」
「病院に来ている」
「おれも行くよ」
と、日下は、いって、電話を切った。
結局、十津川も、日下と一緒に、中野の病院へ行くことにした。
国鉄中野駅から、歩いて十二、三分のところにある病院だった。
西本刑事が、十津川と、日下を迎えた。
「畑山は、手術をすませて、今は、眠っているようです」
「手術？」
十津川が、きいた。
「ナイフで、左の太ももを刺されたんです。傷口は、そう深くないので、七針ほど縫っただけで、OKになったそうです」

「相手は、殺す気はなかったのかな？」
「さあ、それは、わかりません。太ももでも、出血多量で、死ぬケースもありますからね。狙った奴が、失敗したのかも知れません」
「畑山が刺された時刻は？」
「七時十二、三分頃です」
「犯人は、塚本か、青木だろう。少し、警告してやろう」
十津川は、電話を亀井にかけ、四谷で落ち合うことにして、病院を出た。
四ツ谷駅で、亀井と、会った。
「青木の方は、三沢刑事が、監視していたんですが、新宿駅で、まかれてしまったそうです」
と、会うなり、亀井が、いった。
「向うも、プロだったんだから、まあ、仕方がないだろう」
十津川は、あっさり、いった。
二人は、佐伯の住んでいるマンションに向った。
九階へあがる。ドアをノックすると、塚本が、顔を出した。
「佐伯さんに、会いに来たのかね？」
塚本が、皮肉な眼つきをして、十津川にきいた。
「いや、君と、青木という男にだ」
「ほう。何の用だ？」
「青木は、どこにいる？」
「もちろん、中にいるよ」
「会いたいね」
十津川がいうと、塚本は、二人を、中に入れた。
青木は、青白い顔で、十津川を見つめていた。
「君に、ききたいことがある」
と、十津川は、青木を、見た。
「何ですか？」
「今まで、どこにいたんだ？」
「なぜ、そんなことを、質問されなければ、ならないんですか？」
青木は、肩をすくめた。

「畑山が、中央線の電車の中で、刺されたんだ。七時十二、三分に、中野駅でね。その頃、君は、どこにいたんだ？」
　十津川が、きくと、青木が答えるより先に、塚本が、
「彼は、ここにいたよ」
「君に、きいているんじゃない」
「しかし、私は、彼の上役みたいなものだからね」
「七時十二、三分に、彼が、ここにいたという証拠は？」
「私と、彼は、話をしていたんだ。それで、いいじゃないか」
「彼を、新宿駅で見たという人間がいるんだよ。事件の直前にだ」
「それは、人違いだよ。日本中に、よく似た人間が、三人はいるというからね」
　塚本は、にやりと笑った。
「命令したのは、誰だ？」
「何のことか、わからんね」
「畑山を殺せと、命令した奴だよ。君が、そこにいるはねっ返りに、命令したのか？　それとも、佐伯が、命令したのか？」
「人違いだと、いってるだろう。だいたい畑山って誰なんだ。そいつが犯人なのか」
　塚本は、あくまで畑山を知らない態度をくずさなかった。
「いっておくことがある」
　と、十津川は、いった。
「何だね？」
「犯人を逮捕するのは、警察の仕事だ。それを邪魔する奴は、君だろうが、佐伯だろうが、公務執行妨害で逮捕するぞ」
「私たちは、何もしないさ。ただ、警察のお手並みを拝見しているだけだよ。どうにも頼りないがね。なぜ、人殺しとわかっている奴を逮捕しないんだ？　えっ！」

「証拠はない」
「ほう。最近は、警察が、犯人の肩を持つようになったのかね？　昔なら、どんどん捕えて、吐かせたものさ。私が、君だったら、今頃は、事件を片付けてしまっているよ」
塚本は、皮肉な眼つきをして、十津川を見た。
「君が、刑事だった頃のことは知っているよ。君の強引な捜査のせいで、ずいぶん泣かされた人間もいたし、その尻ぬぐいで、みんなが苦労したそうじゃないか。私はね、そういうことだけは、やりたくないんだよ」
十津川が、いい返すと、塚本は、顔をしかめて、
「ご立派だな。だが、そんなことじゃあ、犯人は、捕まらんよ」
と、いった。
「君たちが邪魔さえしなければ、すぐ、犯人は、捕まるさ」
亀井が、怒った声で、いった。

第六章　第二の壁へ

1

畑山が運ばれた病院の医師は、全治二週間と、診断した。
十津川と、亀井は、もう一度、中野のその病院に廻ってみた。
医者に会ってきくと、畑山が、眠りからさめたので、会ってもいいという。
十津川と、亀井は、畑山の寝ている三〇二号室に、あがって行った。
三人部屋なのだが、ベッドが、一つあいているので、二人部屋になっている。

畑山のベッドの枕元には、小さな花束が、二つ置かれていた。

「会社の仲間が、事件を知って、持って来てくれたんですよ」

と、畑山は、照れたような顔で、十津川たちに、いった。

相変らず、かげりのない、青年らしい笑顔だった。

すでに、この青年は、三人の人間を殺している筈なのだが、それが、かげりになっていない。それは、両親の仇を討つという大義名分が、自分にあると思い込んでいるからだろう。

芸術家は、無実の人間の眼は、澄んでいるという。確かに、事実かも知れないが、刑事を長いことやって来た十津川には、眼が澄んでいるだけで、無実と、断定するのは危険だという気がする。

それは、この畑山のような確信犯がいるからだ。

もう一つ、悪の意識のない人間が、いる。

何年か前、そんな女を、逮捕したことがある。男を欺して、金を巻きあげ、時には、相手を殺してしまう、いってみれば、恐しい女だった。

だが、彼女には、肝心の善悪の意識が、欠落していた。だから、彼女は、遊戯でもするように、男を欺し、男を殺していたのである。

逮捕された時、彼女は、美しかった。大きな眼には、少しの曇りもなかった。今、終身刑の判決を受けて、刑務所にいるが、多分、今でも、美しく、澄んだ眼をしているのではないだろうか？

「足を刺されたそうだね」

と、十津川が、いった。

「ええ。左足です。ひどいもんです」

「君には、誰が刺したか、わかっているんだろう？」

亀井が、いうと、畑山は、

「いえ。知りません。知ってれば、僕が、自分の手で、捕えてやりますよ」

「もう諦めて、警察に、自首したらどうだね？」
「何のことですか？」
「君が、南紀で、何をしたか、わかってるんだよ。和歌山で安藤弁護士を殺し、串本では真田、そして、伊勢線の河芸では、西田を殺した。君が、やったことだ。もう三人も殺せば、十分だろう。自首したまえ」
「何のことか、わかりませんね。もし、警察が、僕が三人も殺したと思うのなら、逮捕したら、いいじゃありませんか」
畑山は、微笑して、亀井を見た。
亀井の顔が、ちょっと、ゆがんだ。畑山の言葉が、警察に対する挑戦と、受け取れたからである。
「自信満々だな」
と、亀井が、いった。
「そんなことは、ありませんよ。ただ、僕は、警察とは、ケンカはしたくないんです」
「それなら、われわれに、協力したらどうだね。君を刺した奴も、われわれが、逮捕する。その代り、君も、自首したまえ。仇討ちなんて、はやらないんだ」
「仇討ちって、何のことですか？」
「とぼけても駄目だよ。君が、三人の男を殺し、次に、佐伯を狙っている理由も、わかっているんだ。自殺した両親の仇を討つ気だろうが、そんなことは、止めるんだ」
「困ったな。何をいってるかわからないんですよ。確かに、僕の両親は、死にましたが、僕とは、無関係です」
畑山は、爽やかに、いって見せた。
何も知らない人間が聞いたら、この青年の言葉を信じてしまうだろう。
「こんなことをいうと、不謹慎かも知れないが、君が、刺されたことは、良かったと思っているんだよ」
十津川は、畑山に、いった。

畑山は、黙っていた。
「これで、君も、何日間か、ゆっくりと、自分のことを考える時間が、出来たわけだからね。私たちは、君に、自首して貰いたいんだ。君が、殺される前にね。もちろん、君を刺した奴も、捕える。どうだね？　これ以上血を見る必要は、ないだろう」
と、十津川は、言葉を続けた。
だが、畑山は、微笑しているだけだった。

2

十津川は、畑山のいる病室を、常時二名の制服警官に、ガードさせることにした。
畑山を刺したのは、警告かも知れない。しかし、殺そうとして、失敗したのなら、犯人が、もう一度、入院中の畑山を襲うことが、考えられたからである。
「畑山が退院するまでに、事件を解決したいね」
十津川は、捜査本部で、亀井や、他の刑事たちに、いった。
「そのためには、畑山が、三つの殺人事件の犯人だという証拠をつかまなければなりませんね」
と、亀井が、いう。
「和歌山で殺された安藤弁護士の事件について、畑山のアリバイトリックは、一応、わかったが、それが、即ち、畑山の犯行の証拠には、ならないんだ。あとは、和歌山県警に委せるより仕方がないが、畑山が、ホテルのトイレで、安藤を刺すのを見たという目撃者が見つかるとか、指紋のついた凶器が見つかるといったことがあれば、すぐにでも、畑山を逮捕できるんだがね」
十津川は、考えながら、いった。
今度の事件の難しさの一つに、広域犯罪だということがある。
南紀で起きた事件に対する主導権は、あくまでも、所轄の県警にある。

「串本の海中展望塔で起きた事件も、同じですね」
と、亀井が、いった。
「そうだよ。犯人は、畑山に決っているが、向うの県警の捜査では、彼が、問題の時刻に、海中展望塔にいたのを見たという目撃者は、まだ、見つかっていない。真田の背中を刺すところとなると、なおさらだ」
「もっと厄介なのは、河芸駅で殺された西田の件ですね。警部は、新しい推理が、思い浮ばれましたか？」
「いろいろ、考えているんだがね。これといった考えが、浮ばないんだ」
十津川は、肩をすくめた。
「畑山が、罪を認めて、自首してくる可能性は、ゼロなんですか？」
若い日下刑事が、きいた。
「今のところ、畑山は、最後の佐伯を殺すまでは、自首する気はないようだよ」
「彼は、両親の仇を討つ気でいるわけでしょう？」
「そうだ」
「それなら、われわれの手で、もう一度、一年半前の事件を、調べ直したらどうでしょうか？」
「それで、どうするんだ？」
「畑山の両親は、その時、サギにあって、大金を奪いとられ、自殺したわけです。畑山の怒りの中には、警察の対応の鈍さや、甘さがあると思うんです」
「それは、あるだろうね。しかし、殺人事件と違うから、われわれ、捜査一課は、サギ事件では、動けないんだ。それに、被害者が、自殺しても、だからといって、加害者が、重く罰せられることはないからね」
「佐伯を、何とかして、一年半前のサギ事件で、刑務所に放り込めませんか？」
「駄目だね。佐伯は、一年半前のサギ事件で、表面には出ていないんだ。資金を出すだけでね」

「しかし、ひょっとすると、佐伯は、何か、大きな罪を犯しているかも知れません。もしわれわれの手で、佐伯を、刑務所に放り込むことが出来れば、畑山は、納得して、自首するんじゃないでしょうか？」

「君が、やってみるかね？」

と、十津川が、きき返した。

日下は、コックリして、

「やらして下さい。私は、どうも、何でも金で解決しようとする佐伯という男が、好きになれないんです」

「いいだろう」

と、十津川は、いった。

この際、佐伯の側に、圧力をかけておくのも、悪くはないと、思った。

佐伯に、畑山を殺させはしない。もちろん、畑山に、佐伯をもである。

日下は、すぐ、一年半前のサギ事件を扱った担当刑事のところへ、話を聞きに、行った。

三重県警の佐藤警部から、電話が、掛った。

「どうも、あまりいいお知らせじゃなくて、申しわけないんですが」

と、佐藤は、まず、いった。

十津川は、佐藤の物静かな態度を、思い出しながら、

「こちらも、収穫なしで、参っているところです」

と、いった。

「西田新太郎ですが、あれから、新宮、熊野、尾鷲と、しらみ潰しに、ホテル、旅館、民宿と、調べて行ったんですが、彼が泊ったというところに、ぶつからんのです。ひょっとして、伊勢、志摩方面に、泊ったかも知れないと思い、そちらの方面のホテル、旅館にも当ってみましたが、結果は、同じでした。どこにも、西田は、泊っていないのですよ」

「そうですか」

「七月五日の午前十一時三十分に、紀勢本線の津駅

前から、タクシーに乗って、河芸駅へ行ったことだけは、間違いないんですから、紀勢本線の沿線に、一泊して、『南紀2号』に乗ったんだとは、思いますが」
「七月なら、もう、野宿は出来ますね」
「そうですね。出来ます」
「西田は、釣り支度をしていましたから、海辺で、野宿したことも、考えられませんか？」
「それも、あり得ますが、野宿だと、範囲が広くなり過ぎて、調べ切れません。南紀の海岸は、どこも景色がいいですから、野宿する場所は、いくらでもあります。海岸以外に、山の方に入って行っても、テントを張る場所は、いくらでもあります」
「和歌山県警とも、連絡されていますか？」
「ええ。向うの春木警部から、よく、連絡が来ますよ。春木さんは、大きな声なので、いつも、圧倒されています」
「そうでしょうね」
十津川は、微笑した。
春木の威勢のいい声を、思い出したからである。
「春木さんは、どんなことを、いっていますか？」
十津川が、きくと、佐藤は、
「和歌山と、三重で殺された三人が、みんな釣りの服装をしていたでしょう。その理由を知りたいと、いっていますね」
「私も、そのことに、興味を持っています」
と、十津川は、いった。
「東京で、佐伯に会われたんですか？」
「会いました」
「彼は、釣り支度のことを、知っている筈ですね」
「もちろん、知っているでしょう。しかし、何をきいても、自分は、関係ないの一点張りでしてね。警察に協力する気は、全くありませんね」
「それなら、畑山に狙われるのは、覚悟の上ということですか」
「いや、逆に、畑山を消そうと考えているかも知れ

ません」
十津川は、畑山が、刺された事件を話した。
佐藤も、びっくりしたようだった。
「呆れたものですね。もちろん、自分がやったとは、いわんのでしょう？」
「佐伯も、彼が傭ったボディガードもです」
「畑山が入院したとすると、佐伯との間は、一時休戦ですね」
「病院には、警官を置きましたから、佐伯も近づけません。その間に、今度の事件を、解決してしまいたいと、思っているんです」
「そのお役に立てなくて、申しわけありません」
「いや、役に立ちますよ」
と、十津川は、いった。
ただ、十津川にも、どう役に立つのか、わからなかったのだが。

3

電話が切れたあと、十津川は、しばらく考え込んでいた。
三重県警の佐藤警部は、和歌山県警の春木警部のように、派手ではないが、冷静に、捜査を進める男だと、十津川は、思っている。
だから、佐藤が、いくら調べても、南紀から、伊勢、志摩にかけて、ホテル、旅館、民宿に、泊っていないというのだから、西田は七月四日に、泊らなかったのだ。
十津川は、亀井を呼び、佐藤の電話のことを話した。
「カメさんの考え方を聞きたいんだがね」
と、十津川は、いった。
「私は、西田が、七月五日の『南紀2号』に乗って、紀勢本線の津駅に来て、降りたと思っていま

す。現実に、津で、タクシーを拾っているんですから、間違いないと思っているんです。ですから、新宮あたりに、前夜は、泊った筈なんですがねえ。おかしいですね。警部は、どう思われるんですか」
「二つ考えているんだ。ホテル、旅館などに泊ったのではなく、もう、夏だからね。野宿したんじゃないかという考えが一つだ」
「野宿ですか」
「もう一つは、南紀には、行かなかったのではないかということなんだよ」
「しかし、警部。それでは、理屈に合いませんよ。西田は、『南紀2号』に乗って来て、津から、タクシーに乗りかえ、河芸に向ったんじゃありませんか」
「だから、参っているんだ。しかし、西田は、プロゴルファーだった男で、ぜいたくになれている。そんな男が、野宿なんか、するだろうか？」
「三重県警が、見落したということは、考えられませんか？」
「それはないと思っている。あの警部は、地味だが、信頼できる男だよ。彼が、泊ってないといえば、西田は、南紀から、伊勢、志摩にかけてのホテル、旅館には、泊らなかったんだよ」
「参りましたね」
「私はね、西田が、南紀には、行かなかったという前提で、推理してみようかと、思ってみたんだ」
「しかし、それで、河芸での殺人が、説明できますか？」
「それが、問題でね。カメさんも、考えてみないか」
「私は、西田が、南紀のどこかで、野宿した方を、とりますがね」
と、亀井は、いった。
仕方がないので、十津川は、また、ひとりになり、机の上に、時刻表や、南紀、伊勢、志摩の地図を広げて、考え込んだ。

（もし、西田が、七月四日に、南紀に行かなかったとすると、翌、五日は、「南紀2号」には、乗らなかったことになる）

それを、前提にして、十津川は、推理を進めていった。

しかし、西田が、七月五日の午前十一時三十分に、津駅から、タクシーに乗ったことは、間違いない事実である。

「南紀2号」に、乗っていなかったとすると、西田は、どこから、津駅へやって来て、タクシーを、拾ったのだろうか？

南紀から来たのでなければ、逆の名古屋方面から来たか、或いは、津に、泊っていたかになってくる。

津に泊っていたという線はないなと、十津川は、考えた。

三重県警は、多分、津周辺のホテルや、旅館も、調べたに、違いないからである。

（すると、西田は、名古屋方面から来て、津で降り、タクシーを拾ったことになってくる）

しかし、そうだとすると、西田は、なぜ、四日市で、タクシーを拾って、河芸駅へ行かなかったのかという疑問が起きてくる。その方が、早いし、自然だからだ。

西田は、そうしなかった。

河芸を、いったん通り越して、津へ来て、タクシーを拾い、戻っている。

（なぜ、そんなことをしたのだろうか？）

十津川は、また、考え込んでしまった。どうも、上手く推理できない。

しかし、西田が、そうした行動をとったには、それだけの理由が、あった筈である。

その理由が、わかればいいのだ。

「カメさん。来てくれ」

と、十津川は、声をかけた。

「河芸の件ですか」

「そうなんだ。カメさんに、西田の立場になって貰いたい。私は、犯人の畑山の立場に立ってみる」
「いいですよ」
「改めて聞くが、西田の行動で、一番奇妙だと思うのは、カメさんから見て、どんなところだね？」
「第一は、河芸なんかへ行った理由ですね。なぜ、こんな場所へ、わざわざ、殺されに行ったのか。それが、不可解ですね」
「そうだな」
「第二は、時間の問題です。西田は、『南紀2号』で、新宮方面から来たと思われるんですが、この列車が、津へ、午前九時三六分に着きます。しかし、タクシーに乗ったのは、十一時三十分。二時間もあるのが、どうにも、不自然ですよ。なぜ、すぐ、タクシーを拾って、河芸へ行かなかったのか」
「他に、妙なところは？」
「釣り支度は、安藤や、真田もしていたから、西田だけの問題じゃありませんね」
「その二つの疑問が、同時に、解決できるような推理があれば、それが、正しいことになるんじゃないかね」
十津川がいうと、亀井は、首をかしげて、
「警部と、何回も、話し合って、うまい説明が、つかなかったんじゃないですか？」
「そうなんだよ。だが、これが解けないと、西田殺しについて、畑山は、シロになってしまうんだ。西田を殺してないとなると、他の殺しについても、問題が起きかねない」
「その心配も、ありますね」
「だから、何度でも、トライしてみようじゃないか。三重県警の捜査で、西田が、南紀方面で、ホテル、旅館、民宿に、泊った形跡がないという。それを、そのまま、受けとって、考えてみようじゃないか」
「そうなると、西田は、南紀方面からではなくて、名古屋方面から、来たことになりますが」

「そうなんだ。わかってるよ。それなら、なぜ、河芸へ行くのに、津からタクシーに乗ったかということだろう？　名古屋方面から来れば、当然、四日市から行く筈だというわけだがね」

「そこは、どう解釈されるわけですか？」

「それは、おいおい、説明していくよ。西田は、七月四日の午後五時頃、世田谷区経堂のマンションを出ている。釣りの支度をしてね。隣室の女の証言は、この二点については、信用がおけると思っている」

「同感です」

「五時に、経堂を出発したとしよう。彼は、当然、東京駅に向った筈だ。南紀へ行く方法としては、飛行機で、大阪へ飛び、大阪から和歌山へ出る方法もあるし、大阪から、更に飛行機で、白浜へ出るルートもある。しかし彼が、翌日、津で降りているところをみれば、新幹線で名古屋へ行き、ここから、紀勢本線というルートをとったと思うんだ。ここまでは、どうだね？」

「問題はないと、思います」

「さて、西田は、東京駅へ着き、新幹線に乗った。経堂から東京駅まで、多分、タクシーを使ったろう。どのくらいかかるかな？」

「道路事情によると思いますが、四十分から五十分といったところじゃありませんか」

「午後五時過ぎという時間だからね。五十分とみておこうか。うまくいけば、一八時〇〇分（午後六時）発の『ひかり257号』に乗れる。名古屋着は、二〇時〇一分だ。ところで、名古屋から南紀へ行くには、L特急『南紀』に乗るわけだが、最終の『南紀7号』の名古屋発が、一八時三七分になっている。これに乗ると、新宮に、二二時三三分に着く。終着の紀伊勝浦は、二二時五〇分だ」

「すると、西田は、その『南紀7号』に、乗れなかったわけですね？」

「そうなんだよ。西田は、名古屋から、その日の中

に、南紀へ行くことは、出来なかったんだ。もし、行ったとしたら、別のルートでということになる」
「それも、念のために検討してみますか」
亀井は、時刻表を広げた。
新幹線以上の早さとなれば、飛行機しかない。
午後五時に、経堂を出て、羽田に着くのは、六時頃だろう。
ぎりぎり考えて、午後六時（一八時）の便に乗れたとする。
「一八時ジャストのJALに乗ると、大阪には、一九時〇〇分に着きますね」
と、亀井は、いった。
「一九時〇〇分に着ければ、最終の特急『くろしお』に乗れるんじゃないかね」
「乗れますね。天王寺二〇時〇〇分発の最終の『くろしお32号』に、乗れます。しかし、この列車は、南紀白浜までですね。白浜と新宮の間は、特急でも、二時間近くかかる距離です」
「あと、東京から南紀へ行く方法としては、名古屋から、飛行機で、南紀白浜へというルートがあるが、これは、無視していいだろう。名古屋―南紀白浜間には、往復一便ずつしか出ていなくて、名古屋発は、一三時五〇分なんだ。午後五時に、東京を出たのでは、全く、乗ることは出来ない」
「すると、西田は、七月四日は、名古屋に一泊した可能性が、強くなって来ますね」
「そうなんだ。新宮から、『南紀2号』に乗って来て、津で降りたという先入主があったために、七月四日は、新宮方面に泊っていたに違いないと、思い込んでしまっていたのだが、冷静に、時間を考えると、七月四日は、名古屋に、一泊した可能性が、一番強いんだよ」
「すると、西田は、翌日、名古屋から、『南紀』の下りに乗ったということですか？」
「そうなるね」
名古屋―南紀は、L特急「南紀」が、結んでい

る。

名古屋から出ているのは、「南紀1・3・5・7号」の四本である。

名古屋発　八時三三分　南紀1号
一〇時〇三分　南紀3号
一三時五五分　南紀5号
一八時三七分　南紀7号

「このうちのどれに乗ったか、わかりますか？」

亀井が、きいた。

「わかるさ。西田が乗ったのは、一〇時〇三分発の『南紀3号』だと思うね。理由は、簡単だ。津着が、一一時〇四分だからさ。この時間なら、十一時三十分に、タクシーに乗るのに、丁度いいからだよ」

「そうですね。二十六分なら、丁度、いいかも知れませんね。列車から降りて、改札口を通り、タクシーを拾う。少し、時間が、かかり過ぎるかも知れませんが、前に考えた時の二時間よりは、ずっと納得できる時間ですよ」

と、亀井は、いってから、

「しかし、なぜ、四日市で降りなかったのかという疑問は、いぜんとして、残りますね」

4

「南紀3号」が、四日市に着くのは、一〇時三九分である。

伊勢線の河芸で会うことになっていたところに、名古屋から来れば、たいてい、四日市で、降りるだろう。その方が、自然だからだ。

しかし、西田は、津で降りて、タクシーを拾っている。

「私はね、西田が、タクシーの運転手にいったセリフに、注目したんだがね」

と、十津川が、いった。

「ここから二つ目の駅へやってくれといったんでしたね。伊勢線の」
「そうだよ。河芸駅とはいわなかったんだ」
「それは、河芸という名前を、忘れてしまったためだと、考えていたんじゃなかったですか？」
「その通り。西田は、駅名を忘れてしまったと、考えていた。しかし、河芸で会うことになっていたのなら、駅名を忘れるだろうか？　それに、忘れてしまっても、津駅の中には、伊勢線の駅名を書いた表示板がある筈だよ。見れば、思い出したんじゃないかね」
「すると、警部は、どう考えられたんですか？」
「河芸で会うという約束はしてなかったと思うんだ。多分、伊勢線のどこかでにしろ、あいまいな約束だったんじゃないかと思うね」
「そんなあいまいなものだったんでしょうか？」
「その方が、納得できるんだよ。伊勢線は、特急『南紀』にとっては、バイパスに過ぎない。が、逆にいえば、嫌でも、通ることになるともいえる。そこで、犯人の畑山は、電話で、西田に、伊勢線に入ったら、ずっと、ホームを見ていろといったんじゃないだろうか。西田は、『南紀3号』に、乗ってから、伊勢線の駅のホームを見ていた。そして、河芸駅のホームに、畑山を見て、あわてて、津駅で降りて、タクシーに乗ったんだ。だから、西田は、四日市から、タクシーには乗らずに、津で、降りることになったんだと思うね。それなら、タクシーの運転手に向って、『ここから二つ目の駅』といったのも、納得できるんじゃないかね」
「なるほど」
と、亀井は、肯いた。
「畑山の方は、新宮から、『南紀2号』に乗って来て、津で降りたんだと思うね。津へ着いたのは、午前九時三六分だ。畑山は、河芸駅に行った。『南紀3号』が、来るまでには、河芸へ行ってなければならないからね」

「何時までにでしょうか？」
「そうだね。『南紀3号』は、四日市に、一〇時三九分に着く。そして、津着が、今いったように、一一時〇四分だ。その間は、伊勢線を、走り抜けるわけだよ。河芸駅を通過するのが、何時か、正確には、わからないが、一〇時五〇分前後だろうと思うね。従って、畑山としては、その頃までに、河芸へ行っていればいいんだ」
「畑山が、『南紀2号』で来たとすれば、九時三六分に、津へ着いていますから、一時間ぐらいで、河芸駅へ行けばいいということですね。歩いても行けたと、思いますよ」
亀井が、頭の中で、計算しながら、いった。
津から河芸まで、約六キロ。若い畑山なら一時間で、歩けるだろうと、計算したのだ。
十津川は、笑って、
「畑山は、歩いては、河芸には行かなかったと思うよ。彼は、河芸で、西田を殺したあと、津に戻って、『南紀4号』に、乗り込まなければならなかったんだ。歩くのは、無理だよ」
「しかし、タクシーには、乗っていないです」
「そうだよ。津と四日市周辺のタクシーを洗ったが、畑山を乗せた運転手は、見つからなかったと、三重県警は、いってるからね」
「すると、何で行ったんですか？」
「津駅前の景色を、思い出していたんだがね。駅前の一角に、自転車や、バイクが、一杯並んでいたじゃないか」
「そういえば、並んでいましたね。あれは、駅でも、困っているんじゃないですか。そうか、あの自転車か、バイクを、盗んで、使ったんですか」
「多分、バイクを盗んで、利用したんだと思うね。あの男のことだから、そのバイクは、きちんと、元のところへ戻しておいたと思うよ」
「畑山は、なぜ、こんな面倒なことをして、河芸で、西田を殺したんでしょうか？」

と、亀井が、きいた。
「それは、二つの効果を狙ったんだろうと思うね。一つは、西田が、新宮方面から来たと思わせることだろう。河芸で死んでいれば、誰でも、四日市か、津から、来たと思い、調べる。そして、津からタクシーで来たとわかれば、新宮あたりに、前日泊って、『南紀』で来たと思い込むからね。しかも、タクシーに乗った時間から考えて、『南紀2号』に乗って来たと思われるだろう。そうなれば、畑山は、『南紀4号』に乗ることで、アリバイが作れるんだよ。もう一つは、河芸のような、小さな無人駅で殺すことで、なぜ、そんなところで、という疑問を、持たせることが出来る。多分、この二つだろう」
「二つとも、成功しましたね。ここまで、なぜ、河芸なのかと、振り廻されましたからね」
亀井は、肩をすくませた。

5

西田が、河芸で殺された理由について、何とか、説明はつけたものの、十津川の推理が、正しいかどうかは、まだ、わからない。
十津川は、愛知県警に頼んで、西田の足跡を、洗って貰うことにした。
西田が、七月四日の午後五時に、東京のマンションを出発したことは、はっきりしている。
十津川の推理が正しければ、その日の中に、新幹線で名古屋へ来て、一泊し、翌五日に、「南紀3号」に乗ったことになる。
七月四日に、西田が、名古屋で、一泊した証拠が、欲しいのだ。
十津川は、愛知県警に、電話をかけ、捜査協力を要請し、西田の顔写真を、電送した。
これで、西田が、名古屋市内か、或いは、郊外の

ホテル、旅館に泊ったことが証明されれば、十津川の推理の正しさが、一部は、確められるわけである。

十津川が、その手配をすませ、煙草をくわえて一服しているところへ、若い日下が、戻って来た。

「だんだん、面白くなって来ます」

日下は、いやに、張り切っていた。

「佐伯のことで、何かつかんだのか？」

亀井が、きいた。

「まだ、つかんだというところまでは、いっていませんが、奴のことを、徹底的に、調べています。子供の時からです」

「ほう。子供の頃から調べているのか？」

「とにかく、徹底しようと、思いましてね。佐伯の子供の頃というのは、なかなか、面白いんです」

「どんな子供だったんだ？」

「佐伯は、東京の三多摩地区で、生れています。八王子の郊外です。小さな雑貨屋を、両親が、やっていました。ここで、佐伯は、中学まで行っているんですが、当時、一緒に、小学校、中学校へ行った友人、二人に会って、話を聞いてきました」

「それで、佐伯は、どんな子供だったんだ？」

「身体の弱い、大人しい子供だったそうですが、時々、ひどく残酷なことを、平気でやるので、気味が悪かったと、二人とも、いっています」

「どんな風に、残酷だったんだ？」

「中学生の頃、佐伯は、時々、学校を休むし、いつも青白い顔をしているので、いじめの対象になっていたそうなんです。Aという身体の大きな少年がいて、それが、いつも佐伯をいじめていたんですが、或る日、そのAが、夕方、路地を歩いていると、突然、何者かに、カミソリで、顔を切られたんです。そのやり方が、徹底していて、Aが、悲鳴をあげても、相手は、手を止めず、まるで、すだれみたいに、切られたといっています」

「佐伯がやったのか？」

「やったのは、佐伯だという噂があったんですが、本人は、しらっとした顔で、登校していたそうです。それ以来、気味悪くなって、誰も、佐伯を、いじめなくなったといいます」
「中学生の頃か」
「三年の時です」
「その他には？」
「高校は、三鷹で、彼は、電車で通ったわけですが、二年の時に、佐伯は、夏休みに、マンビキの疑いで、地元の警察で、調べられています」
「ほう」
「結果的には、証拠不十分で、釈放されたんですが、それから一週間後に、佐伯が、マンビキしたといわれたスーパーの店長が、殺されました」
「佐伯が、殺したのか？」
「いや、犯人は、チエおくれの十八歳の少年です。ハンマーで、この少年が、店長を殴るのを見た人もいたし、ハンマーの柄に、彼の指紋がついていました。ところが、この少年は、大人しい性格で、人を殺すようなことをするとは思えなかったんです。それで、佐伯が、うまくけしかけて、スーパーの店長を殺させたんじゃないかと、いうのです」
「その噂には、信憑性があるのかね？」
十津川が、半信半疑の顔で、きいた。
「佐伯の友人二人がいうんですが、子供の頃から、佐伯の話し方には、妙な説得力があったというんです。嘘とわかっていても、一時、信じてしまうというんですよ。それに、店長が殺される前ですが、犯人のチエおくれの少年に、佐伯が、急に、近づいて、話をしていたというのですよ。いつもは、馬鹿にして、無視していたのにです」
「その頃から、自分は、手を汚さず、他人をそそのかして、殺人をやらせたということか」
「そうですね。しかも、いざとなれば、自分自身でやることもある。その時には、いくらでも、残酷になれるということです」



「佐伯の家は、資産家だったのか？」
「いえ。どちらかといえば、貧しい方でした。そのために、佐伯は、アルバイトをしながら、大学を出ています」
「すると、今の資産は、どうやって、作ったのかな」
「それを、これから、調べてみようと思っているんです。どうも、犯罪の匂いがしますからねえ」
日下は、嬉しそうにいい、また、部屋を出て行った。
亀井は、そんな日下を、笑いながら見送っていたが、
「彼は、やけに張り切っていますね」
「自分の推理が当っているんで、嬉しいんだろう」
「佐伯が、過去に、何かの犯罪を起こしていれば、逮捕できますね。そうすれば、畑山との間のトラブルも、未然に、防ぐことが可能です」
「畑山の方は、大人しくしているのかな？」
「さっき、病院に電話を入れたところでは、病室で、静かにしているようです。傷の回復は早くて、片足を引きずりながらですが、歩いているそうで、一日も早く退院させてくれと、畑山は、医者や、看護婦に、いっているようです」
「佐伯の動きは？」
「佐伯も、塚本も、青木も、動きがありません。畑山が、病院へ入ってしまったので、彼等も、二、三日は、動かないんじゃありませんか。病院を、警察が見張っていることは、彼等も、考えているでしょうからね」
「そうだがね」
十津川は、難しい顔になった。
「何か、心配なことがありますか？」
亀井が、きいた。
「塚本と、青木のことだ。二人は、昔、警察にいたことがある。だから、カメさんのいうように、病院が、ガードされることは、知っていると思う。だが

ね、同時に、塚本は、自分を蔵にしたことで、警察を憎んでもいる。われわれのハナを明かそうと、考えているに違いないんだ」

「すると、あの病院が、ガードされているのを承知で、塚本は、畑山を襲うかも知れないと、思われるんですか？」

「その可能性があると、思っているんだよ」

「しかし、失敗すれば、塚本は、完全に物笑いになりますよ。その上、刑務所行きです。あの自尊心のかたまりみたいな男が、そんな危険を冒すでしょうか？」

「塚本は、自分では、手は下さないさ。カメさんのいう通り、失敗が怖いからね。だが、自分は傷つかない方法でなら、何をやるかわからん。塚本は、自分が傷つかなければ、どんなことでも、やる男だからね」

「病院の警官を、増やしますか？」

「今は、制服警官二名か？」

「そうです」

「警官を、やたらに増やしても仕方がないだろう。問題は、佐伯と、塚本が、何を考えているかだよ」

「佐伯は、畑山が死んでくれればいいと思っているに違いありません。とにかく、自分の仲間三人が、殺されていますし、畑山が、最後に、自分を殺そうとしているのを、知っているわけですからね。畑山が、死んでいなくなることを願っているのは、間違いないと、思いますよ。塚本は、別に、畑山に、何の憎しみも持ってないでしょうが、金と、警察のハナを明かそうという気持の二つで、殺そうとすると思います」

「また、青木を使って、何かやるだろうか？」

「青木は、顔を知られていますから、使わないと思いますね。病院にいる警官には、佐伯、塚本、青木の三人の顔写真を持たせてあります」

「すると、青木以外の人間を使って、畑山を殺そうとするかな」

「誰を使うかでしょうね。適当な人間がいれば、やって来るかも知れません」
「塚本主導なら、彼が、刑事時代につき合った連中を、使うだろうね」
「チンピラや、前科者ですか？」
「そうだ。佐伯が、自分で計画を立てるとしたら、他の連中を使うだろう。佐伯は、金で動かない人間はいないという信条の持主だからね」
と、十津川は、いった。その夜、十津川の心配が、現実になった。

6

午前二時近く、病院の裏口で、突然、火の手があがったのである。
ここ二、三日晴天が続いていたので、あっという間に、燃えあがった。
最初に、燃えたのは、病院のゴミの集積場所だった。
入院患者が、まず、煙りを見つけて、騒ぎ出した。病院内の警報が鳴りひびいた。
当直の看護婦たちは、入院患者を、安全な場所に移すのに、必死になった。
消防車が、一台、二台と、駈けつけて来た。
猛烈な放水が始ったが、火は、なかなか消えそうにない。
畑山のガードに当っていた二人の警官は、火事と同時に、畑山の病室に入り、彼を、叩き起こした。
「何ですか？」
畑山は、眼をこすりながら、二人の警官にきいた。
「火事だよ」
「火事？」
「ここまで、燃えて来たら、一緒に、逃げて貰うよ」
と、警官が、いった時、白衣を着た、若い男が、

飛び込んで来て、
「何をしてるんです。すぐ、逃げて下さい！」
と、怒鳴った。
警官は、その男を、当直の医師の一人と思って、
「どの辺まで、火がきたんですか？」
「この棟にも、火が廻っています。外へ出ないと、危険です」
男は、自分も、足の不自由な畑山を、抱えようとした。
その時、警官の一人が、白衣の男が、ポケットから、きらりと光るものを取り出すのを見つけた。
反射的に、警官は、相手に、体当りした。男の身体が、はね飛ばされ、手に持っていたナイフが、宙を飛び、床に落ちた。
「捕えろ！」
と、警官の一人が、怒鳴り、もう一人が、男に、組みついていった。
男は、はね起きると、組みついてくる警官を、殴りつけ、逃げ出した。
廊下に出ると、隣りの病棟が、煙りに包まれている。
男は、その煙りの中に、飛び込んだ。
続いて、警官も、飛び込もうとしたが、とたんに、炎が吹きあがってきた。熱風に見舞われて、警官は、たじろいだ。
一時間たって、やっと、鎮火に向った。
完全に、消えたのは、午前四時近くである。
二棟の病室が、焼けてしまったが、幸い、避難が早く、入院患者には、一人の犠牲者も出なかった。
当直の医者も、看護婦も、無事だった。
ただ、焼け跡を調べていた警官により、若い男の焼死体が、見つかった。
明らかに、畑山を刺し損なって、炎の中に飛び込んで行った男だった。
全身、黒こげで、顔の輪郭も、はっきりしなかった。指紋の検出も、難しかった。

一方、消防隊員は、最初に火の出た付近に、灯油のまかれた形跡のあることから、放火と、断定した。

「やはり、やりましたね」

と、亀井は、十津川と二人、火事の現場に駈けつけて、小声で、いった。

「ああ、放火し、その混乱に乗じて、畑山を殺すつもりだったんだ」

「発案者は、佐伯でしょうか。それとも、塚本でしょうか？」

「荒っぽいやり方からみて、塚本だろう。刑事時代に知り合ったチンピラを焚きつけて、やらせたんだと思うね」

「死んでしまっては、塚本との関係を、証明できませんね」

「生きていても、関係を証明できないようになっていたと思うよ」

「それにしても、よく燃えたものですね」

亀井は、焼け跡に眼をやった。病棟二つが、完全に、燃えてしまっている。

「放火のプロの仕業かも知れないな。塚本が刑事時代に扱った事件を、全て調べてみてくれ。その中に、放火事件があるかも知れん」

「やってみましょう」

と、亀井は、いった。

夜が明けると、亀井は、塚本が勤務していた千葉県警に、協力して貰い、塚本が扱った事件の中に、放火がなかったかどうか、聞いてみた。

その結果、八年前に、千葉市内で起きた放火殺人事件が、浮びあがってきた。犯人は、十八歳の少年で、自分に冷たくした叔父夫婦の家に放火し、夫婦を、殺してしまった事件である。

この少年は、現在二十六歳だが、行方不明になっている。

この男が、病院に放火したのではないかというのである。名前は、上山徹だった。

塚本が、この上山に金を与え、病院に放火させ、畑山を殺させようとしたということが十分に、考えられた。

歯型から、同一人かどうか、調べることになった。指紋は、とうとう、採れなかったからである。

上山徹の歯型が手に入り、焼死体と、同一人とわかったのは、二日後である。

しかし、塚本は、予想どおり、知らぬ存ぜぬで、押し通した。

確かに、八年前に、放火殺人事件を扱い、犯人として、当時未成年の上山を逮捕したが、その後、全く会っていないと、主張した。

二人の間に、交際があったという証拠は、なかなかつかめなかった。

愛知県警に依頼してあった分については、期待どおりの答が、もたらされた。

七月四日の夜、西田が、名古屋のホテルに泊った証拠が、見つかったのである。

名古屋市内の中区のSホテルに、西田は、七月四日、本名で、泊っていた。

フロントの話によれば、西田は、午後八時半頃、チェック・インし、翌、七月五日には、午前九時三十分頃、出発したという。

これで、どうやら、西田は、七月五日の「南紀3号」に乗ったことは、まず、間違いないことになった。

第七章　夢の島

1

捜査本部の空気は、微妙な変化を見せ始めていた。

畑山に対する同情が高まり、佐伯や、彼が傭った塚本たちに対する嫌悪感が、強くなってきたことだった。

あまり、好ましい傾向とは、いえなかった。

何といっても、畑山は、三人の男を殺した犯人である。確証がないので、逮捕は出来ずにいるが、彼が、犯人であることは、まず、間違いない。

逆に、佐伯は、畑山に狙われている男である。

十津川は、それを考えて、心配したが、亀井は、意外に、楽観的で、

「人柄で、仕方がないでしょう。実際の事件では、加害者必ずしも悪人じゃないし、被害者必ずしも善人じゃありませんからね」

と、いって、笑った。

佐伯が、塚本や、青木を、ガードマンとして傭い、勝手な真似をしていることが、刑事たちの反感を買っていることは、間違いなかった。

それに、拍車をかけることが、起きた。

日下が、佐伯の過去を洗っていく中に、ある事実を突き止めたことである。

日下は、佐伯が、生れてから現在に到るまでを、徹底的に、調べていった。

西本刑事も、日下に協力した。

その結果、佐伯について、いくつかのことが、わかった。

特に、佐伯の影の部分がである。

佐伯は、小さく貧しい雑貨屋の家庭に生れている。

中学、高校時代は、目立たない生徒だったといわれたが、高校二年の時、同じクラスの女生徒が一人、死んでいる。

「学校の裏手に、池がありましてね。その女生徒は、その池で、溺死していたんだそうです」

と、日下が、いった。

「それが、佐伯と、関係があるのかね？」

「古いことですし、確証はありません。当時の警察は、誤って、その女生徒は、池に落ちたのだろうと見たようです。ただ、二、三人の生徒が、違う見方をしていたといいます」

「佐伯が、やったと、見ていたのかね？」

「そうです」

「動機は？」

「佐伯は、彼女に、ラブレターを出していたんです。ところが、彼女に、無視されてしまった――」

「それで、殺すかね？」

「普通なら、しないでしょう。しかし、佐伯の同級生の中には、彼が、異常な性格で、その女生徒に恥をかかされたと思い、彼女を、池に突き落としたのではないかと、思った者がいたというのです」

「確証はないのだろう？」

「ありません。しかし、その友人は、ある日、佐伯が、近所の猫を、ロープで縛って、池に投げ込むのを見ているんです。驚いて、どうして、そんな残酷なことをするんだと聞いたら、佐伯は、無表情で、いつも可愛がっているのに、僕を引っ掻いたからだと、いったそうです」

「それで、その友人は、彼女もと、考えたわけか？」

「そうなんです。学校での佐伯は、大人しくて、目立たない生徒ですが、猫を殺した時の彼は、異様だった。自分が、侮辱されたと思ったときは、かッとして、平気で、残酷なことをすると、思ったとい

います。猫だけでなく、ひょっとすると、人間も、殺すのではないかと思った。その直後に、問題の女生徒が、死んだわけです」

「成程ね」

「佐伯は、自分の手で、人を殺したり、汚いことはしない。金の力で、人を傭い、それをさせるといわれて来ましたし、彼自身も、それを、自慢にしています。しかし、高校生の頃のこの出来事を考えると、必ずしも、そうとばかりはいえません」

「その頃は、人を傭う金がなかったんだろう？」

「そうです。佐伯が、現在のように、莫大な金を手に入れてからは、自分は、事件の表面には出ず、裏にかくれて、傭った人間を動かして、甘い汁を吸って来ました。しかし、そこにまで行く途中で、佐伯も、自分の手を汚したのではないか。もともと、冷酷で、かッとするところのある男なら、一人か二人、人を殺しているのではないかと考えて、西本刑事と、調べてみたんです」

「しかし、佐伯に、前科はない筈だ。ということは、尻尾を、つかまれたことがないことになる」

「そうです。しかし、佐伯が、ボロを出しかけたことは、何度かあるんです」

2

佐伯は、N大の経済を、実際には二年で中退していることがわかった。

学校をやめる時、友人に向って、学問としての経済を勉強するより、実際の場で、金を儲けて見せると、いったという。

「しかし、学校をやめて、何年間かは、思うように、金は儲からなかったようです」

と、西本が、いった。

「いろいろなことに手を出したようですが、いずれも、上手くいかなかったらしいのです。その代り、事件も起こしていません」

と、日下が、続けた。
「佐伯の家族は、どうしていたんだ？」
十津川が、きいた。
「父親は、今もいいましたように、八王子の郊外で雑貨屋をやっていましたが、佐伯が、二十八歳の時に亡くなっています。母親も、その翌年、亡くなりました。兄弟は、ありません」
「佐伯が、最初に、事件に関係したのは、いつなんだ？」
「両親が亡くなってからです。両親は、一人息子の彼に、二千万円相当の土地付きの家を残しました。佐伯は、それで、喫茶店を始めたんですが、見事に失敗しました。仕方なく、佐伯は、私立探偵社に勤めました」
「私立探偵社？」
「そうです。佐伯は、三十歳になっていて、その上、大学中退ですからね。まともな仕事がなく、新聞で募集していたN探偵社に入ったわけです」
「それが、なぜ、最初の事件なのかね？」
「N探偵社は、社長が、恐喝で逮捕されるような悪質な探偵社でしてね。職業柄、人の秘密をつかむと、それをタネに、大金をゆすっていたわけです。佐伯は、ここで働いている中に、人間の秘密は、金になるのだということを覚えたんです。そこで、佐伯は、一年して、その探偵社をやめ、自分一人で、ゆすりを働くことを考えたのです」
「しかし、ひとりで、他人の秘密を嗅ぎ出せるかね？」
「これは、想像ですが、N探偵社の社長が、有名人をゆするタネを、社長室に保管していた。それを、盗み出してから、N探偵社を、やめたのではないかと思うのです」
「なるほどね。盗まれたN探偵社の方でも、後暗いから、佐伯を、警察に突き出せないわけか」
「そうです。佐伯は、三十一歳の時、K銀行に口座を作ります。その口座へ、どっと、大金が、振り込

まれるように、なって来たのです。総額で、六千万円です。この金額は、当時のK銀行の支店へ行って、調べて来ましたから、間違いありません」
「その時、佐伯は、逮捕されなかったのか？」
「されていません。佐伯の賢いところは、全ての人間に対して、一度しかゆすらなかったことです。そのため、ゆすられた相手は、警察に知らせなかったんです」
「それが、今から六年前ということか」
「そうなんです。味をしめた佐伯は、この六千万円を元手に、佐伯興信所という会社を設立します」
「興信所？」
「所長は、佐伯で、N探偵社にいた頃、同僚だった人間三名を引き抜いて、所員にしました。N探偵社の方は、少くとも、表の仕事は、結婚や、素行調査で、その過程でつかんだ秘密をタネに、裏で、ゆすりをやっていたわけですが、佐伯の作った興信所は、最初から、ゆすりのための情報集めが、仕事だったようです」
「それで、佐伯は、儲けたのか？」
「二億円近く儲けてから、看板を下してしまいました」
「警察は、当然、この興信所をマークしたんだろうね？」
「渋谷にありましたから、渋谷署で、マークはしていました。自然に、噂が、立ちますからね。しかし、この興信所でも、佐伯は、一度しか、一人の人間をゆすらないという鉄則を設けていたので、なかなか、被害者が、警察に訴えなかったからです。ただ、所員の一人が、佐伯の言葉に逆って、区議のAという男を、もう一度、ゆすってしまったのです。ゆすられた区議の方は、これでは堪らないと思って、警察に通報したわけです」
「それで、佐伯は、逮捕されたのか？」
「いえ。逮捕されたのは、直接、区議をゆすった所員で、佐伯までは、逮捕できなかったんです。佐伯

は、すぐ、興信所を、たたんでしまいました」
「そのあとは？」
「興信所をやっている間に、佐伯はいろいろな人間と出会っています。彼の仕事が仕事ですから、立派な人物が、近づいてくる筈がありません。一攫千金を夢見ている山師のような人間か、悪人です」
「そうか。真田や、安藤たちとも、その頃、知り合ったのかも知れないな」
「私も、そう思います。興信所をやめた佐伯は、このあと、知り合った連中の立てた計画に、背後から、資金援助をすることで、その分け前を手にする方法に、切りかえて、今日まで来たわけです。彼から金を借りた連中の中には、逮捕された者もいますが、いつも、佐伯まで、逮捕の手は、伸びていません。佐伯が、資金を提供したことは、証明できても、その時に、正規の事業をするのだと信じて、資金を出したと主張し、それに、反論できないからです」
「そうやって、佐伯は、財産を、作っていったわけか？」
「その通りです。自分は、手を汚さずに、儲けて来たわけです」
「佐伯自身が、手を汚した時期というと、興信所の看板で、ゆすりをやっていた頃か」
「そうなります」
「その時期に、佐伯が、どこの誰をゆすって、いくらの金額を手にしたか、それが証明できれば、今からでも、逮捕できるな」
「出来ると思います」
「そうなれば、畑山にも、これ以上の殺人を犯させずにすむし、塚本や、青木も、押さえられるんだがね」
十津川は、期待を持って、日下と、西本を見た。
「その可能性は、どうだね？」
「佐伯自身が、当時、誰をゆすったか、喋る筈がありません。書類なども、全て、焼却していると思っ

た方がいいと思います」
と、西本が、いった。
「佐伯が、使っていた男たちからなら、聞けるんじゃないか？」
「今もいいましたように、三人の人間を使っていて、その中の一人が、逮捕されて、現在、服役中です。あとの二人も、名前は、わかっています。ただ、彼等が、自分の不利になることを、喋ってくれるかどうかわかりません」
「とにかく、彼等に会って、佐伯のことを、聞き出してみてくれ」
と、十津川は、二人にいった。

3

畑山は、現在も、焼け残った病院の病室に入っている。
警官が、ガードしていることも、同じだった。
この状態が続けば、しばらくの間、畑山の方から、佐伯に攻撃をかけることはないだろう。
「佐伯や塚本も、火事の直後ですから、動かないと思いますね」
亀井が、自分の考えをいった。
十津川は、肯いてから、
「その間に、一つ、解決しておきたい問題があるんだがね」
「和歌山線のトリックと、伊勢線の河芸駅が、使われた理由は、解明できたと思いますが」
「一番、基本的な謎が、解明されていないよ」
「何ですか？」
「殺された真田や、安藤、それに、西田が、なぜ、南紀へ行ったのか、その理由だよ。もう一つ、なぜ、釣りの支度をして行ったのかということもある。この二つを、解決しておきたいんだ」
「佐伯は、当然、知っていると思いますね」
「だが、彼は、知らんと、われわれに、いった筈だ

よ」
「畑山も、知っていましたね。だからこそ、先廻りして、南紀で、安藤や、真田を殺したんだと思いますが」
「彼も、その理由は、いわんだろうね。いえば、自分が、彼等を殺したことを、認めるようなものだからね」
「どうしますか？」
「もう一度、殺された三人の家族に、会ってみようじゃないか。安藤弁護士の奥さんは、大阪だから、大阪府警に、調べて貰うことにして、われわれは、真田の家族と、西田の知人に、会って話を聞こうじゃないか」
「真田には、妹が、いましたね」
「兄貴の生き方を批判していた妹だよ。名前は、確か、真田めぐみだ」
と、十津川は、いった。
その妹には、和歌山県警の春木警部が、会っている。兄の生き方に、批判的というのは、春木から聞いたことだった。
十津川と、亀井は、イラストの仕事をしている真田めぐみを、新宿にある事務所に訪ねた。
めぐみは、落着いた造りの事務所で、十津川たちの質問に、答えてくれた。
「兄が、釣り好きだったとは、知りませんでしたわ」
めぐみは、時々、仕事の電話に出たりしながら、はきはきと、話した。
「それは、意外だったということですか？」
と、十津川は、きいてみた。
「ええ。兄の住んでいた家を見て来ましたけど、魚拓が、一枚もありませんでしたわ。普通、釣り好きなら、二、三枚は、魚拓が、あるんじゃありません？　それに、釣りをしている写真も、見つかりませんでしたわ」
「なるほど。すると、急に、真田さんは、釣り好き

になったということですかね？」
「それとも、何か、他の目的があったのを、隠そうとして、釣り支度をして、南紀へ行ったのかも知れませんわ。兄には、昔から、そんなところが、ありましたものね」
「なかなか、辛辣ですね」
十津川が、いうと、めぐみは、眉をひそめたまま、
「兄の生き方には、反対でしたもの」
「お兄さんが、なぜ、南紀へ行ったのか、それは、わかりませんか？」
「兄からは、南紀へ行くことは、ぜんぜん、聞いていませんでしたわ。ですから、私には、わかりません」
「最近は、いつ、お兄さんに、会われたんですか？」
「ここ一年ぐらい、会っていませんわ。電話は、時々、していましたけど」
「では、最近、電話したのは、いつですか？」
「亡くなる四日前の夜だった筈ですわ」
「どんな電話をされたんですか？」
「その前に、資金ぐりが大変だという話を聞いていたもんですから、ちょっと心配になって、電話してみたんです」
「お兄さんは、その時、何といいましたか？」
「金の工面は、もうついたから安心しろといっていましたわ」
「それだけですか？」
「私は、一応、ほっとしましたけど、また、サギまがいのことをして、儲けたんじゃないかと思ったので、今、何をしているの？　と、聞いてみたんです」
「そうしたら？」
「今度は、ちゃんとした仕事をするんだと、とても、張り切っていましたわ。私が、いつも、兄のことを、虚業家と呼んでいたんで、電話で、本当の実

業家になるんだと、いっていましたわ。でも、死んでしまっては、何にもなりませんわね」
「あなたは、お兄さんの言葉を、どう受け取られました？」
「本当の実業家になるという言葉をですか？」
「ええ。お兄さんが、いいかげんな嘘をついていると思いましたか？」
「あの時は、本気で、話しているのだと思って、嬉しかったんですけど」
「けど、何です？」
「釣りの支度をして、殺されていたとなって、信じられなくなりましたわ」
「なぜですか？」
「電話の調子だと、その実業の仕事に、一生懸命になるみたいだったんですわ。とても、張り切っているように、思えましたもの。それなのに、呑気に、南紀に釣りに行っていて、殺されてしまったんですわ。疑いたくなるのも、仕方がないでしょう？」
めぐみは、肩をすくめるような仕草をした。
「お兄さんの性格を、どう思いますか？」
と、十津川は、きいた。
「負けず嫌いで、そのくせ、だらしなくて、サギまがいの商売ばかりしていて、好きじゃありませんでしたわ」
「嘘つきでしたか？」
「ええ。でも、あの電話だけは、本気だと、思ったんですけど」
「お兄さん自身だって、いつか、実業の方に、移りたいと、思っていたんじゃありませんかね？」
「そうだと思いますけど」
「もう一度、確認しますが、最後の電話で、お兄さんは、今度は、ちゃんとした仕事をするんだと、いっていたんですね？」
「ええ。とても、張り切っていましたわ」
「その、ちゃんとした仕事の中身については、何もいわなかったんですか？」

「ええ。私は、よかったなと思って、きいてみたんですけど、兄は、もう少しすると、目鼻がつくから、その時に、教えるといったんですわ。私は、本当だと思って、その時の来るのを、楽しみにしていたんですけど」
「安藤弁護士のことは、お兄さんから、聞いたことがあるそうですね？」
「ええ。和歌山県警の刑事さんに、そういっておきましたわ」
「それは、どんな時に、お兄さんから、聞かれたんですか？」
と、今度は、亀井が、きいた。
また、電話が掛って来て、めぐみは、それに、応えてから、亀井に向き直って、
「安藤さんのことでしたわね。あれは、去年、いえ、一昨年の末頃でしたわ。兄のことが心配で、大丈夫なのと、きいたら、偉い弁護士がついているから、大丈夫だといったんです。その時、聞いた名前が、安藤という弁護士でしたわ」
「お兄さんが、ちゃんとした仕事をやるといった時ですが、安藤弁護士が、一緒だということは、いいませんでしたか？」
「いいえ。でも、信用のおける友人と一緒にやるみたいなことは、いっていましたわ。その友人というのが、安藤弁護士でしたの？」
「多分、そうだったと思いますよ。彼も、お兄さんと同じように、南紀で、殺されてしまいましたがね」
「それも、聞きましたわ。向うの刑事さんに」
「お兄さんの家を見て来られたんでしたね？」
「ええ」
「南紀についてのパンフレットとか、地図といったものは、ありませんでしたか？」
「探しましたけど、ありませんでしたわ」
めぐみは、肩をすくめた。
その言葉に、嘘は、なさそうだった。

「兄を殺した犯人は、まだ、見つかりませんの？」
今度は、めぐみが、十津川に、きいた。
「残念ながら、まだ、見つかっていません」
と、十津川は、嘘をついた。
捜査本部に戻ると、大阪府警本部から、電話が入った。
柏木という警部からである。
「安藤弁護士の奥さん、いや、未亡人ですか、に会って、いろいろと、聞いてみました」
と、柏木は、落ち着いた声で、いった。
「それで、何か収穫がありましたか？」
「未亡人は、安藤が死んでから、書斎を調べたり、銀行の貸金庫を、調べてみたりしていたそうなんです。というのは、遺産のことがあったからだといっていましたね。安藤は、いわゆる悪徳弁護士で、かなり儲けていた筈なのに、預金などが、ほとんどなかったのを不審に思ったようです。その結果、亡くなった安藤が、フォーメンクラブという会社を作っていたことが、わかりました」
「フォーメンクラブ？」
「そうなんです。書類を見せて貰いましたが、資本金五千万円のレジャー産業で、フォーメンクラブという名前が示すように、四人の共同経営になっています」
「安藤、真田、西田、それに、佐伯ですね？」
「その通りです」
「南紀と、何か関係があるんですか？」
「太地という場所を、ご存知ですか？」
「知っていますよ。鯨で有名なところでしょう？」
「そうです。その太地に、フォーメンクラブは、海のレジャーランドを作っていたんです。つまり、サギで、かき集めた金を、そのレジャーランドに、注ぎ込んでいたわけです。その額は、二十億近いといわれています」
「二十億？」
「そうなんですよ。だから、佐伯が、その半分以上

の金額を、出しているんじゃありませんか。四等分すると、五億円ですが、未亡人の話では、うちには、そんな大金は、なかったといっていますから」
「太地という地名は、間違いありませんか？」
「ええ。間違いありません」
「安藤は、和歌山のホテルで殺されていますから、真田と、そのホテルで落ち合って、太地へ行く気だったのかも知れませんが、真田は、太地の手前の串本で、泊って、その上、呑気に、海中展望塔に入っていたんです。なぜ、まっすぐ、太地へ行かなかったのかな」
「その点は、私にはわかりません。何しろ、今度の南紀の事件には、直接、関係していませんのでね」
柏木警部は、軽い皮肉をいった。
確かに、その通りだった。
疑問点は、こちらで、調べるより仕方がないだろう。

4

十津川は、和歌山県警の春木警部に電話をかけて、大阪府警が調べてくれたことを話した。
「そいつは面白いですな！」
春木は、相変らず、大きな声を出した。
十津川は、彼の表情豊かな顔を思い出して自然に、微笑が浮んでくるのを覚えながら、
「太地へ行って、そのレジャーランドが、どうなっているのか、調べて頂きたいんです。安藤や、真田たちが、なぜ急に、南紀へ出かけたのか、その理由が、わかるかも知れませんので」
「それに、全員が、釣りの恰好をしていた理由もでしょう。すぐ、行って来ますよ」
春木は、元気のいい声で、いい、電話を切った。
受話器を置くと、十津川は、改めて南紀の地図を、広げてみた。

亀井が、横から、のぞいた。
「太地に、レジャーランドですか」
「ああ。あの四人が、それに、二十億円も、投資していたそうだ」
「大変な金額ですね」
「四人とも、心のどこかで、サギやゆすりといった虚業ではなく、実業につきたかったんだろう。その願望が、太地のレジャーランドになったんだと思うね」
太地は、一般には、日本の捕鯨の発祥地として知られている。
前に、テレビで、太地の鯨の博物館を紹介していたのを、十津川は、見たことがある。
巨大な鯨の骨格標本が、見事だった。
その捕鯨が、禁止されようとしている。そのあとの太地は、観光に頼ることになるのだろうか。
観光案内によれば、今でも、海洋水族館（マリナリウム）や、熱帯植物園があり、マリナリウムでは、潜水艇で、魚を見物出来るようになっているという。
そんなところなら、海のレジャーランドを作ることも可能だろう。
「南紀に、レジャーランドを作って、そこのオーナーになるというのも、悪くありませんね」
亀井が、地図を見ながら、いった。
「しかし、あの四人の場合は、サギや、恐喝で手に入れた金で、作ったんだ」
「それがわかったら、被害者は、黙っていないでしょうね」
「それかも知れないな」
「と、いいますと？」
「太地に作ったレジャーランドが、四人の出資で、しかも、多数の被害者から巻きあげた金で出来ているとわかったら、君のいう通り、告発されて、処分され、被害者への返済に、当てられてしまう。だからこそ、四人は、秘密にしていたんだ。安藤の奥さ

んも、真田の妹さんも知らなかったのは、肯ける。それが、最近になって、バレかけてきたんじゃないかね。四人は、あわてて、それに対処する必要に迫られて、佐伯をのぞく三人が相ついで、南紀へ出かけたんじゃないかな」

「各自が、釣り支度だったのは、南紀へ行く目的を、ごまかすためということですかね？」

「と、思うがね」

「しかし、そうなると、真田が、太地でなく串本へ行った理由が、わかりませんね。しかも、彼は、呑気に、海中展望塔へ、魚を見に行っています」

「私にも、それが理解できないので、春木警部に、調べて貰っているんだ」

まさか、自分たちが、太地に作ったレジャーランドにも、同じような海中展望塔を作ろうと思い、参考にするために、見学に行っていたのではないだろう。

そんな余裕があったのなら、相ついで、三人が、南紀へ行く必要はなかったことになるからである。特に、西田は、安藤が殺されたのを知りながら、行ったと、思われるのだ。

翌日の午後に、春木から、電話が入った。

「ありましたよ。問題のレジャーランドが」

大きな、その声が、春木の第一声だった。

「ありましたか」

自然に、十津川の声も、ほころんでくる。

「沖合の小さな島を買いとって、ドリームアイランドと名付けられたレジャーランドになっているんです。社長の名前は、四人のものではなく、村上恒夫になっていますが、これは、もちろん、安藤たちの名前を出しては、まずいからでしょう」

「どんな施設がその夢の島には、あるんですか？」

「宿泊施設、釣り場、グラスボート、キャンプ場、プールと、たいていのレジャー施設が揃っていますね。予定としては、水上飛行機の購入計画もあったということです」

「今も、お客が来ているんですか？」
「それが、突然、一ヵ月前に、クローズされて、従業員も、解雇されてしまったというのです。もう一ヵ、現在、このドリームアイランドは、売りに出されています」
「やはり、そうですか」
「やはりと、いうと？」
「そのレジャーランドが、佐伯たちのものだと、バレたんじゃないかと、思ったんです。そうなれば、彼等に欺されて、金を奪われた被害者たちが、黙っていない。弁護士を立てて、返済を迫るに違いありません。そこで、彼等は、一刻も早く、処分して、金を手に入れて、逃げる算段をしていたんじゃないですかね」
「なるほど」
「ただ、それなのに、真田が、呑気に、串本で、宿泊したり、海中展望塔を見物に行ったりしたのが、解せないんですが」
十津川が、疑問をいうと、春木は、
「それに対する解答は、見つかったと思いますよ」
と、あっさり、いった。
「本当ですか？」
「問題のドリームアイランドが、売りに出されていると聞いて、私は、彼等が、どんな会社に、当っていたか、調べてみたんです。とにかく、二十億円もかけたレジャーランドですからね。普通の不動産屋が、買う筈がない。買うとすれば、同じ南紀で、レジャーランドをやっている会社ということになると、思ったわけです」
「わかって来ましたよ」
「そこで、和歌山から、ずっと、レジャーランドを経営している会社に、当ってみたんです。その結果、串本の例の海中展望塔の持主であるM観光が、浮びあがって来たんですよ」
「なるほど」
「社長に会って、話を聞きました。予想どおりでし

た。一ヵ月前に、安藤が、突然、訪ねて来て、太地に作ったレジャーランドを、買ってくれないかと、いったそうです」

「それで、M観光の社長は、安藤に、何と返事をしたんですか？」

「とにかく、大きな買物だから、しばらく、考えさせて欲しいといって、一旦、帰って貰ったそうですよ。そのあとで、M観光の社長は、重役会を開いて、どうするかを諮った。串本以外にも、南紀に、もう一ヵ所、レジャーランドを作ってもいいという結論になり、値段の折り合いがつけばということになったそうです。安藤の方が持ちかけた値段は、十五億円でしたが、M観光の方は、思い切って、電話で、十億円の線を出してみた。どうせ、そこまでは、譲らないだろうと思ったのに、意外にも、相手は、それでいいといい、すぐ、来るといったというのです」

「M観光の社長は、真田には、会ったわけですか？」

「いや、会わなかったと、いっています」

「なぜですか？　二十億円も投資したものが、半額の十億円で、手に入るのなら、安いものでしょう？」

「あの社長は、こういっていましたね。やたらに、相手が、譲歩するし、急ぎ過ぎる。それで、かえって、用心してしまったとです。何か、裏があるのではないかと思い、調査したいと考えたというのですよ。一週間、取引きを待ってくれと伝えたのに、真田が、串本を訪れた。海中展望塔にも、M観光の社長を探しに来たが、会わなかったと、いっていましたね。まさか、そこで、真田が殺されるとは思わなかったそうです」

「真田は、串本では、望楼の芝にも、行っていますね。あれも、M観光の社長に、会いに行ったんですか？」

「と、思いますね。M観光は、望楼の芝にも関連の

施設を持っていますから、真田は、社長を探して、そこにも、行ってみたんじゃないでしょうか。とにかく、彼等が、一刻も早く、太地のレジャーランドを処分したいと思っていたのは、間違いありませんね。安藤、真田、西田たちが、釣りの支度をして、やって来たのは、そのためだったと、思います」

春木は、自信の籠った声で、いった。

「すると、太地のレジャーランドは、いまだに、売れずにあるわけですね？」

「そうです。M観光でも、欲しいが、どうも、うさん臭い匂いがするので、今は、手控えていると、いっていましたね」

「東京の佐伯から、M観光に、打診はないんですか？」

「電話が、二回あったそうですよ」

「やっぱり、ありましたか？」

「一連の事件のあとで、自分が、太地のレジャーランドについては、一切の権限を持っている。十億円で、売りたいと、電話して来たそうです」

「それで？」

「今もいったように、M観光の方でも、用心深くなっているし、安藤弁護士が、和歌山で殺される事件が起きたりしていますからね。欲しいが、もう少し待ってくれと、二度とも、返事をしたそうです」

「春木さんは、今度の事件の内容を、M観光の社長に、話されたんですか？」

「新聞に出ている程度のことしか、話しませんでしたよ。畑山のことは話しません。犯人がわかっているのに、なぜ、逮捕しないでいるのかといわれると、困りますからね。M観光の社長も、安藤たちを殺した犯人のことよりも、問題のレジャーランドの資金のことを、知りたがっていましたよ」

「それで、何と、答えられたんですか？」

「佐伯との取引きは、控えた方がいいとだけ、忠告しておきましたが、それで、良かったですか？」

と、春木が、きいた。

「それで、こちらも、やりやすくなります。佐伯は、ますます、焦るでしょうからね。尻尾を出せば、逮捕できます」
「何だか、聞いていると、十津川さんは、畑山より、佐伯の方を、逮捕したがっているように、見えますな」
「今でも、畑山は、佐伯を殺す気でいます。佐伯の方も、逆に、畑山を消そうとして、人を傭って、それを、実行しました。幸い、失敗しましたが」
「病院の火事は、佐伯がやらせたという証明は、不可能ですか？」
「今の段階では、不可能です。それで、私としては、佐伯を、過去の犯罪で逮捕してしまいたいのです。正しく罰することが出来れば、畑山も、納得して、全て自供するのではないかと、期待しているんですがね」
と、十津川は、いった。

5

「例のサギ事件の被害者は、被害者連盟を作っていたかな？」
十津川は、亀井に、きいた。
「作っていた筈です。弁護士もついていた筈ですよ」
「じゃあ、その弁護士に、会って来ようじゃないか」
十津川は、亀井を促して、捜査本部を出た。
四谷の小さな雑居ビルの三階に、「ゴルフ場詐取事件被害者連盟事務所」という長い貼紙がしてあった。
中には、三十七、八の男が一人いて、電話の応答をしている。
十津川たちの顔を見ると、「ちょっと待って下さい」と、いってから、なお、五、六分、電話の応答

をしていた。
それが、すむと、やれやれという顔で、
「被害者の中には、まるで、私が、金を欺し取ったみたいにいう人がいましてね。参りますよ」
と、十津川にいった。
弁護士の加藤だといい、名刺をくれた。
十津川は、警察手帳を見せた。
「安藤弁護士や、真田、西田という人たちが、相ついで殺されたので、捜査しています」
「被害者の中に、犯人がいるとでも、考えておられるんですか？」
「さあ。まだ、わからないことが多いのです。詐取された金が、どこに行ったか、金の流れは、つかまれているんですか？」
「それが、なかなか難しいので、困っています。少しでも、おさえられれば、被害者の方々に、返済できるのですがね。今のままでは、殆んど返って来ません」
「佐伯という男を知っていますか？」
「もちろん、知っていますよ。安藤や、真田たちに、資金を廻して、サギをやらせた張本人だと思っていますが、何ぶんにも、証拠がありません。連絡したら、自分も被害者だみたいなことを、いっていましたよ。立派な事業だと思って、金を貸したら、一円も戻って来ないと、いってね」
「あなたは、信じていないんですね？」
「誰が、信じられますか。彼こそ、今度のサギ事件の黒幕だと思っていますよ」
「彼等が、集めた金を、何か事業に注ぎ込んでいるということは、考えられませんか？」
十津川がいうと、加藤弁護士は、身体を乗り出すようにして、
「その線もあるとは、思っているんです。もし、彼等が、集めた金で、事業を起こしていて、それが、成功していれば、すぐにでも押さえるんですがねえ。警察は、何か見つけたんですか？」

と、きいた。
どうやら、まだ、太地のレジャーランドのことは、知らないようだった。
だが、被害者の一人、畑山は、知っていたに違いない。だからこそ、畑山は、南紀へ行って、三人を殺すことが、出来たのだろう。
十津川は、知らせようか迷ってから、今日は、黙って、帰ることにした。
事件が、どう展開していくのか、予測できなかったからである。
「被害者連盟は、知りませんでしたね」
と、帰り途で、亀井は、意外そうな顔で、十津川に、いった。
「一人か、二人の弁護士で、やっていたんじゃ無理なんだろう。しかし、誰かが知って、佐伯たちを、あわてさせたんだ」
「どんな奴でしょう？」
「どんなというより、私は、畑山だと思っているんだ」
「あいつですか」
「畑山は、頭のいい青年だ。サギにあった両親が死んだあと、ひそかに、彼独りで、佐伯たちのことを、調べていたんじゃないかと思う。そして、彼等が、集めた金を、南紀のレジャーランドに注ぎ込んでいることに気がついたんだと思うね」
「しかし、畑山は、それを、被害者連盟には知らせなかったんですね？」
「多分ね。知らせても、佐伯たちを罰することは出来ないと考えたんだろう。レジャーランドに注ぎ込んだ金が、果して、サギで得たものかどうかの判断だって難しいだろうし、告訴しても、解決までに時間がかかる。それで、何とか、金を取り戻し、佐伯たちを逮捕できても、軽い刑ですんでしまう。第一、サギかどうかの判断も、難しい事件だからね。両親を自殺に追い込んだ佐伯たちが、そんな軽い刑罰ですんでしまうことに、畑山は我慢がならなかっ

たんだと思うよ」
「それで、レジャーランドのことをタネに、佐伯たちに、ゆさぶりをかけて、南紀へ、三人を、おびき出したわけですか」
「太地のレジャーランドのことを知られたと思った佐伯や、安藤たちは、一刻も早く、売り払わなければならないと思ったんだ。畑山は、そうした彼等の動きを、注意深く見ていたんだろう。そして、南紀で、三人の男を殺したのだと思う。ただ、佐伯だけが、危険を感じて、南紀には行かなかった」
「しかし、佐伯も、焦っているでしょうね。太地のレジャーランドは、安藤たち三人が死んでしまって、今や、佐伯一人のものみたいなものですが、被害者連盟に、押さえられてしまえば、注ぎ込んだ二十億円が、パーになりかねませんからね。一刻も早く、売却してしまいたいでしょう」
「佐伯が、やたらに、畑山を消したがっているのは、そのせいかも知れないな。私は、自分が畑山に狙われているからだと、思っていたんだが、カメさんのいう通り、一刻も早く太地のレジャーランドを処分したいからかも知れん。佐伯自身、南紀へ行きたいだろうが、畑山がいては、安藤たちの二の舞いになりかねない。だから、彼を消したがっているんだな」
「その畑山は、今、入院中です。となると、佐伯は、この機会を利用して、南紀へ行くかも知れませんね」
「それがあるな」
十津川は、急に、立ち止まった。
自然に、亀井も足を止めていた。
「どうしますか？」
亀井が、きいた。
「今のところ、佐伯は、犯人じゃないんだから、動き廻るのを、止めるわけにはいかんね」
「しかし、何となく、癪ですね。さっきの弁護士に、教えてやりますか？　二十億円も注ぎ込んだレ

ジャーランドを、被害者連盟に押さえられたら、佐伯も、きっと、参ると思いますよ」
「だが、佐伯を、刑務所へは、ぶち込めないよ」
「それは、そうですが――」
「もう少し、見守っているか」
「佐伯が、どう動くか、見てみますか？」
「ゴルフ場のサギ事件では、サギの立証が難しい。それで集めた金を、太地のレジャーランドに注ぎ込んでいるとしても、佐伯は、違うというさ。前に貯えた金を出したんだといわれれば、違うことを立証するのは難しいだろう。佐伯を、ぶち込めるとすれば、前にもいったが、彼が、興信所時代にやったゆすりだ」
「それは、引き続き、日下君たちが調べていますが、被害者が、名乗り出てくれません」
「そうだろうね。被害者にしてみれば、昔の傷口に、触られるようなものだからな」
「そうなんです。佐伯がゆすったのは、地位も金もある連中ですからね。といって、こちらから、ゆすられたことがあるでしょうといっても、否定されてしまえば、それで終りですからね。一千万、二千万とゆすられたんだから、口惜しいだろうと思うのは、金のないわれわれの考えで、佐伯がゆすった連中は、そのくらいの金は、小遣いみたいなものなんです。だから、佐伯も、成功したんですがね。そんな連中に、証言させるのは、難しいですよ」
「難しいか」
十津川は、溜息をついた。
佐伯を、刑務所へ入れるのが難しいとすると、これから、どう動いていくのだろうか？

第八章　最後の旅

1

十津川は、佐伯が、動き出すだろうと、見ていた。

佐伯にしてみれば、一刻も早く、南紀のレジャーランドを処分したい筈である。東京にいたのでは、売却も出来ないだろうし、安藤たちがいなくなった今は、自分が動くより仕方がないのだ。

だが、佐伯は、自宅マンションから、動く気配を示さなかった。

畑山は、病院に入ったままである。

十津川は、本多捜査一課長に、呼ばれた。

「どうする積りでいるんだ？」

と、本多は、いきなり、きいた。

本多のいう意味は、すぐわかったが、十津川は、呆けて、

「何をですか？」

「上の方では、なぜ、畑山を逮捕しないのかと、いっている」

「殺人事件が起きたのは、和歌山県警と、三重県警の管轄の場所です。東京では、殺人未遂です。その和歌山と三重では、まだ、逮捕状が、出ていません」

「しかし、合同捜査だ。うちが、逮捕するといえば、向うも、同調してくるんじゃないかね。畑山が、犯人だということは、間違いないんだろう？」

「そうです」

「それなら、なぜ、待っているんだ？」

「証拠がありません」

「状況証拠だけでも、逮捕は出来るよ」

「部長が、そういっているんですか？」
「そうだ」
「もう少し、待ってくれませんか。すっきりした形で、事件を終らせたいんです」
「君は、まさか、妙なことを考えているんじゃあるまいね？」
「と、いいますと？」
「犯人の畑山に、同情しているんじゃあるまいね？」
「そんなことは、ありません」
「そんなら、いいんだがね。妙な噂が流れると、困るんだ」
「気をつけます」
と、十津川は、いった。
寡黙な本多が、これだけいうからには、それらしい噂が、出はじめているのだろう。
十津川が、自戒の気持を抱いて、捜査本部に戻ると、亀井が、緊張した表情で、
「佐伯が、消えました」
と、いった。
「消えた？　どういうことだ？」
十津川も、眉を寄せた。
「塚本や、青木の動きがおかしいので、そちらに、気をとられている隙に、佐伯があのマンションから、消えてしまったんです。今から考えると、塚本たちは、陽動作戦をやっていたんです」
亀井が、口惜しそうに、いった。
「それで、畑山の方は、どうだ？」
「病院に電話してみましたが、向うは、動きが、ないそうです」
「本当に、畑山は、あの病院に、まだ、いるんだろうね？」
「刑事が二人、畑山の警護に当っています」
「それは、知っているよ」
「その二人が、ちゃんと、畑山は、病室にいると、いっていました」

「今、午後七時か」
「七時九分です」
「佐伯が、姿を消したのは、何時頃だ？」
「わかりませんが、午後五時には、あのマンションにいたことは、間違いありません」
「とすると、今日中に、南紀には行けないな、行くとすると、明日だ」
「そうですね」
「一緒に、病院へ行ってみよう」
「畑山なら、大丈夫と、思いますが」
「安藤、真田、それに西田が、南紀へ行ったとき、畑山も、南紀にいたんだ。佐伯が、動き出したのに、畑山が、じっとしているのはおかしいんだ」
と、十津川は、いった。
「しかし、畑山は――」
「とにかく、行ってみよう」
十津川は、もう、部屋を飛び出していた。

2

病院に着くと、十津川と、亀井は、畑山の入っている三階の病室に、あがって行った。
病室の前には、若い刑事が二人、立っていた。
「畑山は、中にいるのか？」
と、二人に、十津川は、きいた。
「中にいます」
「本当にいるのか？」
「出ていませんから、いる筈です」
「見てみたいね」
十津川は、ドアを開けて、中に入った。
ベッドが、二つ並んでいた。
だが、二つとも、ベッドは、空だった。
「いないじゃないか！」
と、十津川は、怒鳴った。
二人の刑事は、顔色を変えて、

「しかし、さっき見たときは、ちゃんと、ベッドに、寝ていたんです。それに、まさか、三階の窓から、飛び降りられるとは、思いませんでした。まだ、左足は、完全に治ってはいませんから」
「だが、窓から逃げたんだ」
「しかし、どうやってですか？」
「誰か、この部屋に入らなかったかね？」
「看護婦だけです。ついさっき、検温に来ましたが」
「いつもの看護婦か？」
「そうです。平井ゆみ子という看護婦です」
「ついさっきといったが、正確には、どのくらい前なんだ？」
「三十分ほどです」
「中に、長くいたのか？」
「七、八分いて、出て来ました。畑山が、眠ったと、いっていましたが」
「だが、その間に、畑山は、逃げたんだよ」
「あの看護婦が、逃がしたんですか？」
「多分ね。畑山は、魅力のある青年だ」
「しかし、警部」
「彼女に、聞いてみろ」
と、十津川は、二人の刑事に、いった。
彼等が、あわてて、飛び出して行ったあと、十津川は、やれやれという顔で、空のベッドに、腰を下した。
「畑山も、南紀へ行ったんでしょうか？」
亀井が、窓の外をのぞいてから、十津川に、きいた。
「他に行くところは、ないよ」
「すると、われわれも、南紀に行かざるを得ませんね」
「和歌山県警や、三重県警にも、連絡する必要がある」
「それは、私が、やっておきます」
亀井が、出て行くのと、入れ違いに、さっきの刑

事二人が、戻って来た。
「やっぱり、警部のいわれる通りでした。あの看護婦が、逃がしたことを、自供しました。畑山が、可哀そうになって、縄バシゴを買って来て、渡したんだそうです」
と、刑事の一人が、十津川に、報告した。
「可哀そうというより、畑山に、惚れたんだろう」
十津川は、苦笑しながら、いった。
「彼女を、逮捕します」
もう一人の若い刑事が、息まいた。
「逮捕？　そんなことは、出来ないよ」
「しかし、犯人を逃がしたんです」
「畑山が犯人と、証明されていないんだ。今の段階ではね。だから、犯人を逃亡させたという理由で、逮捕は出来ないよ。まあ、放っておけ」
「いいんですか？」
「いいさ」
十津川は、面倒くさそうに、いった。
畑山も、佐伯も、明日、南紀に行くだろう。今更、その看護婦を逮捕しても、仕方がない。
亀井が、戻って来た。
「和歌山県警と、三重県警に、連絡しておきました」

3

十津川と、亀井は、捜査本部に戻った。
十津川は、他の刑事たちを、集めて、畑山が、逃げたことを、話した。
「私と、カメさんも、明日、南紀に行く。他の者は、塚本と青木を見つけ出して、東京に釘づけにしておいてくれ。あの二人が、南紀に来ると、面倒なことになるからね」
「佐伯は、太地のレジャーランドに行くと思われますか？」
亀井が、きいた。

「いや。まず、M観光の社長に、会いに行くだろう。南紀で、レジャーランドを買いそうなのは、M観光だけだからね」
「畑山も、それを読んで、M観光に行くでしょうか？」
「それより、畑山は、病室を抜け出したあと、佐伯に、電話しているかも知れないな」
「と、いいますと？」
「畑山は、南紀のレジャーランドのことを知り、それをタネにして、安藤たちを、南紀に誘い出して、殺した。今度も、同じ手を使うんじゃないかと思ってね。例えば、佐伯に向って、今日中に、レジャーランドのことを、被害者連盟に話すといったのかも知れない。或いは、被害者連盟の名前で、投書があったが、レジャーランドのことは本当かと、電話してもいい。佐伯が、突然、姿を消したのは、そのせいじゃないかと思ってね」
「二人は、どのルートを使って、南紀へ行くでしょうか？」
亀井は、南紀の地図を、机の上に広げた。
同じ地図を、何回、見たろうか。安藤、真田、西田の殺された場所には、朱い×印がつけてある。
「時間的に早いのは、大阪廻りだね」
十津川が、いう。
新幹線か、飛行機を利用して、大阪へ出て、紀勢本線を利用するのが、一番早く、南紀へ着ける。
次は、名古屋から、特急「南紀」で行くルートである。西田が使ったルートである。
どちらを利用するにしろ、佐伯が、M観光を訪ねるのは、間違いないだろうと、十津川は、思っている。
翌朝、十津川と亀井は、一番早い新幹線で、新大阪に向った。
車内から、和歌山県警と、三重県警に、電話をかけた。
どちらの県警も、刑事を動員して、南紀に展開さ

せ、佐伯と、畑山の動きを、監視しているという。
特に、和歌山県警では、M観光の社長に、佐伯から電話があり次第、連絡してくれるように、頼んであると、いった。
「それなら、万全ですね」
亀井が、ほっとした顔で、いった。が、十津川は、小さく首を横に振った。
「いや、まだ、心配だよ。佐伯は、自分の動きを、警察が追っていることを、知っているんだ。M観光も、警察が、監視していると思っているかも知れない。そうだとすると、電話連絡はせずに、いきなり、乗り込む可能性もある」
「なるほど」
「佐伯にしろ、畑山にしろ、予想外の動きをすると考えて、準備していた方がいいんだ」
と、十津川は、いった。
畑山には、もう、これ以上、殺人は犯させたくない。
九時〇八分に、二人は、新大阪に着いた。
駅から、改めて、和歌山県警と、三重県警に、電話をかけた。
答は同じだった。
まだ、佐伯も、畑山も、姿を見せていないという。だが、本当に、南紀に来ていないのだろうか？
「まず、串本へ行ってみよう」
と、十津川は、電話をかけ終ってから、亀井に、いった。
「和歌山県警本部には、顔出しせずにですか？」
「それは、後でもいい。春木警部も、串本へ行っているようだからね」
と、十津川は、いった。
二人は、天王寺に出ると、午前一〇時〇〇分発の特急「くろしお8号」に、乗り込んだ。これで、串本着は、一二時五八分である。
列車が動き出すと、十津川と、亀井は、手分けして、全車両を、廻ってみた。ひょっとして、佐伯

か、畑山が、乗っているかも知れないと、思ったからである。

しかし、二人とも、乗っていなかった。

すでに、串本へ着いてしまっているのか、このあとの列車に乗る気でいるのか、わからない。

（間に合えばいいが）

と、十津川は、思った。

4

和歌山県警の春木は、昨夜の中に、串本へ来ていた。

串本警察署に、臨時の指揮所を置き、部下の刑事たちと、警戒に当った。

M観光本社は、ここから、車で、七、八分のところにある。

もし、佐伯から電話があったら、すぐ、連絡してくることになっていた。

刑事たちは、佐伯と、畑山の写真を、全員が、持っている。

（佐伯と、畑山は、もう、この串本に着いているのだろうか？）

小さな町だが、観光客の多い町でもある。

今日も、天気がいいので、列車や、車で、観光客が、押し寄せて来ている。

十五、六分おきに、パトカーで、市内を廻らせているが、こう観光客が多くては、佐伯や、畑山を見つけるのは、大変である。

「今度も、佐伯は、釣り支度をして、現われるんでしょうか？」

部下の一人が、春木に、きいた。

「さあ、どうかな。カムフラージュとしては、無難だな。今日も、釣り支度をした連中が、ぞろぞろ、列車から降りて来ていたからね。だが、殺された仲間と、同じ恰好をするかな」

「縁起が悪いですか？」

「おれだったら、やらんよ」
春木は、肩をすくめて見せた。
昼の十二時を、過ぎていた。
春木は、部下たちに、昼食をすませておくように、いった。
まだ、佐伯も、畑山も見つかっていない。
東京から、十津川警部と、亀井刑事が、到着した。
午後一時少し過ぎである。
春木は、再会のあいさつをしてから、
「まだ、佐伯と、畑山は、見つからんのです」
と、眉をひそめた。
「三重県警の佐藤さんからは、連絡はありませんか？」
十津川が、きいた。
「十分ほど前に、電話がありました。三重県警は、特急『南紀』を警戒しているんですが、向うにも、二人は、姿を見せていないそうですよ」
「この時間なら、二人とも、もう、南紀へ来ていなければ、おかしいんですがね」
十津川は、自分の腕時計に、眼をやった。
「しかし、串本の町にも、M観光の事務所にも、まだ、現われていません。M観光の社長からも、連絡が、ありませんからね」
「太地のレジャーランドにも、佐伯は、現われて、いませんか？」
亀井が、きいた。
「あそこには、刑事を二人、やっていますが、まだ、何の連絡も来ないところをみると、佐伯も、畑山も、現われていないんでしょうな」
春木は、大きな声で、いった。
十津川には、不可解だった。
佐伯も、畑山も、昨夜の中に、姿を消しているのだ。
そして、佐伯は、一刻も早く、南紀に着いて、自分たちの作ったレジャーランドを処分したい筈であ

る。
畑山も、それは、知っているに違いないし、知っているからこそ、病院を脱け出して、姿を消したのだ。
「M観光の事務所には、本当に、まだ、佐伯は、来てないんでしょうか？」
十津川は、心配になって、春木に、きいた。
春木も、不安を覚えていたらしく、すぐ、M観光の事務所に、自分で、電話をかけた。
「社長の木島さんをお願いします」
と、春木は、電話口に出た女性に、いった。
「社長は、ただ今、外出しておりますが」
それが、返事だった。
春木の顔が、難しくなった。
「外出してるって、どこに行ったんだ？」
急に、声が、荒くなった。
「存知ません」
「知らんって、君。社長は、何かあれば、こちらに連絡することになっていたんだ。連絡しますと、約束していたんだ。こちらは、和歌山県警だ。わかっているのか？」
「わかっていますわ。でも、社長は、外出しているんです。申しわけありませんけど」
「どこへ行くか、いっていかなかったのかね？」
「はい」
「誰も、行先を知らんのか？」
「はい。黙って、行かれましたから」
「すぐ、行先を調べてくれ。すぐにだ。わかったか！」
春木は、大声で怒鳴って、電話を切った。
「どうされたんですか？」
と、十津川が、きいた。
春木は、憤懣やる方ないという顔で、「くそ！」と、舌打ちしてから、
「M観光の社長が、われわれとの約束を破って、黙って、外出してしまったんですよ。今、秘書の女

が、電話に出たんですが、行先はわからんというんです。いったい、何をやってるんだ！」

と、また、大声をあげた。

「おかしいですね」

十津川は、首をかしげた。

「そう。おかしい。あの社長は、何を考えているのか。この大事な時に、外出するなんて。これで、こっちの計画が、めちゃめちゃですよ」

「私は、その社長さんに会ったことがないんですが、どんな人物ですか？」

と、十津川は、きいた。

「どんなって、普通の人間ですよ。まあ、目先の利く商売人というところでしょうね」

「ひょっとすると、警察に協力する道よりも、商売っ気を、優先させる気になったのかも知れませんよ」

「と、いうと、われわれとの約束を破ったということですか？」

春木が、嶮しい表情になった。

「M観光にしたら、南紀に、もう一ヵ所、レジャーランドを作りたいと思っていたわけでしょう。そこに、上手い話が、持ち込まれたわけです。太地に、二十億円もかけて作ったレジャーランドを、十億円で、売却したいという話です」

「しかし、M観光の木島社長は、うさん臭い話だと思って、商談を取り止め、われわれに、協力してくれることに、なっていたんですよ」

「だが、社長は、その商談に、未練があったんじゃないかと思いますね。それに、買ってしまえば、太地のレジャーランドは、自分のものだ。何といわれようと、取引きは完了してしまっていますからね。それに――」

「それに、何です？」

「佐伯は、十億円より、更に、いくらか、値引きすると、電話で、持ちかけたんじゃないかと、思うんです。もしそうなら、M観光の社長も、大いに、食

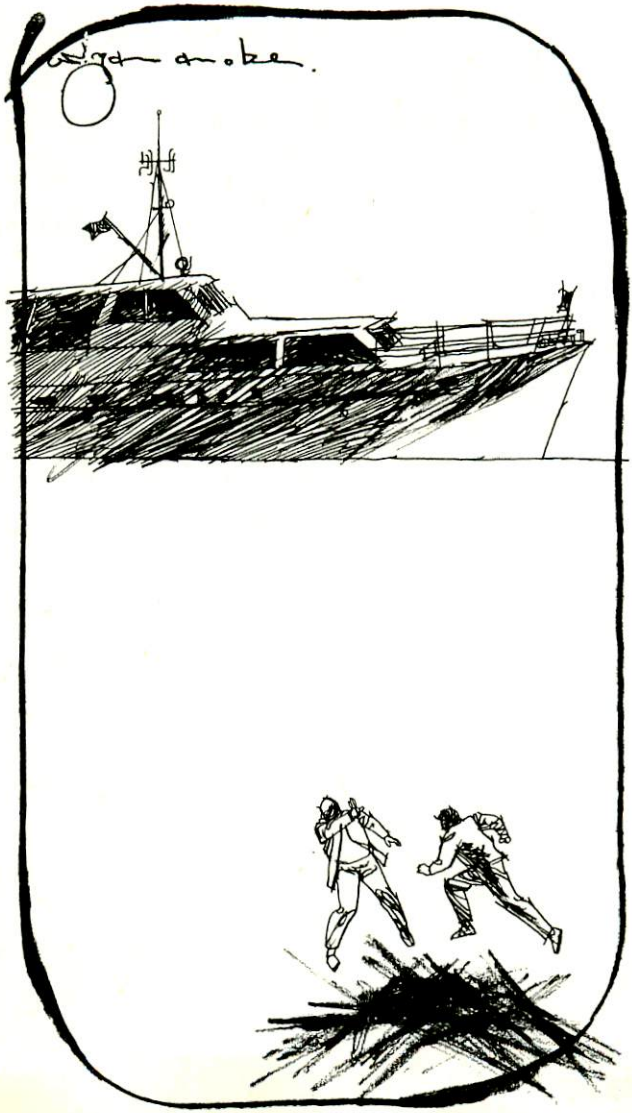
指が動いたんじゃありませんかね」
「うーん」
と、春木は、唸った。
「可能性は、あると、思われませんか？」
十津川が、きくと、春木は、急に、こぶしで、机を叩くと、
「あの野郎、警察を、欺しやがって！」
「警察に協力して、感謝状を一枚貰うより、商売で儲けた方がいいと、考え直したんでしょう。問題は、どこで、M観光の社長が、佐伯に会うことにしたかです」
十津川は、落着いた声で、いった。
「この串本の町は、パトロールしていますが、佐伯も、畑山も、見つかっていませんからね。他に、この近くというと――」
と、春木は、考えていたが、
「島かも知れないな」
「島？」
「民謡にある大島です。ここは、串本、向いは、大島の」

5

「そこにも、M観光の施設が、何かありますか？」
「確か、レストランが一つあった筈です」
「佐伯は、そこで、M観光の社長と、会う気でいるのかも知れませんね。そうなると、当然、畑山も、大島へ行っていると、みなければなりません」
「われわれも、すぐ行きましょう」
春木は、もう、椅子から、立ち上っていた。
「島まで、どのくらいかかりますか？」
「連絡船で、十分です」
「行く前に、電話をしてみた方がいいんじゃないですか」
と、十津川は、いった。
すでに、佐伯と、木島社長の間で、商談が始まっ

ているのかも知れなかったからである。
「おい！　大島にあるM観光のレストランを見つけて、電話してみてくれ！」
と、春木は、若い刑事に向って、怒鳴った。
その刑事は、電話番号を調べてから、ダイヤルを回していた。が、
「警部。大島のレストランは、今日は休みだそうです」
と、春木に向って、いった。
「誰が、休みって、いってるんだ？」
「交換手です。今日は、臨時休業だと、いっています」
「臨時休業だって？　理由は、何なんだ？」
「わかりません。とにかく、社長が、今日は、臨時休業にすると、いって来たそうです」
「社長がか」
春木は、ちらっと、十津川を見て、
「どう思われますか？　十津川さんは」
「やはり、そのレストランで、佐伯と、会う気かも知れませんね。従業員や、他の客を追い出しておいて、二人だけで、商談をしたいのかも知れない」
「そうですな。とにかく、行ってみましょう」
春木と、県警の刑事が三人、それに、十津川と、亀井は、串本署を飛び出した。
大島へは、フェリーと、巡航船の二つが、串本から出ている。
六人は、先に出るフェリーの方に乗り込んだ。
船は、有名な橋杭岩を左に見て、大島へ向った。
橋杭岩というのは、橋の杭のように、海中に並んで突き出ている岩のことである。
海は、穏やかだった。
約十分で、十津川たちを乗せたフェリーは、大島の西端にある大島港に着いた。
問題のレストランは、大島港の近くにあった。
フェリーを降りた六人は、駈け出した。一緒に、フェリーに乗って来た乗客が、バスやタクシーに乗

るでもなく、駈け出した十津川たちを、びっくりした顔で、眺めていた。
二階建のレストラン「おおしま」の入口は閉っていて、「臨時休業」の札が、かかっていた。
春木が、入口のドアを、強く叩いた。
「おい。開けろ！」
と、怒鳴る。
だが、中からは、何の応答もなかった。
春木は、三人の刑事に命じて、ドアの錠を、こわさせ、中に入って行った。
中に、人の気配はない。一階を調べ、二階に、あがっていった。
二階は、大食堂と、小さな個室に分れている。
そのどちらにも、人の姿はなかったが、四、五人用の個室のテーブルには、灰皿と、シャンパングラスが置かれたままになっていた。
灰皿には、吸殻が、たまっている。
二つのシャンパングラスにも、まだ、シャンパンが、残っていた。
「ここで、M観光の社長と、佐伯は、会ったんだと思いますよ」
十津川は、灰皿の中の吸殻を、指先で、つまみあげながら、春木に、いった。
「そうらしいですな。シャンパンをあけたところをみると、商談は、成立したのかも知れん」
春木も、そういった。
「佐伯は、かなり安く、売り飛ばしたんだと思いますね。だから、簡単に、商談が、成立したんでしょう」
「しかし、佐伯が、M観光に、太地のレジャーランドを売却したというだけでは、われわれには、どうすることも、出来ないんじゃありませんか？」
亀井が、十津川を見て、いった。
「そうだね。文句がいえるのは、ゴルフ場サギにあった被害者連盟の人たちだけだ」
「それにしても、あの社長は、約束を破りやがっ



て」
春木は、不満を口にした。
「串本の町は、パトロールしていたわけでしょう？」
と、十津川が、確認するように、春木に、きいた。
「そうです。佐伯と、畑山が、現われると考えて、パトロールしていましたがね。二人とも見つからなかったんですよ。佐伯は、どこから、この大島へ、やって来たんだろう？」
「フェリーと、巡航船だけですか？　串本から、大島への航路は」
「そうです」
「M観光は、船を、持っていないんですか？」
「かなり大きなモーターボートを持っていますよ。そうか。それで、佐伯も、この島へ来たのか」
「と、思いますね。問題は、畑山の行方です。彼は、佐伯を殺す気で、串本へ来ているに違いありませんからね」
十津川は、窓から、外を見た。間近かに、串本の町が見える。
「しかし、われわれも、M観光の社長に、してやられたんです。畑山も、佐伯を、つかまえられんでしょう」
「そうだと、いいんですがね」
十津川は、難しい顔になっていた。
M観光の社長は、商談が終ったあと、また、モーターボートで、佐伯を、送って行ったろう。
串本へ送ったとは、思えなかった。串本の町は、和歌山県警が、パトロールしているからだ。商談そのものに、問題はないとしても、木島社長にしてみれば、警察に見つかったら、気まずいに違いない。
「どのくらいの大きさのボートですか？」
と、十津川は、きいた。
「一度、木島社長に、見せて貰ったことがあるんだが、五、六人が、船の中で、寝泊り出来るんだと、

自慢していましたね」
「それなら、外洋クルーザーですよ。行こうと思えば、名古屋や、大阪へだって、楽に行ける」
「あの社長を、捕えれば、佐伯を、どこへ送ったか、わかります。とにかく、捕えなければ、腹の虫が、おさまらん」
春木は、腹立たしげに、いった。
六人は、また、串本に、引き返した。
春木は、一刻も早く、木島社長を捕えろと、部下たちを、督励していた。
十津川と、亀井は、串本署の外に出た。
「今度は、畑山も、佐伯をつかまえられないんじゃありませんかね」
と、亀井が、いった。
「船に乗っていると、思われるからかい？」
「そうです。M観光のクルーザーで、名古屋か、大阪まで、送って貰うとなったら、畑山も、手が出せませんよ」
「どこまで、送って貰うかによるんだが」
と、いってから、十津川は、急に、串本署の中へ戻って行った。
春木にことわって、電話を借りると、東京に、かけた。電話口に出た日下刑事に、
「塚本と、青木は、どうしてる？」
と、きいた。
「あれから、二人とも、佐伯のマンションに戻っていたんですが、三十分ほど前に、急に、動き出しました。今、西本刑事と、清水刑事の二人が、尾行しています」
「急に、動いたんだな？」
「そうです。あたふたと、出かけて行きました。ひょっとすると、佐伯から、連絡があったのかも知れません。ちょっと待って下さい」
と、日下はいい、すぐ、また、電話口に、戻って来た。
「今、西本刑事から連絡がありました。二人は、東

京駅の新幹線ホームに、あがって行ったそうです」
「行先は？」
「新大阪までの切符を買ったといっています」
「わかった」
と、十津川は、肯いて、電話を切った。
春木が、何の電話だという顔で、十津川の方を見ている。その春木に向って、
「佐伯の行先は、大阪です」
「大阪？」
「M観光のクルーザーには、船内電話がついていたと思います。それで、連絡したとみえて、佐伯の用心棒が二人、東京から大阪に向ったということです」
「船の電話は、中継局を通るんでしたね。確認してみましょう」
と、春木は、いった。
春木は、自分で、受話器をとり船舶電話局を、呼んだ。
「M観光のクルーザー、確か、M号という名前なんだが、船内電話で、東京へ連絡しなかったかね？　こちらは、和歌山県警だ」
「東京の佐伯という方のところに、電話されましたが、和歌山県警のどなたですか？」
「春木警部だ」
「おかしいですね。ついさっきも、和歌山県警の春木様に、お答えしましたが」
交換手が、いった。
「おれが？　おれが、電話したのは、今だけだ。そいつは、ニセモノだ」
「でも、こちらで、和歌山県警に、問い合せましたところ、春木という警部はいらっしゃるし、M観光問題で、捜査しているということなので、信用して、お答えしました」
「どんな風に答えたんだ？」
「船舶電話で、東京の佐伯さんに、かけたということを、お知らせしたんです」

「それだけかね？」
「今、船はどの辺を走っているのかと、きかれましたので、串本から、大阪方面へ向っていると、お答えしました」
「そちらで、船の位置まで、わかるのかね？」
「いえ。でも、それぞれの基地局で、カバーできる範囲が決っていますから、船が、どの辺にいて、どの基地局の方へ向っているかはわかりますわ」
「おれの名前を使った男は、どんな声をしていたんだ」
「若い感じの声でしたけど、本当に、さっきの方は、ニセモノだったんでしょうか？」
「もういい」
と、春木は、いった。

6

春木の名を使ったのは、恐らく、畑山だろう。
とすれば、畑山も、すでに、大阪に向ったと考えていいようだ。
「どうしますか？　十津川さん」
春木は、眼を光らせて、十津川を見た。
「船で行ったとすると、いくらスピードを出しても、大阪へ着くのは、夜になってからだと、思いますね。ゆっくり、先廻り出来ます」
「それより、海上保安庁へ連絡して、海上で、抑えてしまったらどうですか？」
「しかし、逮捕する理由がないでしょう？　お客である佐伯を、M観光の社長は、ただ、船で送って行くだけですからね」
「そりゃあ、そうだが、大阪へやってしまったら、問題が、こじれるかも知れませんよ。畑山も、大阪へ急行しているでしょうからね」
「その通りです」
と、十津川は、肯いた。が、海上保安庁に頼むことには、賛成しなかった。佐伯を、海上で抑えて

も、何の解決にもならないからである。
といって、畑山に、佐伯を、殺させるわけにもいかないのだ。
「大阪へ行ってみますよ」
十津川は、春木に、いった。
「じゃあ、私も、行きます」
と、春木も、いう。
春木と一枝刑事、それに十津川と亀井の四人は、一五時二五分串本発の特急「くろしお23号」に、乗り込んだ。
この列車は、大阪天王寺に、一八時三一分に着く。クルーザーの時速は、せいぜい四十キロだろう。「くろしお」は、七十キロ近い。
ゆっくりと、こちらの方が、先に、大阪に着ける筈だった。
天王寺に着いた時には、すでに、大阪の街は、ネオンが、輝やき始めていた。
四人は、タクシーで、大阪府警本部を訪ねた。何といっても、大阪府警の助力を必要としていたからである。
電話で協力してくれた柏木警部とも、会った。
「問題のクルーザーが、大阪に着くのは、恐らく、十時過ぎでしょう」
と、柏木が、いった。
「大阪の港に入る時には、海上保安庁の管区本部へ届けるわけでしょう？」
春木が、柏木に、きいた。
「そうです。そうなっていますが、佐伯が、狙われているとすると、届けずに、適当な場所へ接岸して、降りてしまう可能性もありますね」
柏木は、大阪港の地図を広げて、十津川たちに見せてくれた。
一口に、大阪港といっても、広い。神戸港まで入れたら、どこかへ接岸するクルーザーを見つけるのは、至難の業だろう。
「迎えに来ている塚本や、青木には、どこへ着く

か、佐伯が、伝えていると、思うんですがね」
十津川が、いうと、柏木が、
「畑山は、知らないわけでしょう。彼は、どうやって、佐伯を、襲う気ですかね？」
「そうですね。彼は、電話の内容は、知らない筈なんだな」
「塚本と、青木の後をつけて行く気かも知れませんね」
「それなら、有難いですよ。この二人を、うちの刑事が、尾行していますから、畑山を、捕えられます」
「塚本たちは、もう新幹線で、大阪に着いている筈ですね」
春木が、いう。
その通りだった。十津川たちが、特急「くろしお23号」に乗る前に、塚本と青木は、東京駅の新幹線ホームに入っていたのだ。
あれは、午後三時前である。
一五時〇〇分発の「ひかり」がある。その「ひかり」に乗ったとすれば、新大阪着は、一八時〇八分である。
現在、午後七時（一九時）だから、すでに、大阪にいる筈なのだ。尾行している西本や清水刑事は、どうしているのだろうか？　七時半頃になって、その西本から、連絡が入った。
「東京にいる日下刑事から、警部が、そちらにおられると、聞いたものですから」
と、西本は、いってから、
「今、新大阪近くのKホテルです。塚本と青木も、このホテルに入りました。一泊するようです」
「ホテルへね」
考えてみれば、夜の十時過ぎに、船で、大阪へ着いても、この時刻では、東京へ行く列車も、飛行機もないのだ。
とすると、佐伯も、ホテルで、一泊するのだろうか？

7

対策会議が、開かれた。
「Kホテルに、畑山は、現われていません」
と、十津川は、いった。
「すると、畑山は、どうやって、佐伯をつかまえる気ですかね？　われわれでも、彼の乗るクルーザーが、どこに着くのか想像がつかないのに」
柏木が、首をひねる。
「畑山が、何も出来ないのなら、その方が、われわれも助かりますよ」
と、十津川は、いった。
新しい殺人を防ぐために、十津川たちは、集っているからだ。
「しかし、あの男が、何の成算もなしに、大阪へ来るとは、思えないがなあ」
春木が、眉をひそめた。
「モーターボートを出して、佐伯の乗ったクルーザーを追いかければ、上陸地点は、わかるんじゃありませんか？」
亀井が、遠慮がちに、きいた。
「それは、無理だね」と、春木が、いった。
「こんなに暗くなっては、追跡は、出来ないよ。それに、普通のモーターボートじゃ、あのクルーザーには、追いつけないんじゃないか」
「レーダーのついている船なら、追跡が、可能じゃありませんか？」
と、十津川が、口を挟んだ。
「しかし、そんな船を、畑山が、傭えますか？　漁船にも、今は、レーダーがついていますが、漁船のレーダーは、性能が悪いし、第一、追いつけませんよ」
「海上保安庁の巡視船なら――？」
「われわれは、海上保安庁に、出動は、要請していませんよ」

「それは、わかっていますが、今、ちょっと気にかかることを、思い出したんです」
「どんなことですか？」
「例のサギ事件の被害者は、四百三十六名もいます。その中には、公務員もいたような気がするんですよ。警察官もいたし、海上保安庁の職員もいたんじゃなかったかと思います。被害者連盟を通して、畑山と、彼等は、知り合っているとすると、もし、その人間が、大阪管区の職員で、巡視船に乗り込んでいるとしたら、畑山に頼まれて、問題のクルーザーの位置を、知らせるかも知れません」
十津川がいうと、他の連中の顔色が変った。
亀井が、すぐ、東京に電話をかけた。被害者名簿の写しは、捜査一課に、保管している筈だった。
亀井は、紅潮した顔で、振り向くと、
「ありましたよ。桜井和雄という海上保安庁の職員ですが、東京から、あの事件のあと、大阪へ移っています」
と、いった。
今度は、柏木が、大阪の管区本部へ電話を入れた。
十津川の不安が、適中した。
桜井和雄、四十六歳は、現在、大阪港の監視にあたる四十九トンの巡視艇の責任者になっているというのである。
しかも、柏木が、聞いたところでは、大麻を積んだ小型船が、夜の十時頃に、大阪港に入るという情報があって、桜井が艇長で、その巡視艇が、出動したところだという。
巡視艇には、レーダーも、強力なサーチライトも、積み込まれている。
「偶然とは、思えませんね」
と、十津川は、いった。
「つまり、桜井艇長が、畑山に頼まれて、佐伯の乗ったクルーザーを、探しに出たということですか？」

「そうです」
「どうしますか？」
「畑山は、その巡視艇に、乗っているわけじゃないから、クルーザーを発見し、接岸場所を聞き出しても、艇長の桜井は、畑山に、連絡しなければ、ならないわけです」
「ええ」
「艇内からは、無理だから、上陸してからということになります」
「これから、管区本部へ行って、戻って来たところを、押さえますか？」
柏木が、きくと、十津川が答えるより先に、春木が、
「そりゃあ、出来ない。その桜井艇長が、畑山に頼まれて、出港したという証拠はないんだから」
と、いった。
その通りなのだが、だからといって、疑いがあるのに、放っては、おけなかった。
「とにかく、管区本部へ行ってみましょう」
と、十津川は、いった。

8

午後十時。
Kホテルから、塚本と青木が、外出した。
ロビーで張り込んでいた西本と清水が、すぐ、二人の尾行を始めた。
同じ頃、十津川たちは、海上保安庁の大阪管区本部に、いた。
彼等は、桜井和雄の乗った巡視艇が、帰港したら、すぐ、艇長に会わせてくれと、本部長に頼んだ。
「われわれも、海上からの大麻の持ち込みに関心があるので、艇長に、話を聞きたいのですよ」
と、大阪府警の柏木警部が、いった。まさか、本当のことは、いえなかったからである。
本部長は、半信半疑の表情だったが、拒否はしな

かった。
本部の窓から、大阪港の夜景が見えた。
停泊している船の灯が、きれいだった。
「そろそろ、時間ですね」
と、春木が、いった。
午後十時二十二分。
本部長が、十津川たちのところへ、足を運んで来て、
「間もなく、巡視艇『やくも』が、帰って来ます。大麻を運んでいる船は、見つからなかったそうです」
と、知らせてくれた。
「桜井艇長とは、会えますか？」
十津川が、いった。
「しかし、問題の船は、見つからなかったんですよ」
「海からの密輸の実態を聞きたいんです。ぜひ、お願いします」
「それは、構いませんが――」
と、本部長は、肯いてくれた。
十二分後に、巡視艇「やくも」が、接岸した。
十津川たちは、降りて来た艇長の桜井を、取り囲んだ。
「大麻の海上からの密輸の状況について、お聞きしたいんですよ」
と、大阪府警の柏木が、いった。
「まあ、いいでしょう」
桜井は、肯いて、他の乗組員を、先に帰らせた。
桜井が、ひとりだけになると、和歌山県警の春木が、
「佐伯の乗ったクルーザーは、どこに接岸するんです？」
と、きいた。
「何のことか、わかりませんね」
「あなたは、同じ被害者の畑山から頼まれたんじゃありませんか？　佐伯の乗ったクルーザーが、串本

から大阪に向っている。どこに着くのか調べてくれと。それで、あなたは、大麻を運ぶ船があるという通報があったと嘘をついて、巡視艇を出させた。違いますか？」

「通報があったが、見つからなかった。それだけですよ」

桜井は、それだけいって、歩き出した。

「畑山は、佐伯を殺す気ですよ。それでも、いいんですか！」

十津川が、相手の背中に向って、叫んだ。

桜井の足が、止まって、振り向いた。

「まさか、そんな？」

「畑山は、もう三人殺している。四人目の佐伯も殺しますよ」

「そんな筈はない。畑山君は、ただ、佐伯をつかまえて、詐取した金を返させたいだけだといった。被害者連盟からも、頼まれているといったんだ」

「違いますね。彼は、殺す気です。M観光のクルーザーを見つけたんですね？」

「見つけた」

「接岸地点も、聞き出したんですね？」

「われわれが、海上保安庁の人間とわかって、正直に話してくれましたよ」

「どこです？」

「淀川の河口のF埠頭です」

「畑山に知らせましたか？」

「知らせました」

「しかし、どうやってです？　電話はしてないんでしょう？」

「今日、彼が訪ねて来た時、打ち合せをしたんですよ。クルーザーが、接岸しそうな場所に、北からナンバーをふっていったんです。わかったら、その数だけ、艇の上から、懐中電灯を点滅させるんですよ。畑山君は、K桟橋で、見ていることになっていました」

「じゃあ、畑山は、今頃、F埠頭に向っています

ね？」
「ええ。しかし、殺すというのは、本当なんですか？　彼は、ただ、金を返させたいだけだと、いっていましたがね」
「時間がないので、失礼します」
十津川たちは、とめておいたパトカーに向って、駈け出した。

9

小さなF埠頭は、最近では、ほとんど、使われていなかった。
駐車場代りに、五、六台の車が、とめてある。
畑山は、その車のかげに腰を下して、じっと蹲っていた。ジャンパーのポケットには、大阪に着いてから買ったナイフが一丁だけ入っている。それで、佐伯を殺せるかどうかわからない。刺せなかったら、佐伯に組みついて、夜の海に一緒に落ちてもいいと思った。
もう、佐伯が、最後だからだ。
明りをつけて、船が近づいて来るのが見えた。大型のクルーザーだ。
ゆっくりと、畑山は、車のかげから立ち上った。クルーザーが、接岸し、男の影が二つ、船から降りた。二人は、握手し、片方が、もう一度、船に乗った。
船が、埠頭を離れて行く。
男が一人、埠頭に、残った。
畑山が、近寄って行った。
「佐伯さん」
と、声をかける。
ぎょっとした顔で、男が、振り向いた。
その時、乱れた足音が、近づいて来るのが聞こえた。
ぼんやりした明りの中に、塚本と青木が、血相を変えて、駈けて来るのが見えた。

佐伯は、ほっとした顔で、「こっちだ。早く来てくれ！」と、怒鳴った。
その笑顔が、急に消えた。
塚本たちのうしろから、男が二人、追いすがって、組みついたのだ。
畑山は、ナイフを取り出して、佐伯に迫った。
「畑山、止めろ！」
と、背後で、刑事の叫ぶ声が、聞こえた。
佐伯が、後ずさりした。
パトカーが、一台、二台と埠頭に、突っ込んで来た。
「おれを殺す気か？」
佐伯が、蒼い顔で、畑山を睨んだ。
パトカーが、急ブレーキをかけて、次々に止まる。
「畑山、止めろ！　止めるんだ！」
何人もの叫ぶ声が、畑山に聞こえた。
畑山は、ナイフを持って、佐伯に、突進した。ナイフは、かわされた。が、そのままの勢いで、佐伯と一緒に、夜の海に、転落した。
十津川が、飛び込んだ。
続いて、春木や、柏木、そして、亀井も、飛び込んだ。

10

畑山と、佐伯は、助けあげられ、病院へ運ばれた。
畑山は、安藤、真田、西田の三人を殺したことを認めて、逮捕された。
畑山の自供で、わかったことが、いくつかある。
畑山は、佐伯たちが、詐取した金を、太地のレジャーランドに注ぎ込んでいるのを知った。
しかし、それを被害者連盟には知らせず、安藤たちを殺す道具に、使ったのだ。
畑山は、南紀のM観光の人間だと名乗って、佐伯

に、電話をかけた。

君たちが、太地に作っているレジャーランドが、ゴルフ場サギ事件で集めた金で出来たことを知っている。被害者連盟も、嗅ぎつけて、弁護士が、法的に、返済させようとしている。今のうちに、M観光に、売却しないかと、話したのである。

あわてた佐伯は、すぐ、安藤たちを行かせるから、商談に応じて欲しいといい、用心のために、三人とも、釣りに行く恰好で、南紀に行くといい、各自の行く日時まで、畑山に喋ったのだ。

畑山は、和歌山で安藤を、ついで、串本で、真田を殺した。

三人目は、西田だった。

畑山は、あくまで、M観光の人間である風にして、名古屋まで来ている西田に、電話をかけた。

被害者連盟が、いよいよ、レジャーランドのことを嗅ぎつけたらしく、M観光にも、取引きがあるのではないかと、探りを入れて来ている。だから、南紀で会うのは、危険だ。伊勢線のどこかの駅で会いたい。「南紀3号」に乗ったら、伊勢線を走っている時、ホームを見ていてくれ。会いたい駅で、サングラスをかけ、ハンカチを手に持って、立っている。すぐ、その駅へ駈けつけて来てくれとである。

そうしておいて、畑山は、新宮から、午前六時四六分発の「南紀2号」で、津まで行き、津から、駅前に放置されていたバイクで、河芸まで行った。

河芸のホームで、サングラスをかけ、白いハンカチを、手に持って、立っていた。

「南紀3号」に乗って来た西田は通過中に、河芸の駅のホームに、畑山を見かけて、あわてて、津から引き返してきた。殺されるためにである。

その夜、十時頃まで静岡にいた畑山は、車を盗んで東名高速をひた走り、四谷に行った。そして佐伯の部屋にダイナマイトを投げ込み、また静岡のホテルに戻ったのである。

それが、畑山の自供で、わかったことだった。

佐伯は、翌日退院した。

日下たちが、まだ、ゆすりの証拠がつかめないので、佐伯は、逮捕されないだろう。しかし、新聞が、今度の事件を書き立てたために、太地のレジャーランドのことは、公けになってしまった。

被害者連盟の弁護士は、レジャーランドの差押さえの手続きをとることにした。

M観光は、太地レジャーランドの買収を撤回すると発表した。これが、どうなるか、まだわからない。

わかっているのは、佐伯の過去をあばき出すという作業を、十津川が、中止することはないということだった。

（完）

小説現代　昭和六〇年一〇月号～一二月号連載

南紀殺人ルート

昭和六一年四月一五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価六八〇円

著者―西村京太郎 ©1986 KYOTARO NISHIMURA Printed in Japan

発行者―野間惟道

発行所―株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二　電話東京(〇三)―九四五―一一一一(大代表)

印刷所―凸版印刷株式会社　製本所―大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

ISBN4-06-181245-9 (0)　(文二)

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

金額はすべて定価です

ユーモアミステリー
東西南北殺人事件 赤川次郎 580円

ユーモアミステリー
起承転結殺人事件 赤川次郎 640円

長編青春怪奇ミステリー
沈める鐘の殺人 赤川次郎 640円

ユーモアミステリー
冠婚葬祭殺人事件 赤川次郎 600円

長編ユーモアミステリー
三姉妹探偵団 赤川次郎 640円

長編ユーモアミステリー
三姉妹探偵団2 キャンパス篇 赤川次郎 640円

長編ユーモアミステリー
三姉妹探偵団3 珠美・初恋篇 赤川次郎 640円

ユーモアミステリー
人畜無害殺人事件 赤川次郎 640円

長編勝負師ロマン
ばいにんぶるーす 阿佐田哲也 640円

痛快ユーモアピカレスク長編
先天性極楽伝 阿佐田哲也 660円

書下ろし本格長編推理
卑弥呼殺人事件 阿井渉介 640円

書下ろし本格旅情ミステリー
能登・泣き砂の殺意 阿井渉介 640円

サラリーマン官能小説
オフィスガールの更衣室 阿部牧郎 680円

サラリーマン官能サスペンス
誘惑調査室 阿部牧郎 660円

長編学園官能小説
誘惑教室 阿部牧郎 680円

長編官能ピカレスク小説
誘惑魔 阿部牧郎 680円

長編サラリーマン官能小説
誘惑夫人 阿部牧郎 680円

冒険佳城の名推理
天井のとらんぷ 泡坂妻夫 640円

一〇〇〇万円長篇小説賞佳作入選作
拳の伝説 荒尾和彦 620円

書下ろし黄金の驚の秘密
義経埋宝伝説殺人事件 荒巻義雄 660円

新たな旅立ちを描く長編
鳥の歌[上][下] 五木寛之 各660円

歴史ミステリー織田信長推理帳
修道士の首 井沢元彦 620円

長編サスペンス推理
六歌仙暗殺考 井沢元彦 580円

●乱歩賞SPECIAL 探偵は芥川龍之介
ダビデの星の暗号 井沢元彦 680円

長編歴史ミステリー 織田信長推理帳
五つの首 井沢元彦 640円

ハードボイルド・ロマン
透明な牙 生島治郎 680円

非情のハードボイルド
兇悪の拳銃 生島治郎 640円

長編勝負師ロマン
ぎゃんぶるハンター 生島治郎 680円

書下ろし探偵隊の黒い野望
シーラカンス殺人事件 内田康夫 640円

名機"ゼニガタ"の驚細胞
パソコン探偵の名推理 内田康夫 640円

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

書下ろし 標高殺人事件
赤い雪崩
太田蘭三 620円

書下ろし長編異色推理
破牢の人
太田蘭三 620円

書下ろし山岳渓流推理
餓鬼岳の殺意
太田蘭三 640円

書下ろし乱歩賞受賞第一作
七年目の脅迫状
岡嶋二人 640円

書下ろし競馬ミステリー
あした天気にしておくれ
岡嶋二人 660円

事件だ出番だ山本山コンビ
三度目ならばABC
岡嶋二人 640円

●乱歩賞SPECIAL 心理サスペンス
チョコレートゲーム
岡嶋二人 680円

書下ろし青春ユーモア推理
とってもカルディア
岡嶋二人 640円

プロ野球情報戦ミステリー
ビッグゲーム
岡嶋二人 680円

書下ろし郁会派ハードボイルド
野獣駆けろ
大沢在昌 620円

書下ろし国際冒険小説
スペイン灼熱の午後
逢坂剛 680円

愛のミステリー長編
逆光のなかの女
落合恵子 640円

長編マイホーム・サスペンス
早坂家の崩壊
大谷羊太郎 680円

●乱歩賞SPECIAL カラオケパーティ殺人事件
偽装スキャンダル
大谷羊太郎 680円

書下ろし海洋パニック小説
炎のタンカー
岡本好古 660円

バイオレンス・ロマン
私設断頭台
勝目梓 620円

欲望の長編ロマン
絢爛たる檻
勝目梓 640円

長編凄絶バイオレンス
柩の十字架
勝目梓 640円

ハード・バイオレンス
女教師に捧げる鉄拳
勝目梓 600円

書下ろしミステリー・ロマン
仮面の火祭り
勝目梓 660円

復讐ハードミステリー
闇が裂ける
勝目梓 680円

長編ハードバイオレンス
殺し屋
勝目梓 640円

精選・情事の現場12
肉狩り
勝目梓 640円

書下ろし旧制三高殺人事件
リア王 密室に死す
梶龍雄 640円

書下ろし旧制二高殺人事件
若きウェルテルの怪死
梶龍雄 660円

書下ろし旧制四高殺人事件
金沢逢魔殺人事件
梶龍雄 620円

●乱歩賞SPECIAL 美女伝説殺人事件
奥鬼怒密室村の惨劇
梶龍雄 680円

書下ろし旧制一高三高殺人野球戦
青春迷路殺人事件
梶龍雄 680円

歴史ミステリー福沢諭吉の推理
咸臨丸風雲録
海渡英祐 660円

書下ろし医学ロマン
美貌のメス
門田泰明 640円

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

金額はすべて定価です

書下ろし医学ロマン
愛憎のメス 門田泰明 640円

書下ろし医学ロマン
狂らん瀾のメス 門田泰明 660円

書下ろし銀座ママは名探偵
知りすぎた女 川上宗薫 620円

長編官能サスペンス
復讐する女 川上宗薫 640円

長編官能サスペンス
撮された女 川上宗薫 660円

書下ろし推理 悪女の挑戦状
水晶占い殺人事件 風見玲子 640円

書下ろしSFサスペンス
星狩人 川又千秋 640円

書下ろしSFサスペンス〈星狩人〉PART2
人間牧場 川又千秋 640円

書下ろしSFサスペンス〈星狩人〉PART3
寄生同盟 川又千秋 640円

書下ろし超能力アクション
サイキック戦争 笠井潔 640円

書下ろし海賊放送局ハワイ99
殺しのヒットパレード 喜多嶋隆 660円

書下ろし青春推理
ビキニ探偵危機一髪 喜多嶋隆 660円

書下ろしスーパー伝奇バイオレンス
妖戦地帯 菊地秀行 640円

長編ハードボイルド
鎖 北方謙三 640円

書下ろし伝奇ロマン
鬼神（かみがみ）**伝説** 紀和鏡 680円

熱血！極道ロマン
パパは唐獅子牡丹 菊地昭典 640円

長編スーパー伝奇
神州日月変［上］［下］ 栗本薫 各660円

●乱歩賞SPECIAL 伊集院大介VS栗本薫
猫目石［上］［下］ 栗本薫 各680円

傑作ミステリー
伊集院大介の冒険 栗本薫 660円

傑作ミステリー
伊集院大介の私生活 栗本薫 660円

長編サラリーマン・サスペンス
明日なき巡礼たち 黒岩重吾 680円

●乱歩賞SPECIAL 奥飛騨山荘の怪火
罪の女の涙は青 日下圭介 680円

長編歴史ロマン
旅券のない旅 胡桃沢耕史 660円

書下ろしクラッシュ・ノベル
新宿純愛物語 桑原譲太郎 660円

長編カー・ミステリー
2月30日の恋人たち 小林久三 580円

教師殺人ミステリー
蝶たちの殺意 小林久三 680円

●乱歩賞SPECIAL 70兆円はここにある！
秀吉埋蔵金殺人事件 小林久三 680円

●乱歩賞SPECIAL 名門高推理研の探偵たち
ユークリッドの殺人学原論基礎篇 小峰元 680円

●乱歩賞SPECIAL 女子高名探偵の大活躍
ユークリッドの殺人学原論応用篇 小峰元 680円

長編ミステリー
青春抒情死抄 小峰元 580円

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

書下ろしハードアクション
超能力者狩り 今野敏 660円

書下ろし〈超能力者〉シリーズ
妖獣のレクイエム 今野敏 680円

書下ろし一獲千金ピカレスク・ロマン
兜ヶ町の悪ワル党 小堺昭三 660円

推理〝単身赴任の男〟
D支局長の事件簿 佐野洋 660円

長編異色ミステリー
檻の中の被害者 佐野洋 680円

書下ろし企業小説
社業に死す 咲村観 600円

長編本格推理
日本国憲法殺人事件 斎藤栄 640円

長編本格推理
黒白の奇蹟 斎藤栄 680円

●乱歩賞SPECIAL 悪夢の将棋〈最高位戦〉
新・殺人の棋譜 斎藤栄 680円

異色ミステリー
殺人スクランブル 笹沢左保 620円

本格推理 鮮やかなドンデン返し
もしもお前が振り向いたら 笹沢左保 640円

書下ろし経済小説
同族追放 斎藤吉見 640円

書下ろし経済小説
粉飾決算二十五年 斎藤吉見 660円

書下ろし経済小説
乱脈銀行 斎藤吉見 660円

書下ろし長編ロマン
天空の爪 志茂田景樹 580円

長編 復讐のバイオレンス
逃亡の報酬 志茂田景樹 680円

プロ野球ミステリー
後楽園球場殺人事件 新宮正春 600円

長編サスペンス・アクション
殺しのマウンド 新宮正春 640円

巨人・阪神戦で人が死ぬ
甲子園球場殺人事件 新宮正春 680円

書下ろし怪奇ミステリー
斜め屋敷の犯罪 島田荘司 640円

書下ろし時刻表ミステリー
死体が飲んだ水 島田荘司 680円

長編本格推理
占星術殺人事件 島田荘司 680円

都会派スリラー
殺人ダイヤルを捜せ 島田荘司 660円

書下ろし海洋冒険ロマン
裂けて海峡 志水辰夫 660円

書下ろし冒険ロマン
散る花もあり 志水辰夫 640円

書下ろしテレビ警察西北署
刑事たちの伝説 志津三郎 620円

書下ろし詐欺師ロマン
ペテン師ファミリー 宗田理 680円

社会派ハードボイルド
チャイルド・スナッチ 田中光二 600円

書下ろし海洋冒険小説
戦時標準船荒丸 谷恒生 620円

書下ろし戦時標準船荒丸II
無法還流 谷恒生 680円

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

金額はすべて定価です

長編伝奇オカルト・バイオレンス
超人類生誕秘録 ①紅孔雀の巻　谷恒生　660円

長編国際スパイ・ミステリー
ベルリンの夜に逃れて　高柳芳夫　600円

●乱歩賞SPECIAL　ベルリンの壁殺人事件
悪夢の書簡　高柳芳夫　680円

書下ろし怪奇ミステリー
狂い壁 狂い窓　竹本健治　640円

書下ろしファントム・シリーズ1
ファントム強奪　竹島将　640円

書下ろしファントム・シリーズ2
人質空中奪還　竹島将　660円

書下ろしファントム・シリーズ3
鮮血の貴婦人　竹島将　660円

書下ろしファントム・シリーズ4
灼熱の女獣　竹島将　660円

書下ろしファントム・シリーズ5
空獣狂熱祭（くうじゅうカーニバル）　竹島将　640円

長編ミステリー・ロマン
京都で消えた女　多岐川恭　680円

●乱歩賞SPECIAL　億万長者殺人事件
おやじに捧げる葬送曲　多岐川恭　680円

●乱歩賞SPECIAL　明治新政府の大トリック
倫敦暗殺塔　高橋克彦　680円

怪奇ミステリー館
悪魔のトリル　高橋克彦　640円

書下ろしキャンペーンに仕組まれた大謀略
〈移情閣〉ゲーム　多島斗志之　680円

書下ろしSF鉄道推理
急行エトロフ殺人事件　辻真先　620円

書下ろし新幹線トラベル推理
寝台超特急ひかり殺人事件　辻真先　660円

甦ったスーパースター
新顎十郎捕物帳　都筑道夫　640円

大江戸時代ミステリー
新顎十郎捕物帳2　都筑道夫　640円

書下ろし鉄壁のアリバイ崩し
瀬戸内を渡る死者　津村秀介　640円

長編官能ミステリー
幻影家族　戸川昌子　680円

●乱歩賞SPECIAL　26年目の不信の再会
火の接吻　戸川昌子　680円

書下ろし名探偵「陳展望」の推理
香港から来た男　伴野朗　620円

●乱歩賞SPECIAL　日本と中国を結ぶ連続殺人
さらば、黄河　伴野朗　680円

●乱歩賞SPECIAL　満月が招く殺人の誘惑
月霊の嘯き　鳥井加南子　680円

書下ろし新社会派推理
殺人オンライン　長井彬　620円

書下ろし社会派推理
連続殺人（サニー）**8**　長井彬　660円

●乱歩賞SPECIAL　瀬戸の陶芸殺人事件
死の轆轤（ろくろ）　長井彬　680円

書下ろし本格推理
オリンピック殺人事件　南里征典　640円

書下ろし伝奇ロマン
天草は血染めの刃　南里征典　680円

書下ろしヴィーナスの熱い罠
鍾乳洞美女殺人事件　南里征典　680円

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

リーダーの条件を描く歴史長編
秀吉覇権への道　南條範夫　640円

書下ろし乱歩賞受賞第一作
喪失荒野　中津文彦　620円

書下ろし三四郎記者事件帖
特ダネ記者殺人事件　中津文彦　640円

●乱歩賞SPECIAL 奥羽八百年黄金伝説
伊達騒動殺人事件　中津文彦　680円

長編青春サスペンス・ロマン
国境の女　夏樹静子　580円

推理傑作集
女の銃　夏樹静子　640円

長編国際情報小説
チェンマイの首　中村敦夫　660円

書下ろし冒険幻代史
ハルマゲドン黒書　中島　渉　640円

書下ろし長編推理
陽の翳る街　仁木悦子　620円

長編鉄道推理
特急さくら殺人事件　西村京太郎　580円

長編鉄道推理
四国連絡特急殺人事件　西村京太郎　680円

長編鉄道推理
寝台特急あかつき殺人事件　西村京太郎　600円

長編野球ミステリー
日本シリーズ殺人事件　西村京太郎　680円

鉄道推理
L特急踊り子号殺人事件　西村京太郎　620円

長編鉄道推理
寝台特急「北陸」殺人事件　西村京太郎　640円

●乱歩賞SPECIAL 新トラベルミステリー
オホーツク殺人ルート　西村京太郎　680円

鉄道推理
行楽特急ロマンスカー殺人事件　西村京太郎　640円

長編 新トラベルミステリー
南紀殺人ルート　西村京太郎　680円

長編医学ハードロマン
癌病船　西村寿行　580円

動物小説代表作
捜神鬼　西村寿行　600円

長編国際冒険ロマン
碧い鯱　西村寿行　680円

生命賛歌ハードロマン長編
鬼狂い（ものぐるい）　西村寿行　640円

長編クライム・ロマン
地鳴りの家　西村　望　600円

性の遍歴を描く長編
背徳ごっこ　野坂昭如　680円

お多加師匠推理帖
三味線殺人事件　野坂昭如　640円

書下ろし経済小説
偽装取引　広瀬仁紀　620円

書下ろし企業情報小説
議決・社長解任　広瀬仁紀　660円

書下ろし経済小説
銀行疑獄　広瀬仁紀　620円

書下ろし経済小説
社長追放　広瀬仁紀　640円

書下ろし犯罪ドキュメント
夕映え刑事　福田　洋　660円

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

金額はすべて定価です

書下ろしクライムノベル
殺戮者 福田 洋 620円

●乱歩賞SPECIAL 革命の父のミイラの秘密
暗号のレーニン 藤本 泉 680円

書下ろし歴史海洋冒険小説
大海盗 藤岡 諭 660円

長編本格推理
殺人行おくのほそ道[上][下] 松本清張 各580円

長編サスペンス
湖底の光芒 松本清張 660円

長編サスペンス
塗られた本 松本清張 660円

長編時代推理
異変街道[上][下] 松本清張 各680円

書下ろし浮世絵は殺しの暗号
歌麿殺人事件 水野泰治 640円

書下ろし本格推理 暗号と「私の正体」
暗殺幻葬曲 水野泰治 640円

書下ろし 流氷ロケ殺人行
知床岬殺人事件 皆川博子 620円

書下ろし古典に隠された暗号文
光源氏殺人事件 皆川博子 660円

書下ろし時代劇バイオレンス
復讐鬼 峰隆一郎 680円

長編本格推理
神より借りた砂漠 森村誠一 620円

長編本格推理
垂直の死海 森村誠一 640円

長編本格推理
捜査線上のアリア 森村誠一 640円

●乱歩賞SPECIAL 前代未聞の殺人プロジェクト
螺旋状の垂訓 森村誠一 680円

長編サラリーマン推理
社しゃと奴 森村誠一 660円

大手企業脅迫殺人事件
社賊 森村誠一 640円

長編本格推理 「行先不明列車」
銀河鉄道殺人事件 森村誠一 640円

傑作ミステリー
暗渠の牧場 森村誠一 680円

書下ろし タイトル戦で人が死ぬ
飛車角歩殺人事件 本岡 類 620円

書下ろし将棋ミステリー
女流棋士殺人事件 本岡 類 640円

書下ろし本格推理
南海航路さんぷるわあ殺人事件 本岡 類 660円

書下ろし怪奇ミステリー
闇のなかの巡礼 森 真沙子 660円

書下ろし本格トリック推理
陸奥こけし殺人事件 山村正夫 680円

異色推理 疑惑の遺体メモ
死体化粧人 山村正夫 660円

長編本格推理
ガラスの棺 山村美紗 660円

傑作ミステリー
三十三間堂の矢殺人事件 山村美紗 640円

名探偵・令嬢キャサリンの推理
ヘアデザイナー殺人事件 山村美紗 640円

長編本格推理 白猫怪死の謎
京都紫野殺人事件 山村美紗 660円